

二〇二〇年度

第一回『泥流地帯』作文コンクール作品集

募集期間

二〇二〇年六月～十月

応募資格

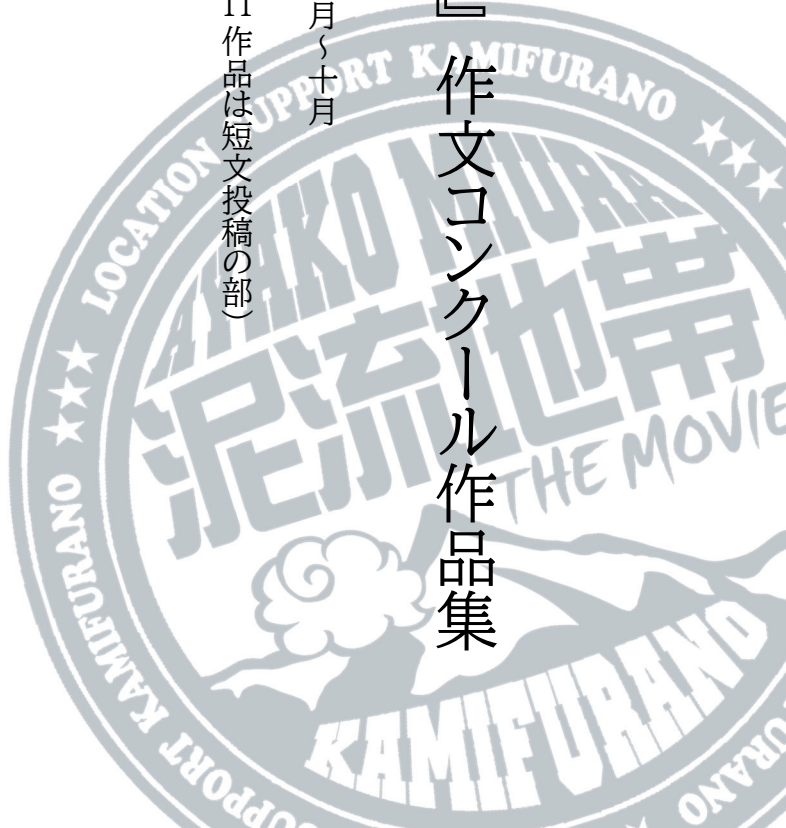
特になし

応募作品数

57作品（うち11作品は短文投稿の部）

主催
協力

『泥流地帯』映画化を進める会
三浦綾子記念文学館
上富良野町教育委員会



目次

△はじめに▽	1	■「泥まみれのいのち」 ——つれづれ『泥流地帯』考 (P.N) 青海空人	28
△第一回泥流地帯作文コンクール応募作品集▽	3	■「生きる意味とは？」 齋藤 秀光	48
△一般の部／町民一般の部▽		■「新泥流地帯」芽依が想い描いた町」 渡邊悌	50
■誓い (P.N) ギキジゅん	6	■この星で生きること (P.N) 花川あき	56
■おばあちゃんの本棚で出会った泥流地帯 (P.N) くま	7	■福子は幸せをその手に掴めるか 落合良子	58
■『泥流地帯』『続泥流地帯』を読んで 大田千夏	8	■「泥流地帯」を読んで 平野京子	60
■泥流地帯〜人生の節目節目に 大内厚子	10	■全力で生きる美しきについて (P.N) 小川波瑠	64
■『泥流地帯』『続泥流地帯』を読んで 渡辺和夫	12	■三浦小説の生き方に学ぶ 木下昭夫	66
■「泥流地帯」「続泥流地帯」を読んで		■『泥流地帯』山合の秋 第一節を読んで (P.N) 一番センター 田谷仙太	67
そして「青い池」に想うこと 伊藤三千代	16	■故三浦綾子氏が「泥流地帯」「続泥流地帯」に 込めたメッセージ考察 田中弘美	72
■『泥流地帯』を読んで 清水利章	18	■果て遠き泥流地帯 (P.N) 神楽岡マイ	76
■泥流地帯から獲得した思想 (P.N) あぐり	20	■誇りを持って努力を 久保杏耶音	80
■「泥流地帯」「続泥流地帯」を読んで (自然災害について考える) 清野牧子	21	■泥と沼 後藤夏江	81
■『信念は不滅』 森 惇	22	■人生哲学の教え——人間の可能性を拓く名著 (P.N) 石つ子賢	84
■『泥流地帯』『続泥流地帯』章題短歌 鍬塚有子	25	■いつも心に拓一を (P.N) 鵜飼鮎子	91

モヤモヤ	太田礼子	93
■「泥流地帯」と「続泥流地帯」を読んで		
感じた大切なこと	(P.N) すみれ	94
『人生の試練の意味とは何か』		
―三浦綾子「泥流地帯」を読んで―	松野富子	97
■拝啓 石村耕作先生 上島真紀子		98
■「泥流地帯」「続泥流地帯」における登場人物の 分析および総括	(P.N) 中闘士ルオジク	99
■「泥流地帯」の感動と教訓を未来へ	湊孝康	105
■『泥流地帯』、『続泥流地帯』を読んで		
私の雑感	中村愛	111
■泥流地帯全編を読んで	石川洋美	112
■「泥流地帯」を読んで	三浦倫子	113
■曾祖父の続泥流地帯を追いかけて	立松宏一	115
■泥流地帯を読んで	(P.N) なお	117
■泥流地帯を読んで	(P.N) 原みづき	118

△児童生徒の部▽		
■無報酬の努力	上村愛理	119
■節子と耕作の夕食時 関口結花・立崎希明(合作)		120
■感想と演じてみての手応え		
	(P.N) ヘキサゴン・ペンタゴン	122
■心が強い拓一	(P.N) ホロロ・キンチョ	123
■感想地帯	白田貴志	124
■夢迫人と太陽の花	(P.N) 鈴ノ花水蓮	125
■福子の苦しみ	(P.N) アルフォンソ	131
■上富良野の古き歴史	(P.N) 泥ちゃん	132
■【特別編】「十勝岳爆発災害志」より	罹災地児童の感想文	133
△Twitterの部▽		
△資料編 史実としての『泥流地帯』▽		137



△はじめに▽

■いあいやつ

『泥流地帯』映画化を進める会 会長 佐川 泰正

この度の、小説『泥流地帯』『続泥流地帯』の感想文募集にあたり年代を問わず多くの方々から力強い熟思・万感の作品をお寄せいただき心から御礼申し上げます。

応募作品を読ませていただきますと改めて三浦綾子さんは年代・職種あるいは生活環境の違いの枠を飛び越え、いつの時代にもどんな人にも慈愛に満ちた言葉を向けてくださっていることに気づかされ深く感銘するところでございます。

この作品が私達に問いかけている事は何でしょうか。

続編『雞の声(八)』に佐枝の持っていた聖書の中のヨブ記について触られています。義(ただ)しいはずの己に降りかかる甚だしい苦難の理由を、ヨブは理解するのに苦しみますがそこに完璧な解答はなく、読者が独自に解釈する余地が残されました。同様に私達をとりまく環境にも因果応報を単純に受け入れられない世界があります。

振り返ると毎年のように多くの地域で台風や地震、豪雨豪雪、火山噴火などの自然災害が発生しています。また、現在はまだに新型コロナウィルス禍に世界中の人々が不安と困難・苦

難の日々の中に閉じ込められています。

奪われた尊い命の数、浸水の深さや面積、倒壊、流失した家屋、ウィルス感染者数、ひつ迫する病床数等々、メディアを通して惨禍の様相は数値として記録されすぎさま、データ化されます。もちろんその記録は研究精査され、後の防疫、防災、減災への足掛かりとなることは言うまでもありません。しかし一方で数値化できない、記録されない「命の声」が存在します。命の声とは命のかかった叫びです。その叫びは『泥流地帯』のいたるところに登場します。

「耕作、おれが助けに行く!」「危ないっ! 兄ちゃん、駄目だっ! 兄ちゃんが死ぬっ!」「死んでもいい! 耕作、お前は母ちゃんに孝行せつ!」「泥流は自然を荒らすことはできても、人の心まで荒らすことはできないはずだ」「目に見えるものが問題じゃねえ。目に見えないものが大切じゃ。」「…数値として記録に残されない珠玉の言葉が、人生の困難・苦難をわれわれに教え、同調させ、浸透させ、そして作品を通じ心の支えとして次の時代に繋がれていきます。

改めてご応募くださいました皆様、審査にご協力いただきました皆様、心から御礼申し上げますと共に、災禍・ウィルス禍に苛まれる現状を救いに導いてくれる小説『泥流地帯』『続泥流地帯』、そして舞台となった上富良野町の振興にお力添え賜ります様お願い申し上げます。

■三浦綾子

大正十一年 旭川市出身。高等女学校卒業後に歌志内や旭川で教職に就き終戦後に離職。ほどなくして肺結核を患い、以後脊椎カリエス、パーキンソン病など幾度も病魔に襲われる。昭和三十四年に旭川営林区署に勤務していた三浦光世と結婚（後に口述筆記による二人三脚の創作スタイルを確立）。三十八年に朝日新聞社の一千万円懸賞小説に『氷点』を投稿し入選、大ベストセラーとなる。平成十一年に七十七歳で亡くなるまで『泥流地帯』『塩狩峠』など数多くの名作を世に送り出した。



■『泥流地帯』『続泥流地帯』

『泥流地帯』は昭和五十一年、続編である『続泥流地帯』は五十三年より、いずれも北海道新聞日曜版に連載され、後に新潮社から刊行。

取材にあたっては幾度となく上

富良野の地を踏み、被災経験や復興の軌跡に触れ、夫・光世氏とともに「泣きながら書いた」と述懐する三浦文学の代表作。



■あらすじ

開拓期の北海道上富良野村。小作農家に生まれた石村拓一と耕作の兄弟は、幼くして父を亡くし母とも離れ、博識で人望篤い祖父・市三郎らと貧しくも誠実な暮らしを送っていた。小作農家の暮らしは厳しく、いくら努力しても豊かにならないどころか不当に蔑まれる現実には、幼い耕作は思い悩む。

やがてその「貧しさ」によって、耕作はささやかな夢を、拓一は幼馴染・曾山福子への淡い想いまでをも踏みにじられるが、それでも兄弟は家族や恩師、友人ら上富良野の人々から支えられ多くを学び、優しく正直な青年へと成長していく。

入植から三十年、ようやく手に入れた小さな安寧を喜びあう石村家であったが、大正十五年五月二十四日、十勝岳の大噴火により発生した「山津波（泥流）」がそれらすべてを呑み込み一瞬で奪い去った。

田畑を埋め尽くす流木と泥土。硫黄を含み青白い炎のあがる「死の土地」と化したかつての美田を前に、拓一ら生き残った開拓民たちは耕作の理解を超越した驚愕のいばら道を歩み始める。

実際に集落を壊滅させ百四十四人の命を奪った十勝岳の噴火災害とそれに直面した開拓民の生きざまを題材に、正しく生きることに、人に課される試練の意味を問う感動巨編。

■主な登場人物

石村耕作…物語の主人公。村一番の秀才だが恋には鈍才

石村拓一…耕作の兄。正直さと揺るがぬ信念で弟を導く

曾山福子…兄弟の幼馴染。酒乱の父に翻弄される人生

深城節子…耕作を強く慕う美少女。非道な父に猛反発

石村市三郎…耕作の祖父で父親代わり。人望篤い賢人

深城鎌治…節子の父。高利貸、賭場、遊郭で荒稼ぎ

曾山巻造…福子の父。酒乱で博打狂いのダメ人間

吉田貞次郎…実在の上富良野村長。奇跡の復興をけん引

石村佐枝…耕作らの母。苦難を乗り越え精神的支柱に

菊川政雄…分教場の代用教員。耕作が尊敬する恩師

■実写映画化プロジェクト

小説『泥流地帯』の発表から四十五年。舞台となった上富良野町では現在、実写映画化のプロジェクトとして官民連携した取り組みが進められています。

実写版『泥流地帯』は民間事業者による全国公開の興行作品として製作される一方で、ふるさと納税により企業・個人から広く資金を募っています。

映画本編エンドロールにご寄附いただいた皆様のお名前を掲載するほか、エキストラ出演やイベント参加特典などを。ご用意。皆さんも映画作りに参画してみませんか？



泥流地帯映画化
プロジェクト
webページ

ふるさと納税で
もらえる！
泥流地帯文庫型
スマホケース
※各機種対応



公式Twitterで
情報発信中



©twitter



第一回泥流地帯作文コンクール応募作品集

へ一般の部▽

最優秀賞

■故三浦綾子氏が「泥流地帯」「続泥流地帯」に

込めたメッセージ考察 田中 弘美

【選評】▽著者、作品共に愛しているからこそ書ける作文です。三浦綾子ファンなら自分も感想文を書きたくなるのでは▽論理的で読み易く、教育者の視点、さらに女性の自立という観点からメッセージをくみとうとした意欲作です

優秀賞

■「泥まみれのいのち」

—つれづれ『泥流地帯』考 (P.N) 青海 空人

【選評】▽苦難から希望へ—その道すじを、自身の体験と重ね、自分事として地道に考察した筆力が光ります。深城の存在を重視した点も独創的

優秀賞

■『信念は不滅』 森 惇

【選評】▽著者が作品を通して伝えたかったことに共感するとともに、人生に思いを馳せ自らの経験と重ねながら力強く生きようとする決意が伝わります

佳作

■『泥流地帯』『続泥流地帯』章題短歌 鋤塚 有子

【選評】▽章題を短歌で要約するという発想が魅力です。また、いずれも的確に内容をとらえており特に『桜吹雪』『轟音』『深山峠』は秀作です▽作品中の事象と自らの心象を結びつけ、詩心のある方必見

■「泥流地帯」「続泥流地帯」における登場人物の分析

および総括 (P.N) 中闘士ルオジク

【選評】▽登場人物の分析が秀逸です▽思わず書籍を手にとりたくなる構成。自分の考えを入れ、ネタバレに配慮しながら作品の魅力伝えていきます

△町民一般の部▽

最優秀賞

■『泥流地帯』『続泥流地帯』を読んで 大田 千夏

【選評】▽耕作と同じ「教員」の目で、かみしめるように読み込んだ姿が伝わります。過去と未来の上富良野に想いをはせた未来志向の作品です▽時代を越えてなお色あせることのない魅力を町民ならではの視点で描いています

優秀賞

■『泥流地帯』『続泥流地帯』を読んで 私の雑感

中村 愛

【選評】▽今も噴煙を吐き続ける十勝岳を目の前に生活する町民の視点に共感できます

△児童生徒の部▽

最優秀賞

■無報酬の努力 上村 愛理

【選評】▽「報われない」「見返りを求めない努力」というキーワードを軸に生活を見直し、自分を肯定する作文。小説が成長の一助となったことも嬉しく読ませてもらいました▽作品から気づいた「見返りを求めない努力」を実感していることに大きな成長を感じます。著者が伝えたいテーマの一つに気づいています

優秀賞

■節子と耕作の夕食時 関口結花・立崎希明（合作）

【選評】▽短い後日談ですが、原作の人物関係をしっかりと読みこんでいることが伝わるとても愛らしい作品です▽幸福になった二人の様子が伝わってきます▽読者が気になる部分に触れ「泥流地帯」の魅力を伝えようとしています

■夢追人と太陽の花（PN）鈴ノ花水蓮

【選評】▽『泥流地帯』舞台化の外伝。生きづらさを抱えた登場人物が上演を機に同級生のやさしさにふれて再生していく。会話を多用しいききとした作品です▽『泥流地帯』を演じる上富良野高校の取り組みがわかります。この作文の続きが読みたくなりました

△Twitterの部▽

最優秀賞

■@tanizakiyomital

【選評】▽何十年経っても読者の心に残る感動、さらに年数を経るとに表情を変え新たな感動を与えてくれる本書の魅力を百四十文字で見事に表されていました。つられて再読なう。

一般の部／町民一般の部



誓い

(ペンネーム) ギキギキゅん

僕には双子の兄がいる。弱虫で優柔不断な僕に対し、兄は所謂「出来の良し」ヤツだった。勉強も運動も群を抜いてできたし、何より人望が厚い。そんな兄を羨ましいと思う反面、僕自身も頼りきっていた。なぜならうちは母子家庭だったから。そんな境遇はまさに耕一兄弟とも重なる。彼らも父親のもとで育ち、手を取り合いながら生きてきた。子どもは親を選べず、家も選べない。僕は何度もそう思った。

「もしお金があつたら」

「もし父ちゃんが出ていかなければ」

そんなタラレバの先にある悲しい現実。だけど僕にはいつも兄がいて、僕らを見守ってくれる人たちがいた。

本作の耕一もその一人だ。貧乏だけど心までは貧しくならなかった。それはやはり前向きな兄、拓一の存在が大き

い。
「人が良く生きるのはその先にある幸せを求めるためではないのだ」

拓一のこの言葉には大いに考えさせられた。そこには見返りを求めない姿があつた。だけどページをめくりながら思つた。給料が貰えるから働くんだろ。家事をやつたら「ありがとう」って言つてもらいじゃないか。「美味しい」って言われるからまた作ろうと思えるんじゃないか。そんなことを考えながら僕は気づいた。僕は歳を重ねるうちに少しずつ、しかし確実に、傲慢になつてしまつた。

「命があるってありがたいぜ」

震災後、僕の兄は言つた。あの震災で全壊や半壊を合わせ約40万棟が被害に遭つた。もちろん僕らもその一人だ。しかしそれは数だけの話ではない。それはそこにいた人たちの命や暮らしまでも奪われたことを意味する。一緒に遊んだ仲間が死んだ。勉強を教えてくれた先生が死んだ。僕をよくいじめていたヤツが生き残つた。

「なんで。なんで」

率直にそう思つたし、そう思わざるを得なかつた。だけど兄はちがつた。

「恨んだって何も始まらない」

兄の目線はいつも未来にあつた。亡くなつた者への「哀しみ」を感謝にかえて、決して弱いところは見せなかつた。その姿から僕は学んだ。前を向くことは決して過去を切り離すことじゃない。過去を受け止めながら、踏み出すことなんだ。

震災後、兄は瓦礫の中から思い出の品を探すボランティアをした。お金にもならないし、何万世帯ともなると気の遠くなる作業だ。

「そんなことするなよ」

父は兄を制止した。破片が刺さった腕を見たらそう言わずにはいらなかった。だけど兄はやめなかった。被災者の心の傷は、ガラスの破片が刺さった以上のものだを知っていたから。

僕はその真面目さに拓一を重ねた。泥流に飲み込まれたあとも彼は常に前を向いていた。大事な人を失いながらも己の方向性は見失わなかった。

一方、僕の兄は震災の半年後この世を去った。作業中に瓦礫が崩れ、その下敷きになった。即死だった。最期の言葉も、最期の笑顔もなかった。だけど手紙はあった。奥さんや僕ら家族にあてたものだった。兄はわかっていたのかもしれない。いつか突然こんな日がくることを。だけど悲しみを残すより、感謝を残そうとした。そんな兄の生き様は皆の心に強く残る。今も。きつとこれからも。

今も瞼を閉じると聞こえてきそうだ。

「もう一度生まれ変わったとしても、おれはやっぱりまじめに生きるつもりだぞ」

拓一は兄だ。だから僕は思う。寂しきや切なさと共に、強く。

そんな拓一に僕もなりた。



おはあちゃんの本棚で出会った泥流地帯

(ペンネーム) くま

祖母はクリスチャンで祖母の家の本棚には聖書やクリス教関連の本がたくさんあり、近所の人に貸し出していました。高校生の私は鉄道マニア(今でいう鉄ちゃん)だったため、『点と線』など鉄道関係の本を読み漁っていました。なんと祖母の本棚に読んだことのある三浦綾子さんの『塩狩峠』があるではないですか。祖母に「おはあちゃん、鉄道好きなの?」と聞いたたら「三浦綾子さんはクリスチャンで本を通じてクリス教の教えをわかりやすく、伝えてくれているのよ」と言いました。祖母のおすすめは『泥流地帯』と『続泥流地帯』で読んでみました。

貧乏な農家の次男坊耕作は旭川中学を首席で合格しても家庭の事情で通学できないシーンをみて、自分が学校で学べることのありがたさを感じることができました。対して裕福な家の娘節子は、家が妓楼を営むために何か裕福さに後ろめたさを感じています。この二人が磁石の引力のように恋焦がれるシーンが高校生にとっては甘酸っぱい憧れを抱きました。男女両方とも裕福な家だけど、恋愛に障壁がある『ロミオとジュリエット』とオーバーラップしてしまいました。当時、国語の先生がシャークスピアの作品を読む課題が出ていたので、『泥流地帯』と『続泥流地帯』も含めて書いて提出したら、大変良い評価を受けました。私も「こんな

恋を大人になつたらしたい」思いました。でも二人のキュービット役花井先生(耕作の同僚、節子の幼馴染)の存在が大切だと感じました。

二人が一緒になつて廃娯運動などの社会運動をするところに憧れました。私も聖書を学んで何か人の役に立ちたいと考えました。その当時、学校で進路希望調査があり、弱い人を援ける弁護士になりたくて法学部を希望していました。しかし、作品を読んで神学部で学んで牧師さんになりたいと思い、勉強に励みました。しかし、私の学力では無理であきらめました。私の進路を変える岐路になつたこれらの作品は私の青春の1ページです。現在、子供には本をたくさん読むように伝えていきます。「心が豊かになるし、自分が何をすべきか知ることができるよう」と。

さて、高2の娘が中学受験で志望校選びをしている時、あるミッシェン系の学校の体験授業(宗教の時間)で『泥流地帯』と『続泥流地帯』が紹介されました。三浦さんの作品がキリスト教の精神をわかりやすく伝えていることをそこであらためて知りました。この作品がもっと多くの人に知ってもらいたいと思います。数年前、NHKの『プラタモリ』で取り上げられた時はうれしかったです。上富良野町が行っている泥流地帯の映画化のプロジェクトに賛同します。勝手に耕作(佐藤健)、節子(杉咲花)、福子(飯豊まりえ)なんてキャストを考えてみました。ぜひ、私にも映画化プロジェクトを応援させてくださいね。



『泥流地帯』『続泥流地帯』を読んで

大田 千夏

私と『泥流地帯』『続泥流地帯』との出会いは、約10年前。上富良野町赴任が決まり、この上富良野の地で働き始めたことがきっかけだった。

旭川生まれの私にとって、旭川出身の三浦綾子さんは、作品に触れたことがない小さなころからも身近な作家のひとりであった。大病を患いながら旦那さんと二人三脚で口述筆記という手法を用いて創作することに、幼な心にも感銘を受けたことが思い出される。

大人になり、『氷点』や『銃口』『塩狩峠』などの本を読み、口述とは思えない鮮明な描写と緻密なストーリー性に惹き込まれた。それでもなかなか『泥流地帯』へと手を伸ばすことができなかったのは、『泥流地帯』が実際に起きた出来事であったことという認識はあったものの、住んだこともなく所縁のない土地の過去の出来事としかとらえることができなかつたことが所以であると言える。しかし、実際にこの上富良野町に住み、教鞭を取るうちに、上富良野町の開拓の歴史を知れば知るほど、『泥流地帯』を読むことは、私にとつてある種の使命のような気がして、やっと重い腰を上げて『泥流地帯』『続泥流地帯』を手にとった。

読み始めるまでに、あれ程時間を要したとは思えないく

らしいに、いざページをめくると時間が過ぎるのも忘れるほどに惹き込まれていった。自分が正に今、生きているこの土地でかつて起きた出来事がまるで実際に目の前に繰り広げられているような錯覚すらもちながら、読み進めることができた。

開拓者の血の滲むような努力。先祖の努力や思いを痛いほど理解しているからこそ、この土地を捨てることができない家族の心情。目の前の荒廃に途方に暮れる人々の落胆。人々のいかなる尽力も無力に思えてしまう程の自然の脅威。様々な立場からの町や復興への思い。時代は違えども、共感することばかりであった。

現代は物に溢れ、日常生活を送るうえであまり不便さを感じることもしない人が大多数であろう。一日一日を生きるのに全身全霊をかけて……ということも少ないのではないだろうか。自分が同じ境遇に立ったときに、拓一のようにただ黙々と再興に向けてひたむきに辛抱強く何年も取り組むことは私には、毛頭できないと考える。それだけ、当時の人々の原動力の強さ、意思の固さに感服するばかりである。また、『続泥流地帯』では、自分自身が教師ということもあり、自分の家に向かっている途中で教え子を失った場面では、何とも言えないやりきれない思いにかられた。また、私自身に子どもが生まれてからは、自然と親目線で作品を読み進めることが多くなり、時代に翻弄される拓一や耕作、福子や節子などの子どもたちの苦境の人生模様にも涙し

た。十勝岳噴火という自然の現象であるがゆえ、かけがえない人や大事な家や土地を失ったとてつもない悲しみや怒りをぶつけることができないこと。更に、大切な人の死や土地や家の喪失等、どんどんと降りかかる不幸や不遇にも、胸が締め付けられる思いであった。

その反面、吉田貞次郎村長の何があっても村民のために村を再興させるという揺るぐことのない強い思いに感銘を受けた。家族を泥流で、村長自身も絶望の中にいるのにもかかわらず、多くの人から非難されても、村のリーダーとして信念を曲げることなく自分が持っている以上の力を町政に注ぐ姿は、長としての鑑であると感じた。吉田貞次郎村長の功績無くしては、今の上富良野町はないのである。

『泥流地帯』『続泥流地帯』は、史実を題材にしながらもいきいきと登場人物が描かれた感動的な作品であると考ええる。しかしなぜ40年以上の作品を今、『泥流地帯』の映画化を町をあげて取り組んでいるのか。その取り組み自体には賛同するものの『泥流地帯』に心を揺さぶられた私ですら、期を逃した取り組みのように感じているのだから、読んだことのない人にとってはさらに関心の高い取り組みであるとは言い難いと感じていた。

一昨年、初めて上富良野高校の高校生による朗読劇を聞く機会があり、このプロジェクトの価値を改めて理解できたような気がした。『泥流地帯』『続泥流地帯』を過去の

素晴らしい作品と勝手に位置付けていたが、高校生が主体的にいきいきと朗読する姿を見て、『泥流地帯』『続泥流地帯』に対する印象ががらりと変わった。これからの若い人たちにも生きて届くメッセージが込められた作品なのだと再認識すると共に、町をあげてのプロジェクトに大人だけでなく高校生という若い年代が参加することに感動した。時間に余裕のある高齢者を中心とした大人だけでなく、これからの将来を担う高校生が取り組むことで、高校生自身の人生観にも、朗読劇を聞いた子どもたちやもちろん大人にも、家族の大切さや災害への備え等について考える契機になり、多くの意義があるようにも思えた。

作品の素晴らしさを後世に伝えていくことはもちろんだが、現在のように便利や道具や潤沢な資金もない中で、ただただ明るく豊かな未来を信じて開墾・復興した先人の努力のおかげで私たちの日常が成り立っていること。到底立ち向かうことができない自然の脅威にさらされながらも、強くたくましく十勝岳と共生してきたこと。その根底には、人と人とのつながり、信頼があつてこそのこと。時代が変わっても決して変わることのない、普遍的な価値を本町の教育理念でもある「ふるさとに学び 人が輝き 人がつながるかみふらのの教育」を土台にしながら『泥流地帯』『続泥流地帯』を通して未来へ紡ぎ繋いでいきたい。



泥流地帯く人生の節目節目に

大内 厚子

「あつた」

二階の納戸の奥。ほこりのかぶった箱の中。私が大事にしていた数冊のノート。手元にあつたものも含め、きつそく読書ノートを紐解いてみた。

『泥流地帯』『続泥流地帯』は、空白の時を除き、それぞれ三度出てくる。

一度目は、まだ独身。仕事をバリバリこなしていた平成になつて間もない頃。

「叱られても、叱られても、やらなきゃならんことはやるもんだ」という権太の父さんの言葉が印象的だった。」

《拓一の「大変だからと言って投げ出せば、そりゃあ簡単だ。しかしなあ、俺は思うんだ。大変だからこそ、いや、大変な時にこそ持ちこたえる馬鹿がいないと、この世は発展しないんじゃないか」さらに耕作の「人間はな、景色でも友達でも懐かしいものを持っていなければならん。懐かしさで一杯のものを持っていると、人間は、そう簡単には墮落しないものなんだ」という言葉が心に残った》

そうか、この作品に出会ってから私は三浦綾子さんのフ

アンになったんだ。その後、出版されていた本を読み尽くしたの言うまでもない。大量の本とともに、このノートを大事にとつておいてくれた母に感謝。

二度目は、子ども達が小学生になり、少し自分に余裕が出てきた平成も中頃。

《市三郎の言った言葉で「人間には二通りしかない。親切な人間と、不親切な人間。人に何かしてやりたい人間と何かしてもらいたい人間だとよ。」何と心に響く言葉か》

《耕作に語る拓一。「俺はもう一度生まれ変わったとしても、まじめに生きるぞ」という言葉、胸にしみる。権太の言っていた、しかられたって、家の仕事をなまけて学校へ行ったりしない。という言葉とも似ている。》

《すいラストシーンだった。苦難にあった時、それを災難と思ひ嘆くか、試練だと思つて奮い立つか、その受け止め方が大事とあつた。もつともだが、自分がそうできる自信は少しもない。》

久しぶりに三浦綾子さんの本が読みたいと思つた時、まっ先に手にとつたのがこの作品だった。

三度目は、子どもたちが家を離れ、主人の三回忌を迎える令和が始まつたばかりの頃。

《「なあ兄ちゃん、まじめに生きている者がどうしてひどい

目にあつて死ぬんだべな」「おれはな、耕作。あのまま泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かつたとは思わんぞ。もう一度生まれ変わったとしても、おれはやっぱりまじめに生きるつもりだぞ」

《拓一と福子の未来が見えるところで話は終わる》

これでもか、これでもかと苦難に見まわれた拓一と福子の未来に、希望の光が見え始める。私も、どんなことがあつてもくじけず、まじめに生きていきたい。拓一のように。

実家に戻り、年老いた父との二人暮らしを始めたが、四度目は、どんな感想が書かれ、どんな言葉が胸にひびくだろう。

古い読書ノートを、納戸の奥の箱にそつとしまつた。



「泥流地帯」「続泥流地帯」を読んで

渡辺 和夫

十五年前の七月、富良野、中富良野、上富良野、美瑛、旭川と北上するドライブを楽しんだ。この小説の舞台となる上富良野では、トリックアート美術館や後藤純男美術館が特に印象に残った。

後藤純男美術館で北海道の景色をはじめ京都、奈良の大和路の四季のほか、中国やヨーロッパなどを描いた作品を鑑賞したが、館外で眺めた二千メートル級の十勝連峰の広大なパノラマには勝るものがなかった。この十勝岳が大惨事を引き起こしたことなど特段意識せず唯々見入っていた。

この二つの小説は随分前に読んだ記憶があるが、改めて読むにあたって手元の資料を探すと『北海道の20世紀』という本に、十勝岳大正噴火としてクローズアップされ、二ページにわたって述べられていた。それによると、十勝岳連峰の主峰、十勝岳が一九二六年（大正十五年）五月二十四日に山体崩壊を伴う大爆発を起こし、大規模な泥流を発生させ、死者百四十四人という二十世紀では国内最大の火山災害となった。そして噴火直後に編纂された『十勝岳爆発災害小史』によると、「午後四時頃爆発ヲ起シ、泥流ヲ現

出シテ山腹ノ急斜面ヲ落下、蝦夷松白樺ノ密林約一方里ノ積雪、表土、樹木、岩石等一切ヲ根底ヨリ席卷シテ富良野川ノ峡谷ニ突入シ、泥壁四、五十尺ヲ上下シツ、新井牧場ノ岩上一切ノ物体土砂ヲ吞ミ尽シ、人畜、建物、田、畑、道路、橋梁、灌漑溝、鉄道、河川等、苦心経営三十年ニシテ漸ク建設シタル総テヲ厚サ数尺ノ泥土ト無数ノ流木ヲ以テ被覆シ尽シ」とあった。

また掲載していた二枚の写真は、泥流に埋まった平野部（旧上富良野尋常小学校付近）で家財道具を運び出す被害者ら。一九二六年五月とあり、他の一枚は泥流で破壊されたアカエゾマツなどの原生林。吹上温泉近くから中央が前十勝岳、中央左が噴煙を上げる大正火口。一九二六年五月末から六月初めと（P204）

もう一冊『20世紀全記録』という世界の歴史大図鑑にも「1926.5.24北海道の十勝岳が噴火、死者144人の惨事となる」と二行ではあるが取り上げられ、いかに大きな出来事であったかが分かる。（P377）

さて、二つの作品の話に入ろう。

明治三十年代に福島県から上富良野の日進の沢に入植した石村家の家族を中心に描かれていく。北海道開拓の苦勞を取り上げた数多くの作品にあるように、住み着いた土地や気候により多少の違いはあるが、いずれも塗炭の苦

しみを舐めたことには間違いない。

ただ、この上富良野地区の入植者が、十勝岳大噴火という大惨事に見舞われてしまったことが哀れでならない。活火山の麓に入植した者の宿命と言えよう。

それにしても、先の「小史」にある悲劇が起きようとは。正鵠について理不尽を嘆く予ら。

「だけどき、先生。おんなじ家にいて、おんなじように流されて、死ぬのもいれば助かるのもいる。拓ちゃんだって、泥流に飛びこんだけど助かったもな。やつぱり拓ちゃんは心がけがよかつたから助かったんだって、みんな言ってるよ。先生はどう思う」

「拓一の心がけがよかつたのは確かだが、助かったのは、そのこととは別だと思ふな、先生は。そのほかにだつて、子供を助けようとして、一緒に死んだ親もいるじゃないか」

「それからさ、先生。日進の沢は崇られたんだって言う人もいるよ」

「そうだ、そうだ。いろんなこと言われるよ俺たちは」

みんなは一瞬黙った。耕作が、

「だけど先生、世の中、理屈に合はんようにできてるなあ。悪いことしてるから不幸に遭うてんなら、わかるけどさあ。日進の沢にしろ、三重団体にしろ、みんなまじめに、コツコツ開拓して、その挙句が、死んだり、田畠が泥に埋まったりじゃあ、やつぱり割り切れんもんなあ」(続P81)

大噴火した年の十一月十八日、村の劇場三共座で開かれた復興反対の村民大会、拓一の訴えに座が静まった。

「ぼくは、自分の家や、祖父母や妹が、あの泥流にのみこまれるのを、山の上からこの目で見た。馬も畠も、一瞬にのまれてしまう姿をぼくは見た。そしてぼくは、その命を救おうと、泥流の中に飛びこんだ。だが、ぼくは、祖父母や妹を助けることができず、自分自身、一日気を失って眠っていた」

声を励まして拓一はつづけた。

「三十年前、一本々々の木を伐り倒し、あの土地を肥沃な畠に変えた祖父母たち、その苦勞を思えば、ぼくは、復興せずにはいられないんだ！」

耕作は、傍らにいる節子を忘れた。復興反対者の大会に来て、堂々と意見を述べる兄拓一の姿に、耕作は身のふるえるような感動を覚えた。(続P163)

そして、兄拓一の確固たる信念で田畑の復元に取り組む姿には、誰も口を挟む余地がない。母佐枝だけが示す理解があった。

「それはな、国ちゃん。何て言ったらいいのかな。俺は、こんなふうにいるんだよ。ここに米が実るかどうか。少なくとも、三年経ったらわかるだろう。三年経って、もし実

らないとわかったら、その時は俺も諦める。すると人は言うだろう。その三年の苦労は水の泡だったってな」

「そりゃあそう言うさ」

「しかし、俺はね。自分の人生に、何の報いもない難儀な三年間を持つということはね、これは大した宝かも知れんと思っている」

「宝？」

驚いて国男は声を上げた。耕作も拓一を見た。佐枝だけが深くうなずいた。

「うん、宝だ。たとい米一粒夷らなくてもな。それを覚悟の上で苦勞する。これは誰も俺から奪えない宝なんだよ。わかるか、国ちゃん」(続P275)

代用教員になった耕作が六年生を引率して行った遠足で、深山峠から見下ろす広大な景色を眺めながら語る。この土地に生まれ、この土地で生きてきただけに胸を打つ。

「いいか、よく聞くん。自分たちのふるさとを胸に焼きつけておくということは、人間として大事なことなんだ。君たちはいつの日か、この村を離れて、ほかの町に住むようになるかも知れない。しかし、そこに楽しいことが待っているとは限らない」

生徒たちがうなずく。

「いや、つらい目に会ったり、苦しい目に会ったりすること

が、多いかも知れない。

そんな時にな、ふっとこの広大な景色を思い浮かべて、勇気づけられるかも知れないんだ。人間はな、景色でも友だちでも、懐しいものを持つていなければならん。懐しきで一杯のものを持つていると、人間はそう簡単には墮落しないものなんだ」

生徒たちは、わかったような、わからぬような顔でうなずく。が、語る耕作の胸に、祖父の市三郎、祖母のキワ、姉の富、妹の良子、そして日進の沢の家、畠等々が浮かんで消えた。(続P403)

拓一が思いを寄せる福子が、深雪楼から脱出して自由の身に一歩近付くか否か、旭川へ向かう列車からの合図を待つ。

(白いハンケチか。赤いマフラーか)

一輛目が過ぎた。

「あっ！」

叫ぶ耕作の目の前を、白いハンケチがふられて過ぎた。

「兄ちゃん！」

耕作は思わず叫んで、拓一をふり返った。拓一が、くずれるように稲の中にうずくまるのを、耕作は見た。

「兄ちゃん！よかったな、兄ちゃん！」

耕作は泣きたい思いだった。と、拓一がすぐに立ち上った。

鎌を持った手を大きくふった。鎌がきらりと、朝日を弾き返した。家の前に立つ佐枝も手をふっている。何も知らない村長だけが稲を刈りつつけている。

汽車は見る見る小さくなってうねって行った。

「ぼーっ」

深山峠にさしかかったのか、汽笛が三度長く響き渡った。
(続P524)

この最後の場面は感動ものである。長い苦勞の末によつと掴んだ拓一の微かな幸せである。

私は、この続きを読むと思う。拓一と福子、耕作と節子のはかない恋の行方は如何に。深雪楼から助け出された福子が、旭川で公娼阻止運動をする佐野文子と会ってどういう経緯を辿るのか。父親の生き方に強く反発して、看護婦の資格を取り、産婆の資格も目指す節子がどう自立していくのか。

家族を助けようと泥流に飛び込みながら、奇跡的に助かった拓一の復興にかける執念がどう実っていくのか。おそらく上富良野の農業を振興する重要な役割を担っていく人になっていくだろう。

家庭の事情で、一番で合格した中学校や師範学校にいかず代用教員を勤める努力家の耕作、独学で尋常高等小学校教師の検定試験に見事合格、教員として益々の成長が楽

しみである。

予想もしなかった火山の大爆発に遭遇しての苦難・苦悩、家族愛、執念、葛藤、助け合い、奪い合い、人間としての成長、理不尽なものへの怒りなどがぎっしり詰め込まれた「泥流地帯」「続泥流地帯」は、正に名作である。

最後に私は思う。三浦綾子は自らを母佐枝に投影している。最も言いたかったことを控え目に見せるところが彼女らしい。

たくさん命が奪われ、苦勞を重ねる被災地の人々が克明に描かれる中に、何か大きな明かりが見えた境地で読み終えた。

※「泥流地帯」「続泥流地帯」新潮文庫

※「北海道の20世紀」北海道新聞社編1999年

※「20世紀全記録」講談社 昭和62年



「泥流地帯」「続泥流地帯」を読んで

そして「青い池」に想うこと

伊藤 三千代

ラベンダーで有名なファーム富田から上富良野を通って「青い池」へ通じる、道々美沢上富良野線がある。その道の途中に、十勝岳爆発記念駐車公園があり、そぼの大きな石の上に、遭難記念碑が見えるのです。通過する度に「ああこれが大正十五年の十勝岳大噴火の泥流で、こんな所まであんな大きな石が流れてきたのだ。」と気になっていた。

「泥流地帯」の本を読んだのは二十年位前のことで、あまりにも表現豊かな文章に魅了されながら読み続け、当時の噴火はどんなにすごかったのかと先を急ぎ、一気に読んでしまったのです。

物語の舞台になっている日進地区は富良野と美瑛の狭間であり原始林に覆われていて開拓が進行する過程で初めて丘陵地であることがわかったという。

登場人物の拓一・耕作兄弟の祖父達はこの不毛の地で強靱な精神力と、たゆまない努力で木を切り倒して農地を作っていたのでした。しかしこの地は上富良野の市街から今でいう四キロ以上も奥に入った交通が不便な所である。父は死に母は訳があつて札幌へ行き四人の兄弟は祖父母に育

てられたが、農作業や家の仕事を手伝うが貧しい生活であつた。

当時のこの土地に暮す人々の生活や、子供達の楽しみである正月やまつりのわくわく感や、四季それぞれの野山での自然の中での遊び等が細かく描かれていて、田舎で育った私にとってなつかしい風景が伝わりました。

作者が土地に住む人々の処へ何度も足を運び、綿密な取材によるもので、特に噴火の場面は自分もその場に居たような錯覚をする見事な文章力に驚いた。

大正十五年五月二十四日の十勝岳の大噴火は、あつという間に血と汗と涙の結晶である農地も家も泥流の中に消えた。手のつけようがない日進地区から上富良野に移ってからも苦難は続き、酸性鉱毒の泥流のため草もはえない土地、硫黄分を含む燃える土との戦いがはじまった。

このような地域であつたため、住民達は「土地を復興するか」「放棄するか」の激論やいさかいがあつたが、結局、国庫補助として耕地復旧費を受け、土地の復興工事をすることを決意し、噴火の翌年工事が始められたのでした。泥流の中の流木をよける作業中には下駄や鍋釜が出てくる場面は、あまりにも生々しくて涙がこぼれた。

貧しきで進学できなかった耕作が努力して代用教員から教員試験に合格したが、教職の経験のある作者だからこそ、子供達に接する時の態度や言葉にやさしさと愛が伝わって

くる。又、噴火の後で「行いが良かったから助った」という言葉が出てくるが、文章を読んで簡単に使う言葉ではないことを知った。

敬虔なキリスト教信者であった作者でなければ著すことのできないものが大いに物語の中に含まれていると感じた。

「泥流地帯」を読むのは今日で三回目になるが新たに感じたことは、この兄弟はまさにキリスト教の「三愛の精神」神と人と人を愛するに当ると思う。信者ではなくても人間の心の中の信念のようなものが神であり、人と人を愛する、心の物語なのだと思います。

私の仕事はフリーのバスガイドです。かなり年期の入ったガイドだがガイド不足で、バス会社から要望されるのと、私自身がこの仕事が好きでなかなかやめられないのです。

例年ならば四月から七月という観光の繁忙期で、一ヶ月の内半分以上は出張で大変な時期なのだが、今年は仕事がありません。

厳しい寒さの冬が終わり、春が来て桜が咲き、ライラックが咲いて、ラベンダーが咲き観光には最適な時期であるが、新型コロナウイルスの影響でまったく仕事がない。いつもとは違う夏となっていました。

十勝岳大噴火の泥流は美瑛川も襲った。しかし、その跡地に白樺の美林を作り美しい風景を作り出しています。

噴火は昭和に入ってから現在に至るまで、五回の噴火があるが、特に昭和六十三年十二月の噴火後、火山災害から美瑛町を守るため火山泥流を貯めるコンクリートブロックによるえん堤が完成した。その結果ブロック堤に水が溜り池になったが、カメラマン等の口こみにより「青い池」と呼ばれるようになった。

大正噴火後、自生した白樺のように予期せずして生み出された自然現象、青い池の中でカラマツの木が立ち枯れている幻想的な風景に、国内外からの観光客に大人気で、とうとう昨年には大きな駐車場が作られた。

今から九十四年前には十勝岳の大噴火で、一四四名もの命を奪い、苦勞して開いた土地を不毛の土地にしたが、今にはぎやかな観光名所となっている。

三十二年前にも多大な被害を与えた十勝岳の噴火だが、およそ三十年周期で繰り返され火砕流の土地は、その地形と相まって水はけがいい反面、急な傾斜で大雨が降ると大きなひび割れや構が出来ているのをよく目にする。石灰などを含む土壌は良く晴れた日には表面の土は石英の粉がキラキラと光り、きれいだが農機具を痛めると聞いた。

富良野方面の観光で、歩き疲れてしまったお客様は、このあたりではもう夢の中。でも「どうしてもこの日進地区のことを知ってほしい。」たとえ数人しか目があいていなくとも、富良野コースの時は、いつも「泥流地帯」の簡単なあら

すじを話し「すばらしい本なので旅行を終えて家に帰った後には、ゆっくりと読んでほしい。」とお願いをします。

映画化はずうっと前から望んでいた事だが噴火時の光景を再現するのはむずかしいと思っていた。でも今の時代ならCG等でずっと迫力のある作品ができると思う。

文字離れしている、といわれる若者にも映画を観ることによって、原作を読んでみたいと思うように、ぜひ映画化が早く進みますように熱い思いで期待します。

いつ又、噴火するかもしれない十勝岳への知識と、今ある観光地の成り立ちを知って欲しい。

三浦綾子さんの「泥流地帯」そこに出来た「青い池」がある…。」と。

後書

大変な努力の中に今では、ビール麦・ホップ・みつ豆に入っている赤エンドウは日本一の生産、カミフラノポークと特産物が沢山ある、上富良野町は「泥流地帯」が生んだ町、と大いにピールしているのです。



『泥流地帯』を読んで

清水 利章

姪がドイツ人と結婚し、子どもがレオちゃんが幼稚園に入りました。レオちゃんが、十一名のクラスメイトと写ったスナップ写真が送られてきました。公園の長い木の切りかぶのベンチに一列に坐っています。

左から、黒い髪のインド系の男の子、栗色の髪の男の子、金髪の男の子、黒い髪のレオちゃん、栗色の髪の男の子、栗色の髪の男の子、金髪の男の子、黒い髪の黒人の男の子、その金髪の子と黒人の子の間に栗色の髪の女の子が立っています。黒人の男の子の横から覗き込むようにして、金髪の女の子が顔を出しています。栗色の短髪の男の子、その子のうしろに金髪の女の子が立っています。

黒人男性が白人警官に拘束されて死亡した事件をきっかけとして、アメリカでは人種差別撲滅運動が広がっています。レオちゃんの幼稚園のスナップ写真を見ると、そのような人種差別とはまったく別の世界のように思えて嬉しくなります。

「人間にはアメリカ人だの、イギリス人だの、支那人だの、いろいろあるけれど、結局は二通りしかない」と市三郎は言います。

「親切な人間と、不親切な人間、人に何かしてやりたい人間と、何かしてもらいたい人間」

と。これが人種差別のない考え方であろうとわたしは思います。

市三郎、キワ、拓一、良子が流された泥流に向かつて耕作が一步を踏み出そうとしたとき、

「助けてーっ！」

という福子の声で、耕作は思いとどまります。

けれども、ここで耕作は思いとどまるべきではなかった、とわたしは思います。たとえ福子の命を助けることができなかったとしても、耕作は泥流に流されて死ぬべきではなかったか、と。

と言いますのは、耕作は生き残り、お母さんと会うことができるでしょう。けれども、市三郎、キワ、良子の命を助けることができなかった、あるいは見殺しにしたという自責の念から、耕作は一生免れることはできないでしょう。

泥流の中に飛びこんで行った拓一の壮烈な姿を思うたび、自分の意気地のなさに、耕作は憤りを覚えないわけにはいかないでしょう。

「おれはな耕作、あのまま泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ」と拓一は言います。

このような兄に対して、一生、うしろめたい思いを負って、生きていかなければならないような気さえする、と耕作は思うのです。

それゆえに、お母さんと幸せに暮らすということは、耕作にとってできえないことであった、とわたしは考えるからです。



泥流地帯から獲得した思想

(ペンネーム)あぐり

人間が動物と一線を画している条件について考えてみると、他者貢献の存在がちらほらと思ひ浮かぶ。それも食べ歩いていく為や子を為す為ではない領域に及び、世の中に溢れる不便や困り事、そして悲痛な思いを無くしていこうと働きかけられる点が、知性を持った我々を人間たらしめるのではなからうか。

そんな動物出身の私達が人間として生きる基盤となるものが二つあり、それは衣食住の根元を流るる金銭。もう一つが、子孫を繁栄させる為に血に流れる肉欲だろう。

では、思いやりに溢れる人間同士が身を寄せ合い、周囲も自分も一挙両得に幸せに生きている姿はやはり理想の域を出ず、現実はいくつも手厳しいもので、人間の諸条件の均衡を崩すものはどこにでも存在している。

働き口を失うこと、人から愛されず、また人を愛せないこと。その原因は複雑で、本質は姿を見せぬまま、突然に襲いかかってくる。

これは誰の都合も、心向きも、愛も、恋も全てと没交渉で、突然降りかかってきた、今作の泥流と似たものではな

ろうか。癒やしをもたらしてくれる自然ですら脅威へと容易く変容してしまう。

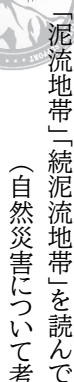
決して他人事ではない史実と向き合い、受け容れ、生半可な生を消費するだけの人生を構築させうる些細な雑念こそ遠くへ流し、均衡が取れている間は誰かの為に生きてゆきたいと思った。

『泥流地帯』の舞台、上富良野——
作品に登場し、実際に訪れることのできる
「泥流散歩」スポットを紹介します(①～⑦)

泥流散歩①「上富良野神社」



奉納角力(すもう)で拓一が荒木川と激闘を演じた境内ではよく目をこらすと土俵の痕跡も…
8月1日の例祭は今も変わらず多くの人で賑わいます。 【(正)「土俵」の章】



大正時代、十勝連峰を見上げる上富良野の地に、拓一耕作兄弟が逞しく生活を送る姿は、現代の人々(私を含めて)に、「今忘れ去られている何か」を伝えてくれているように、私は読むことができて、とても良かったと思います。

北の大地の、寒さ、雪の多さは今の生活から予想できないほど、厳しいものだったことでしょう。

私が北海道での生活を始めたのは、昭和49年でした。結婚を機に來道したのですが、最初の地が豪雪地帯でしたので、毎日毎日降る雪に「岩手に帰りたい」とめそめそと泣いていたような気がします。寒さはハンパなく、鼻が凍り付くような感覚があり、なんでこんな（厳しい）所に來たのかと、後悔のしどおしでした。生活はストーブ暖房でしたが、風呂は石炭で、火力調整が難しく、また放っておくと煤がたまり、手間の掛かる厄介なものという感覚がありました。寒さ対策の為に冬が近づくと、（夫が）窓にビニールを貼るのも、年中行事の一つだったことを思い出します。昭和でも厳しかったのに、大正時代は比べものにならないくらい、寒くそして生活は困難だったことでしょう。交通機関も蒸気機関車と馬

その大変な中でも、祖父の教え「金の多い少ないは人間の偉さには関係ねえ。金持ちにも貧乏人にも馬鹿もいれば立派なものもある。目に見えないものが大切じゃ」は、耕作のその後の人生を支えてくれたことでしょう。そして進学を断念し、地元の教師となりますが、綴り方の指導のなかで、「綴り方はなあ、見ないことは書くな、自分が本当に見たことを書け。見たことを見たとおりに書け。聞いたことを、聞いたとおりに書け。そして自分の考えたことを、自分の考えたとおりに書け」これは三浦先生の教えそのものだろうと、推測しています。この小説もフィクションではありますが、実際にあったことを題材にして、三浦氏の「生の聲」が聞こえるような気がしています。

私も津波の経験があり、駆け上がった高台の裏山から、家動物、舟、（牡蠣の養殖用の）樽、大木など、ゴーンと流される状況を目の当たりにし、妹と二人で震えながら泣いていました。

その後の復興の道のりは、考えただけでも気が遠くなりま
す。来る日も来る日も泥の中の流木や大きな石を掘り起し、
元の地に戻そうとする。かんかん照りの暑い日もあったこと
でしょう。しばれるような寒い日もあったことでしょう。最
後に田んぼの稲が青々と根付き、黄金色に実り、村長をは

じめ部落の方々と鎌で稲を刈る。そして福子、節子の客車からの白いハンカチは、汽笛と共に拓一、耕作の将来を揚々と、明るく幸せを含んで終わることに、「良かった」と安堵しました。母佐枝は三浦氏の姿だったのではないのでしょうか……。

若い人、特に学生さん方には是非読んでいただきたいと思いました。

「これが夢ならなあ」修平がぼそりと言った。私はこの言葉がとても心に残ります。

昭和25年岩手の三陸海岸で生まれた私は、昭和35年のチリ地震津波を経験しました。10歳だったのですが、裏山から見た津波の光景は、おぼろげながらも今でも記憶のなかにあり、それこそ夢であって欲しいと(頭に)封じ込めようとして過ごしてきました。それが2011年の東日本大震災で、再度経験しようとは……。 (実際は苫小牧にいたのですが)

実家を継いでいた兄が、大きな被害に遭いました。家、車そして大切な親戚や友人たちを失ったのです。「夢であって欲しい」と北海道の地から念仏の様に唱えていました。震災の5ヶ月後に私はやっと岩手を訪れることができました。そして故郷の変貌と兄の仮設住宅生活を目の当たりにし、神も仏も無い、と恨んだものでした。

三浦氏は拓一、耕作の祖父・市三郎から「辛いこと、苦しいことを通して、神さまが何かを教えてくれるのかも知れん

な。つまり試練だな」と記しています。しかし試練にしては人の限界を超えているようで、この一言に集約はできないような気がしています。

震災の2年後、兄は病気のため亡くなりました。この時の悲しみは想い出すことさえ辛く、災害以上の強い衝撃でした。

「不動のものであるはずの大地さえ、ゆれ動く。それは耕作にとつて、何かひどく淋しい事実に思われた」という文章に地球上で生活するには、地震、津波、豪雨、などなど、多くの自然災害は避けて通れないことでしょう。災難は生きている人々にとつては、逃げ出したくても、留まることしかできないのです。それでもがき苦しみ、元の生活をとり戻そうと懸命に努力するのです。その間に力ついてしまう方もいらっしゃるでしょう。物語のように終わり(ジ・エンド)は無いのですから……。災害は自分の身に起こって、初めて解る、と誰かが言っています。自分だけは大丈夫、と思いたい、そして皆そう思っただけで生活しているのです。しかし……。

令和2年7月、九州地方を集中的に襲った豪雨災害も、私は「夢であって欲しい」と今、切に願わずにはいられません。



『信念は不滅』

森 惇

今年、突然世界を覆った新型コロナウイルスを経験し、誰もが常識だと思っていた日常が、当たり前ではなかったことを思い知った。私たち人間の歴史はいつもそうだ。マクロの世界なら自然災害や戦争、ミクロの世界なら事故や病気などによって、簡単に日常は壊れてしまう。盤石だと思っていたこの世界は、風が吹けば崩れるほど脆弱なものだったことを思い知らされる。

では、それならば他人など関係なく自己本位に生きていけばいいのか。著者はそれを「ノー」と言う。それが、『泥流地帯』という本で著者が表したかった一つの意志だと私は思う。

ウソをついたり、不誠実にずる賢く生きても失敗せず、何事もなく生きていられる人たちは幸運なのかもしれない。実際、そういう人間はいる。だが、それを羨むのは人生の半分しか見えていないと私は思う。『泥流地帯』の最後では、「なぜ、まじめに生きているのに……と耕作は嘆いてしまう。それは無理もないことだが、信念をもって人生を生きているなら、あまり結果に振り回されてはいけないと思う。もちろん、まじめに誠実に生きている人間が報われれば、最

高の人生であることは間違いない。だが、現実はどうではない。ずる賢く立ち回り、思いやりなく自我を貫いている人たちが健康に富を持ち、まじめに勤勉に働いている人たちがリストラされたり、ストレスで病気になるたりもする。

私もその一人だ。神の存在を肯定し、世のため人のために役立とうと必死で働いていたが、原因不明の病気が続いた。激痛の下痢症状によって口から摂取できない生活が続き、大病院で検査を何度繰り返しても異常は見つからなかった。私はどんどん衰弱して寝たきり状態となり、やがて精神も病んだ。今も心身の闘病は続き、既に十二年目となる。家族に支えられなければ生きていけない現実を考えると、「なぜ、勤勉に努力してきた私が」とか、「どうしてこんな病気にならないといけないんだ」という無念の思いでいっぱいになる。「それが現実の厳しさ」と言えば、それで終わってしまうのかもしれない。だが、当事者はそれでは済まない。私は理不尽さを感じ、どうしても受け入れられず神さえ呪ったこともあった。だが、少しずつ時が受け入れるように私を変え、さらに『泥流地帯』を読んで心が変わっていった。

『泥流地帯』では、市三郎や拓一、耕作や権太など、みな不自由な中でも他者と比較せず、不満があってもそれに負けない信念を持って生きている。自分の価値観を確立し、環境要因に言い訳せずに、必死で運命と向き合っているのだ。著者がそういう人生を応援していることがよく

わかる。光を求めて生きる日追鳥の話や「人間の一番の勉強は、困難を乗り越えることだ」等の先生の言葉を通して、「誠実に生きる生き方で良い。自分の信念を貫け」と励ましているように私には聴こえた。

特に私自身が救われたのが、耕作の母が病気で働けず、修平に非難されるところで市三郎が庇うシーンだ。「人間はなあ、金がかかるから働がないとか、金を稼ぐから働があるとか、言えるもんじゃねえぞ。誰も病気にかかりたくて病気になる者はいねえ。いいか、人間を金のあるなしで見分けるな。情のあるなしで見分けれこの箇所は涙なしでは読めなかった。どうしても、成人した男性としてお金を生産できない自分が辛くて、それがきっかけで自暴自棄となることが多かった私も、市三郎のこの言葉で救われる思いがした。みながみな、この考え方を持っていていれば世の中はもっと生きやすくなるのに……とも感じた。

このように、著者は一貫して「環境(運命の悲劇)に立ち向かえと励ましてくれている。そして、最大の悲劇が全てをのみ込んだ泥流である。耕作は、みなが泥流に流されたとき、自分も死のうとした。が、「助けて」という声で自分を取り戻し、教師の自分を待つ生徒を思っ何とかなえた。私も精神を病み、「こんな自分はいても意味がない」と自死衝動に苛まれるが、家族の写真を見て自分を思い直している。また、泥流に流された被害者が自分だけではないことを知

り、耕作も冷静さを少しずつ取り戻している。私も、自分だけが闘病しているわけではないという客観性を入れることによって自死衝動を抑えている。まさに、自死衝動の抑え方までこの本にはしっかりと描かれているのだ。

また、片親の子の五郎を励ます時に、「親がいなくても明るい子はたくさんいる」と言っているが、これは病気や不幸な環境になっても明るい人間はいるとも言い換えられる。このように著者は終始、様々な悲劇を表現しつつ、そこから前を向く方法やエールを丁寧に描いている。悲運の福子もそうだ。「泥流にのまれて死ねば良かった……」と口では言っているが、泥流に襲われたときには、「助けて……」と叫んだのだ。それは福子の魂の叫びだったと思う。

泥流を経験した耕作は、「こんなむごたらしい死に方をするなんて……まじめに生きていても、馬鹿臭いようなもんだな」と拓一に話す。そう考えてしまう耕作の気持ちもわかる。しかし、「それはそれ」だと私は思う。たとえ悲劇的な死を迎えても、それで今までのまじめに生きていた日々が無駄だったというわけではないのだ。いや、無駄になるはずがない。市三郎やキワがまじめに、純粹に生きていたその姿を見て感化を受け、自分もそう生きようと思っている拓一が現に存在するのだ。その生きる姿勢や信念は拓一や耕作へとつながり、消えることなく確固としてまだ生きているのだ。私はこのラストシーンで報われた。私は世間的には経済

力もなく、家族に支えられて生きている身の人間だ。だが、本書を通じて、たとえば思い通りに生きられない不遇な環境であつても腐らず、それでも明るく生きていくその信念が、家族や周囲の人々に伝わってゆくのだと教えてもらった。だから、私も前を向いて生きてゆこう。信念は不滅だ。決して死にはしない。信念や誠実な生き方は、必ず周囲に受け継がれて永遠に生きてゆくものなのだ。私は、これからも本書を心の糧にしながら、自分のできることを一つひとつ精一杯やってゆこう。

最後に、病人の私でも読めるように大活字本にして本書を出版して下さった埼玉福祉会の皆様に心から感謝を申し上げます。



泥流地帯

鍬塚 有子

『山合の秋』

つづて持つ己が無力を知りし日や

木実このみは熟うみぬ生傷のこと

『雪の道』

よるべなき声うずを埋める雪の道

小暗おぐらきながて耳みみふきぎ行く

『矢車』

直人なおひとの恥はにかむることなき直なおき理のり

日に向かいて矢車やぐるまは清すがし

『日追鳥』

うち忍しのぶ涙なみだぞ漉しむかずかずに

おいてゆくなど日追ひおう鳥とりにも

『氷柱』

幸^{しあ}せをさし出^いだす手は凍^こえたり

まし^いろの石は垂^{たる}氷の凝^ひり

『土俵』

誰^もや知^あるなりたき自^も分^のにな^り敢^あえぬ

鉦^{うずめ}女の憂^{うれ}い力^い士の咽^{むせ}び

『足長蜘蛛』

蓮^{はちすば}葉のに^こりに染^しまぬ心^{こころ}根^ねに

舌^{した}きりすずめの骨^{ほね}青^{あお}く炎^もゆ

『桜吹雪』

小^こさき手^ては

まんまかしぐ手

詩^しをよむ手

ひごかかえる手

こころむすぶ手

『雪間』

雪^{とよ}の間に白^{しろ}の音^{おと}響^{きこ}む暮^くれの里^{さと}

何^{いづ}処^く辺^へとても春^{はる}は見^みえねど

『轟音』

吾^{われ}はただ一^{ひと}塊^{かたまり}の慟^{どう}哭^くとなる

手^ても足^{あし}も體^みも魂^みも失^しせ

混^{あめ}沌^{つち}の轟^{おと}きやまぬ天^{あめ}地^{つち}に

生^{いき}き残^{のこ}りしは何^{なに}の報^{むく}いぞ

『煙』

髪^{かみ}結^ゆう日^ひまぶたの裡^{うち}に映^{うつ}す妹^{いも}

焼^やかねばならぬ同^{はら}腹^{から}なれば

泥^{でい}闇^{あん}に報^あいの在^あり処^か問^かう暗^{あん}夜^や

生^なの無^な意^い味^みの耐^たえがたき澱^お

続・泥流地帯

『村葬』

燐光の火中に心はぐれゆく
りんこう ほなか

形見の雲立つ父祖の新墓田
かたみ くもたつふそ あらきだ

『移転』

死者ゆえに生者に負債のあることを
カレ ワレ

泥掻く愚者となりたきことを
どろかくぐしや

『火柱』

神名火の山たけり立つ随神
かむなび やまたけりたつかんながら

ひとは岩漿より生れし鬼子
マグマ あ

『雲間』

不幸とは何色したる鳥なるや
内より出づる色々まじまじに

『同志』

影もなく添える心の忍び音は

一樹の枝に置きあまる露

『日めくり』

日は沈み日は昇ること 報いとは

天の秤の不可思議の揺れ
はかり ゆれ

『煮こり』

いたづきの味滲む煮つけ箸にとる
あじし はし

饗食むぐことにとけゆく固陋
あえは ころう

『露のとう』

わざわいの痕より萌す露のとう
きよく

百年の田に想いたぐえて
ひやくねん た おもい

『深山峠』

子らの手に灯し火ひとつ持たせし
こ て ともしひ もたせたし

深山の峠に行き別るとも
みやま とうげ いきべつ

『雞の声』

明け告げ鳥のヨベル常夜をはらう
じょうや

陽炎立つ泥流の地平
かぎりいたつていりゆう

『新秋』

行間に誰が魂と行き合わん

頁追う風 あたらしき秋
ページおうふう

『汽笛』

絶望の夜ひた走る汽車の窓
ぜつぼう よるひたはしるきしゃ まど

星の光は未来を照らす
ほし ひかり みらい てらす

夜に泥み白き小石抱く籠の鳥
よる なす いし

汽笛に目覚め明けの空たつ



『泥まみれのいのち——つれづれ「泥流地帯」考』

(ペンネーム) 青海 空人

はじめに

- 一、兄ちゃん
- 二、ロマンスと駆け引き
- 三、善因善果、悪因悪果
- 四、泥流地帯

はじめに

『泥流地帯』を読了したのは、二〇二〇年七月四日の深夜のことだった。

壮大な物語に呆然として溜息を吐いた僕は、ほとんど無意識にテレビを付けた。自分の頭の中や胸の内に去来した様々な想いに息が詰まりそうだったから、心が雑音を求めたのだと思う。

けれど一息付く間もなく、映し出されたテレビの画面に僕は釘付けにされてしまった。一瞬、かなり混乱したのを覚えている。

黄土色の濁流に家屋や建物が半ば沈んでいる、衝撃的な

映像が流れていた。その光景は、ほんの少し前まで僕が小説の中で体験していたそれと恐ろしくくらいに重なった。頭の中で“想像”した場面が抜け出してしまったのかと本気で思っただけだ。

本当に混乱した。結果的に、息苦しさが増していった。

七月三日から四日にかけて九州地方を襲った集中豪雨。テレビのニュースはその時、熊本県の球磨川の氾濫を報道していた。小説の中の出来事と現実世界で実際に起こった出来事が真夜中に重なり合った瞬間だった。それは架空の世界で僕が見続けていたことが、急に生々しく鮮明に色づくような不思議な体験でもあった。自然の脅威が真に迫って感じられた。

『泥流地帯』は作家・三浦綾子氏が一九七六年一月に、北海道新聞にて連載を始めた長編小説である。北海道十勝岳の一九二六年の大規模噴火を題材とした作品で、予測できない自然災害にその身をもって対した人間たちの生と死を描いた大作だ。一九七八年には続編の『続・泥流地帯』も連載された。

と、これは僕が一作目の『泥流地帯』を読み始める前に目にした、この作品に対してのかなり大雑把にまとめられた情報だった。もっとも、物語に没頭するためにはこれくらいの情報量が丁度良いと思う方だから、それ以上の予備知識

を何も持たずに読み始めた。

そう、これは“自然災害の脅威を描いた作品”だ。その感想は続編まで全て読了した今も変わらない。変わらないのだけれど、それだけでは全くもって不十分で、言葉が全然足りていない。では一体それをどのように表現したらいいのか、考えに考えた。文章を書くことは好きだ。けれどこの作品が内包しているもっと別の何かを、容易にすくい取る感覚や技術が僕には圧倒的に足りていなかった。

だから、『泥流地帯』を読了してから一週間以上、自分の感情と向き合った。明確に言語化することができず、次に進みかけたのだ。少し姿勢が硬すぎるとは自分でも思ってたが、それはこの作品自体がそうさせているようにも思えた。真摯に向き合いたくなるような、そんな小説だったのだ。僕にとっては。

後に詳しく記すことになる僕の住む町には、ごく当たり前に田畑が広がっている。季節は初夏、田んぼには苗が植えられ始めている。営業マンという職業柄、水が張られたばかりのそんな田と田の間の狭い一本道を自動車で駆け抜ける毎日だ。営業兼配達が生業なのだ。

浅く張られた水の底には栄養豊かな泥土がある。やがて季節が進んで苗が育てば、稲に埋もれてその豊饒な泥土は見えなくなる。田植え前後の短い間にしか目に触れられな

い。

そこに、その田んぼの主人が長靴を履いて入っていく。僕には分からない様々な田植え前の準備や、植えた後の処置があったりするのだらう。家族だろうか、数羽の鴨が固まって泳ぎながらとぎとぎ泥の中を啄んでいる。

そんな風景を見るときもなく見ていた時だ。ふと、あるフリーズが思い浮かんだ。

——泥まみれの命。

胸に溜まった澱のようなものがスッと身体の外に出たような、錘がなくなつて楽になる感覚があつた後に、これだと思つた。『泥流地帯』は始まりから終わりまで、泥にまみれているのだ。

綺麗な泥と、汚れてしまった泥。その相対する泥の中で時に溺れて、時に力強く抜け出す。そしてそれは人間も、動物も同じだ。物語の中では、農民や町民や、それから馬だって皆泥の中でもがいている。

「泥臭い」という言葉は悪いイメージで語られることが多いように思う。けれど、だれだって泥臭く生きているのではないか。美しい聖人君子は存在しない。その代わりに、泥まみれになつて泥臭く生きる姿が『泥流地帯』で描かれる物語世界の中ではそこかしこに見受けられる。

現実だつて同じじゃないか。見慣れたはずの田んぼを眺めながら、僕は僕の生きるこの世の中のことを、初めてそんな風に想つた。

理不尽極まりない自然災害を描いた物語を通して掬い取つたこと。それがこの「泥にまみれた命」の尊きだつた。その命一つ一つの尊きこそが、『泥流地帯』という作品から読者の目を背けさせないようにしている。泥にまみれているからこそ、生々しく真に迫ってくるのだらう。その命たちを細やかに、そして丁寧に掬い取つて書き出してみたいと思つた。これほどまでに読者を引き付ける力を持った小説に初めて出会つたと言つても、決して言い過ぎではないだらう。

僕は今、およそ二十年ぶりに読書感想文を書いている。果たしてこれが感想文と言えるものなのかどうか、甚だ不安に思いつつも、こうして書き進めている。

けれどそんな僕の背中を後押ししてくれるような言葉がある。この『泥流地帯』の登場人物の一人、主人公とも言える教師・石村耕作の、自分の教え子たちに向けた言葉である。それをここに引用しつつ、序文を終えたいと思う。

「綴り方はなあ。見ないことは書くな。自分が本当に見たことを書け。見たことを見たとおりに書け。聞いて

たことを、聞いたとおりに書け。そして、自分の考えたことを、自分の考えたとおりに書け」

（『続・泥流地帯』露のとう）

一、兄ちゃん

主人公、石村耕作にとって、兄の拓一はきつとヒーローだった。

物語は耕作が十歳、拓一が六年生の時点で幕を開ける。その頃から耕作は、兄の背中を静かに見ていたように思える。

この二人の兄弟のことを想うとき、僕は自身の兄の事を夢想する。

“夢想”と書いたのは、その兄の姿を僕は一度も見たことがないからだ。姿を見ることはこれから先もない。兄は生きて生まれてくることができなかった。死産であった。

自分に兄がいたということは、幼いころから両親に聞かされていたように思う。だから僕は幼いころから、「もしもお兄ちゃんがいたら」と思う場面に幾度も直面した。例えば、小学生の時にクラスの問題児にいじめられた時など。実際には自分一人で耐えることに限界を感じた僕は両親を頼ることになったのだけれど、こんな時に、生きていれば僕

より三歳年上の、頼れる兄がここにいてくれたら、と心細い胸の内ですったものだ。

しかし一方で、僕は良子という妹を持つ石村兄弟の気持ちも良く分かる。僕にも妹がいるからだ。彼らが良子をとっても大事に思う様々な場面その一つ一つに、幼少のころの僕たち兄妹のことを思い出したりし、温かい心持ちを想起された。身をよじられるような別れが彼らのもとに訪れてしまった分、今は拓一、耕作兄弟と良子との些細なやり取りが愛おしく、また悲しく感じられてしまう。

唯一物語の中で想像した部分としては、姉の存在だろうか。石村家には長女の富がいる。自由に、自分なりに想像できるのが小説の醍醐味であり、富の存在は僕の中の「お姉ちゃん」像を当てはめながら物語の行間を埋めた。

とにかく、僕は彼ら兄弟姉妹のことを時に自身に置き換えてみたりなどして、およそ小説の中の存在だからと割り切れない、不思議なリアリティを感じながら物語にのめり込んでいった。

物語の中心に常に拓一と耕作がいたから、やはり僕はこの章で彼ら二人のことを書き進めていきたい。特に、耕作から見た拓一の姿について掘り下げてみようと思う。

拓一という青年の根幹にある揺るぎない信念を、端的に言い表していると思われる言葉がある。それは彼の祖父、

市三郎の次のような言葉だ。

「金を儲けるよりも、有名になるよりも、誠心誠意人のために生きる者になれたら、それは成功というものだ」

これは市三郎が成功者について語ったことを、後に耕作が思い出している場面が出てくる言葉なのだが、きつと拓一も一緒に聞いていたはずだ。拓一の生き方には、この「人のため」という想いが深く根付いているように感じられてならない。

拓一の「人のために」自分がなにをするか、という姿勢が最初に見られたのが、中学へ進学したいという耕作を後押しした時だ。

祖父も祖母も、耕作の気持ちは痛いほどわかっていても、現実には縛られている。しかしそれは仕方ないことだろう。耕作たちの父は死んでしまつて、母も遠い地で一人、生きることには精一杯だ。仕送りなど当然望めない。自分たちとて、その日暮らしの毎日なれば、食べることにお金を使わねば生きてはいけない。

けれど、耕作は中学を受験する。拓一の一言で祖父を動かしたのだ。自分が働くから、その稼ぎを使ってくれと、熱心に懇願する拓一。

弟のために。そこで拓一の自己犠牲の精神が現れるのだ。耕作は、そんな兄の姿を目の当たりにして、それだけで充分にありがたいと思う。

この拓一の自己犠牲は枚挙にいとまがない。家族同然だった馬の青が死んでしまう原因を作った耕作を庇い、自分が馬小屋の戸を閉め忘れたと名乗り出る場面もあった。そしてそれは耕作に対してばかりではなく、周囲の人間にまで及んでいく。

身売りされてしまった福子を助け出すために貯金箱に小金を貯め始めたり、ついには泥流の中に身を投げ、流されていく祖父母と妹を追いかけたりと、自らの命すら犠牲にする覚悟すら見せる。福子や十勝岳の泥流についてはまた別の章にて詳しく書こうと思うので、ここでは例を挙げるに留めておく。

果たして読者はそんな拓一に対して、どう感じるのだろうか。当たり前のことだけれど、そこに正解などないから、きつと拓一の行いに対しては様々な感情が生まれるだろう。それくらい、彼の「人のために」行うこと全てが物語の中で圧倒的な存在感を放っている。

拓一に僕が抱いた感情は、端的に言ってしまうと「戸惑い」だ。彼に対して、僕の心は戸惑い、そして変化し続けた。最初は、自分自身の『兄』像を拓一に重ね合わせて、耕作と共に彼の視点を通してその少し大きな背中を見つめてい

た。久しく忘れていた、兄という存在に対する憧れを思い出したりもした。

けれど次第に、拓一のことを良く分からなくなっていく。文章から、行間から、彼の想いが掴みとれないのだ。彼は多くを語らない。耕作にも、心の表層のような部分は稀に覗かせたりするのだけれど、本当に大事なところは見せていないように思うのだ。彼の本音が分からない。聖人君子ではない、生身の人間である拓一の本音が聞きたい。

もしかすると僕は、知らぬ間に耕作の視点と同調していたのかもしれない。

それを引用も加えてもう少し詳細に述べたい。

耕作自身、拓一の際の無い自己犠牲の姿勢に、時に苛立ちすら感じている。自分にはそこまではできない、という諦観も抱きながら。

『続・泥流地帯』では、汚泥や流木に埋没してしまった土地を黙々と整地する拓一の姿を、耕作はこんなふうに感じている描写がある。

馬鹿だと思う。偉いと思う。可哀そうだと思う。羨ましいと思う。

乱れている。この一文には耕作の劣等感や羨望、呆れ、そ

の他の複雑な感情が見て取れる。それが写し出すことは、彼には拓一という人間が理解できなくなっている、ということではないか。僕自身、聖人君子に限りなく近づいている拓一をやはり理想の『兄』像に置き換えられなくなっていた。恥ずかしい話、僕は読者の特権として拓一と耕作の兄弟を第三者として観察できる立場にいながら、いつの間にか自分の視点を主人公に奪われるという事態に陥っていたのだ。僕は著者、三浦綾子氏の筆に完璧に操られてしまったのだろう。それだけ氏の描く世界が力強いものであったのだ。

拓一の身体の根幹にある本音の部分に触れてみたい。僕の興味は強くそこに注がれた。

言葉よりも態度よりも、真にその心情を現すものがあると思う。人知れず流す涙だ。

大噴火を起こした十勝岳は、その後も小規模な噴火を繰り返す。その中で的一幕で、地響きや音を感じ取った石村兄弟は母や近所の子供たちを連れて高所を目指す。結果的には、その時は杞憂に終わり、再び泥流が集落を襲うことはなかったのだが、高台から望む麓の景色を眺めている拓一のような描写した部分がある。

道の下に目をやった拓一は、そこに、草を食む馬を見た。そして、丘の上につらなる馬鈴薯畠や豆畠を見た。

不意に拓一の目から、噴き上るように涙が盛り上った。

彼のこの涙を、耕作も母親も見てはいない。女の子がひとり、心配そうに顔を覗き込んだだけだ。描かれてはいないが、きつと目元を着物の裾でそっと拭った拓一を見たのだろう。

誰にも顧みられることのないその涙を、僕は美しいと思った。混じり気のない、真に迫った涙だと思ったのだ。そしてまたこの時の拓一こそが、彼特有の人間性というものを体現していたのではないかと考える。彼は生まれ育った日進の沢を愛していた。家族を愛していた。そして、生き残った肉親の耕作のことを誰よりも想っていた。

拓一はその涙はとても複雑な想いが込められていた。悲嘆もあつただろうし、歓喜もあつただろう。間近には母もいた。子供の頃に別れた切りだった母だ。再び生きて会えたのだから、その喜びは計り知れない。

拓一はその後、復興反対派の会合で自身の想いを主張する。反対派は、自分たちの稼いだ金がおよそ現実味のない復興計画に充てられることに拒絶の意を示す集団だ。それは一方ではさもありなんと思われる反応とも言え、そこに単身で乗り込んだ拓一の覚悟は生半可なものではなかった。そしてその姿を目の当たりにした耕作は、今一度、兄の心情を理解し、また尊敬の念を新たにする。泥まみれになり

ながら、二人で泥流地帯に挑んでゆく。

僕はと言えば事ここに至って、力強く屹立する『兄』への憧憬が確固たるものになった。そしてそのまま『続・泥流地帯』の最後の最後まで、ついにその想いが消えることはなかった。

人の心は常に揺れて乱れる。それが一つの想いに固まった時に初めて、大地に足が着く。強くしっかりと生き始める。僕はまだそこには達していない。まだその途上の小道に立つて、もがいているのだ。

拓一も耕作も然りで、その一歩手前に立ったところで物語は終わっているように思われる。彼らの背中を最後に後押ししてくれるような、『伴侶との人生』を夢見ながら。

二、ロマンスと駆け引き

インターネットはもとより、SNSのような気軽な情報発信源が隅々まで普及している世の中においては、この『泥流地帯』の沢山の読者の声に容易に触れることができる。その中で、耕作の恋についての感想をいくつか目にした。どれも同様の感想である。

曰く、石村耕作は恋に鈍感だ。

『続・泥流地帯』まで通して読み終わっていた僕は、このよ

うな意見には大いに頷いた。耕作の鈍感さには時にじれったくて腹が立ったほどであったので、思わずニヤニヤしながらそれらの感想を読んでいた。

けれど、こうして自身の感想文のこの章を書くにあたり、耕作と拓一のロマンスに注目して再読してみたのだが、僕は前述したようなニヤニヤ笑いを引つ込めなくてはならなくなった。ロマンスと駆け引きの間にも、やはり人が一所懸命に生きる姿があつたのだ。

耕作には、決して「奥手」の一言で片付けられない複雑な「心の流れ」のようなものが確かにあつたし、拓一に至つては一貫した強烈な愛情が全編を通して描かれていた。それは表面だけを捉えたのでは決して見えてはこない、行間にまで入り込んで初めて知れる、男女の切実な想いであつた。

耕作は思う。耕作は、福子ほど愛らしい女の子を見たことがない。いつも目がうるんでいる。唇が小さくて真っ赤だ。人を見る時、少し首を傾げる。それが何ともいえず愛らしい。

これは耕作がまだ小学三年生の頃に、いつも身近にいる同級生の福子に対して彼が感じている印象が初めて示される部分である。ここで思うのは、耕作の観察眼だ。三年生にしては、実に細かいところまで少女のかわいらしさを捉え

ている。しかしそれはただ耕作が幼いころから利発だったから、というだけではなく、彼の福子へのほのかな愛情があればこそその描写なのだろう。

耕作の初恋の相手は、間違いなく福子である。だがここで、彼の『兄』拓一の想いも絡んでくる。拓一の、福子に対する想いだ。

自分より三つ年下の、まだ六年生の福子だが、会うごとに、拓一の心を惹くものがある。血の気のないあの白い頬だろうか。すぐに顔を赤らめる内気さだろうか。とにかく、福子を見ると拓一の心は慰められるのだ。

拓一もまた、福子の特徴を良く捉えている。僕たち読者は、地の文からの福子像よりも石村兄弟の「福子の好きなところ」からとても多くの彼女の特徴を知る。そして、僕もまた福子に惹かれてしまうのだ。そこには彼らの温かい愛情があるから。だから読者も一緒に温かく、そして微かに切なくなる。

この彼らの福子に対する愛情は、そのまま「恋心」に置き換えられる。すると、ここから冒頭で述べたような「恋に鈍感な耕作」像が、彼の抱える葛藤の大きさにいとも容易く消え去ってしまった。

耕作は、福子のことを気に掛ける拓一の言動から彼の恋

心にうつすらと感付いていく。やがてそれは「福子と仲良くすることが後ろめたい」と思うようになってしまふ。それは耕作が兄の想いを尊重したいと考えるからこそその感情なのだ、拓一のある決意を彼の口から聴いたとき、耕作のその後が決まったのだと思ふ。

「ほかの男の玩具になった者を、なかなか人は嫁にはしない。だからな、兄ちゃんな、ぜんこ貯めて、いつかきつと福子ば嫁にもらつてやつからな」

拓一がはつきりと「福子を嫁にする」という決意を現した場面だ。その兄の決意に対して、耕作は複雑な想いを抱いている。

「うん、もらつてやれ」
耕作は、少し淋しいような気がした。

一見するととても素っ気ない描写だが、その行間から耕作の心に一瞬だけ爆ぜた閃光を感じ取つてしまふ。「淋しい」には、もちろん福子が兄の嫁になる、連れ去られてしまふ、という意味もあるが、もう一つ、「福子と結婚する」という明確な将来の夢を唐突に突き付けた兄に対しての劣等感や突き放された距離感を感じたから、彼は「淋しく」

感じたのだと思ふ。だからこそ次の瞬間には、

なるほど、兄の拓一は、祖父の言う、人にして上げた側の人間なのだ耕作は感心した。耕作はまだ、福子を助けたいとか、母に仕送りしようとか思ふよりも、何とかして勉強したいという気持ち強い。

と、自分に言い聞かせるように胸の内で吐露する。耕作は兄の想いを尊重して、自分の福子に対する恋心を「勉強に励む」教師になる」という考えに転嫁させたのだ。しかしそんな耕作の本心を押し殺した言動が、その後を描かれる若い男女の恋の駆け引きと、その連鎖作用を引き起こしていく。

曾山福子は悲劇のヒロインである。

その悲劇の原因となつたのが、彼女の父親の借金だ。酒とギャンブルに溺れた拳句の、膨大な額の借金であった。しかもそれが、深城という男から借りたという点で、福子の運命が一つ大きく決まってしまった。彼女は深城の経営する娼館の娼婦になるのだから。

わずか十代半ばで娼婦になつた福子は、屈折した精神のまま成長していくように思える。福子は子供の頃から耕作に想いを寄せている。それと分かる場面が、物語中には随

所に散在している。それは娼婦に身をやつした後にも変わっていない。

お守りにと福子から以前に貰った白い石を、耕作が返そうとする場面。

福子は黙って耕作の差し出す小石を見つめていたが、静かに首を横にふった。

「いいの、耕ちゃん。耕ちゃんにいいことが来れば、わたしはそれでいいの」

耕作もまた福子の想いに微かに気付くことがあった。けれど、彼はすぐに打ち消すのだ。気付いたことすらなかったことにしようとしている節もある。それは兄、拓一の決意があるからだ。福子に相応しいのは、兄ちゃんだ、というようにして。

福子もまた、自分は耕作に相応しい女ではない、と諦観に浸りきっている。娼婦である、ということが、福子から全ての可能性を奪ってしまっているのだ。けれど、耕作への想いは諦めきれずに残したままで、『泥流地帯』では、拓一の恋心は福子には決して伝わらない。耕作への未練が強すぎるからだ。彼女の心境の変化の訪れは『続 泥流地帯』の終わりまで待たなければならない。

この、決して交わらない一方通行の想いの流れに、深城節

子という支流が流れ込む。とても激しい流れの支流だ。

そうして初めて、物語は静から動へ、彼らの人生が現実

に即した方向へ向かうのだ。

深城節子もまた、拓一に負けず劣らず一途だ。

彼女が愛情を向ける相手は耕作だ。耕作は随分とモテる。節子の額に石ころがぶつかつたあの日から、その石ころを投げた耕作を一途に恋する節子。傷が残って嫁の貰い手がいなくなつたらどうすると攻め立てる彼女の父親に対して、「おれがもらつてやる！」と大見得を切つた少年を、それからずっと意識しているのだ。

しかし耕作はと言えば、前述したように福子への想いを兄への遠慮のために押し隠し、なおかつそれを勉学に勤しむことで忘れようと必死だ。だから彼は節子のアプローチに気が付かない。

幼少の頃から耕作といつも一緒にいた福子に嫉妬する描写もあり、それを耕作の目の前で表現したりするところは、節子の勝気な性格が良く現れている。それでも耕作は、拓一の決意と福子への情の狭間で揺れ動き、福子を傷物にした節子の父親への憎悪もあって、ついに『泥流地帯』で節子と向き合うことはなかった。縁談話が持ち上がったことを耕作に伝え、そしてその勢いで「耕作以外のところにはお嫁に行きたくない」とプロポーズまでしても、耕作はそれ

に答えない。失意の節子は兄を頼って東京へ逃げ出してしまふ。もしかすると、押して駄目なら引いてみる、という想いもあったのかもしれない。

そんな耕作が、十勝岳の噴火の後に節子と再会し、彼の中でこたわっていたものが溶ける。その劇的な瞬間は多くの行数を割いて語られる。やがて拓一も福子も巻き込んでゆく激流の始まりだ。

「でもねえ、石村さん。そのあなたが中学進学を諦めて、高等科に通うと知った時、わたし泣いたのよ」

「え!? 泣いた?」

耕作にとつても一生忘れられない、進学を諦めたという事実。それは姉の富を結婚させるためのことであつたが、それを自分のことのように悲しんでくれた人間がいた。しかも肉親以外で。よつぽど耕作には衝撃的だったのだろう。その驚きが長々と続く。そして最後にこう思うのだ。

自分が今、受けとめねばならないのは、節子の真実であつた。進学できない自分のために、人知れず泣いてくれたという真実が、耕作の胸をゆきぶつたのだ。そしてこの真実な節子に対して、自分は何をもつて報いてきたのだろうと、耕作は恥ずかしかつた。

耕作のこの劇的な心境の変化は、僕はやはり泥流がもたらしたあの悲劇が影響しているのだと考える。

目の前でかけがえのない家族や、大切な友人、教え子を失つた彼の中には、もう誰も失いたくないという強い気持ちが芽生えていたはずだ。泥流から奇跡的に生還した兄の拓一は日増しに遅しく、また遠い存在になっていく。福子はそんな兄にこそ相応しい。では、自分が守るべきものは? 失つてはならないものは? その答えが節子だったのだと思われるのだ。耕作の中で今までの迷いが払拭されて、進むべき道がはつきりと見えたこの“心変わり”の場面が、長い物語を通して僕は一番好きだ。一種のカタルシスをさえ感じるのだ。

やがて耕作は節子に、拓一の福子に対する愛情の深さを伝える。それで拓一と福子のロマンスも大団円へと向かう。

ある時、福子が、節子の兄の金一との結婚話が出ていることを石村兄弟に告げる。

これはもう、極限まで落とし込まれた諦観だと思う。一方で、福子は石村兄弟にカマをかけたのでは、と考えたりもした。結婚話を持ち出せば、耕作が、あるいは拓一が助けてくれるのではないかと。けれど、福子がそこまで打算的な女であつたなら、もうとうの昔に行動に移しているし、

そこまでの度胸があれば他の男に働きかけている。

福子は「死にたい」とも漏らす。限界まで追い詰められている。

そんな福子に救いの手を差し伸べたのは、節子だった。公娼廃止運動家の佐野文子のところへ逃げ込むことを提案したのだ。加えて、籍を入れれば、もう借金のために自分を売らなくてもよい、それは法律で守られているのだ、ということも教える。

けれどもすぐには首を縦に振らない福子。

恐ろしいのだ、節子の父親が。彼はどこまでも福子を追ってくる。その恐怖に苛まれてしまっている。どこまでも悲劇がまとわりついて離れない。胸が痛んだ。

物語はついに最後を迎える。

稲刈りをする石村兄弟に汽車が近付く。福子がうまく深城の娼館から逃げ出し、節子とともに汽車に乗っていれば、客車の窓から節子の白いハンカチが振られる。節子ひとりならば、赤い襟巻。

結果は、たなびく白いハンカチ。

「兄ちゃん！」

耕作は思わず叫んで、拓一をふり返った。拓一が、くずれるように稲の中にうずくまるのを、耕作は見た。

ごく自然に涙ぐんでしまったことを覚えている。何度読み返しても胸が締め付けられる。

彼らの見据える先には、輝く未来が広がっているのだろう。彼らは打ち勝ったのだと思った。残酷な天災の脅威から。無慈悲な人災の恐怖から。

拓一、耕作、福子に節子。彼らのロマンスと駆け引きから見えてきたものは、未来を求める人間の生命力と、困難に打ち勝つ強い意思だった。彼らの行く道は、もう二度と泥流には流されない。深城のような人間にも邪魔させない。そう読者に信じさせるほどに、強く、また強く。

三、善因善果、悪因悪果

僕が文章を書く時、怒りの感情から筆をとることがままある。それは自分を取り巻く環境に対してだったり、広くはこの世界の矛盾への怒りからだったりする。誰に読んでもらうためでもない雑文を、怒りに任せて書き散らかす。そうして胸の内の靄を吐き出すのだ。

この章もまた御多分に漏れず、僕の「怒り」を原動力にして書き始められている。しかし、その怒りの矛先はとてもミニマムなところで発生した。つまりは、『泥流地帯』という物語の中から。

深城という男。小説中の、そのたった一人の登場人物のために、僕の感情は幾度もかき乱された。作者の三浦綾子氏は、十勝岳の噴火だけではなく、何故に深城という存在が起す人災をも描いたのだろうか。このような厚顔無恥で卑劣な獣のような男が物語に登場しなければならぬ理由を、僕は考え続けた。そうして、三浦氏が『泥流地帯』で示したかったであろう「ひとつの世界の側面」に気が付いた。人の感情にどこまでも付きまとう、『善因善果と悪因悪果』の捉え方だ。

少し回り道をして、深城のことを書いておきたい。

深城は物語に初めて登場した時から終わりまで、「深城」であり続けた。彼は変化も成長もしない。終始一貫して自分以外の人間を見下し続けたのだ。そういう意味合いにおいては、彼もまた確固とした信念を持つて生きていると言える。けれどその信念はとても卑しい。欲にまみれた命である。

彼は石村兄弟の母、佐枝に言い寄って拒まれた過去から、初対面の兄弟に対して彼らの母のことを悪しざまに言う。それに対して怒った耕作が石を投げると、当たったのは深城の娘、節子だった。後に結ばれる間柄ではあるが、随分と衝撃的な出会いだ。

当然のことながら、節子の父は怒り狂う。それもそのはず

だ。彼は自分のことが一番だ。その自分の愛娘である。決して許しはしない。それに、何の因果か、その昔自分を拒絶した女の子供に傷付けられたとあつては怒りの程はいかほどのものか想像に難くない。

前章で書いたように、耕作はこのとき勢いに任せて節子を「嫁にもらつてやる」と口にするが、それに対する深城の言葉はこうだ。

「小作の小せがれの分際で、馬鹿も休み休み言え。学士でもなけりや、節子は嫁にはやらんが」

この姿勢である。おそらく彼はどんなに立派で地位も名誉もある人間でも、本質的には何も認めない。そしてそれは周囲の人間全てが含まれる。家族に対しても、である。

借金のかたに身売りされた福子の境遇は前章で書いた通りであるが、そう仕向けたのは娼館の主の深城だ。しかしそれはほんの序の口に過ぎない。彼の非道はエスカレートし続けていくのだ。

一番印象に残っているのは、『続・泥流地帯』で的一幕だ。外で出来た愛人を家に引き入れるために、妻のハツに金庫の金を盗んだという根も葉もない汚名をきせて追い出したのである。ハツとは内縁関係にあるとは言え、何という横暴な行為だろうか。この衝撃的な挙動には本当に言葉もでな

かった。

娘の節子はハツの実の娘ではない。後妻なのだが、それでもハツは我が子のように節子を愛していたことが、その節子本人の「お母さんが出て行くんなら、わたしも出て行くわ」という台詞から充分に分かる。結果的には、妻と娘は父のもとから去る。

読者の身からすると、悔しさと歯きしりする想いであつた。もしもできることならば、僕は万感の想いを込めてこの深城という男を殴つてやりたいとすら思つた。一方で、それほどまでに徹底した利己主義者としてリアルに描いた作者に脱帽した。

極めつけは、言い寄つた石村佐枝に拒絶された腹いせに、佐枝が義父の市三郎と出来ているなどというゴシップを集落中に言いふらしたという過去が開陳されるに至つて、僕はその辛さに耐えきれずに読むことをやめようかと本気で思つたほどだ。

これをたつた一人の人間が巻き起こし続ける強烈な人災の嵐と呼ばずして一体何と言おう。表現手段が他に見つからない。

細部まで深城の行動を追つていけば更にその悪行が出てくるのだが、大方以上の通りである。

キリスト教徒である三浦綾子氏は、この『泥流地帯』の中

でもその教義の中の「教え」を登場人物たちに語らせている。

市三郎が最初に聖書について言及する場面は、耕作の発言に端を発する。

「父さんは山で死んだべ。母さんは病氣になつたべ。ばつちゃんは中風当つたべ。きつと何かの祟りだつて、よく言われるんだ」

それに対し、市三郎が答える。

「そだことねえ。そだこという奴は、物事をよく弁えねえ奴だ。(中略)聖書には『正しき者には苦難がある』つて、ちゃんと書いてあつたぞ」

「辛いこと、苦しいことを通して、神様が何かを教えてくれるのかも知れんな。つまり、試練だな」

そうして、付け加えるようにして「悪いことをして罰が当たらんのが、一番の罰かもしれん」と説く。そんなことが聖書にあつたと思ひ出しながら。

僕はこの市三郎の『試練』と『罰が当たらないことが一番の罰』という言葉にこそ、深城という存在が内包する『真理』が隠されているのではないかと思うのだ。つまりこの世の中

は分かりやすく『善因』善果』と『悪因』悪果』という図式には当てはまらない、ということなのだ。

耕作は『続・泥流地帯』の中で、旧約聖書の「ヨブ記」に触れる。それはとても簡単にまとめてしまえば、[〃]正しい者が災難に会う話[〃]なのである。耕作はいつか市三郎が話してくれたことが記されていると気が付く。

後に耕作は、拓一に言う。「因果応報は人間の理想だよな、兄ちゃん」と。それを踏まえて拓一もまた、叔父の修平との会話の中で語る。

「それはねえ、人間の願望に過ぎないんだよ。悪い奴は亡びてほしい。いい人間は栄えてほしい。そういつもねがつているうちに、悪いことがあれば、何の罰だとか、いいことがあれば精進がよかったとか、そう勝手に思うようになってしまったんだよ、きつと」

彼らは「因果応報は理想であり願望」ということに繰り返し触れている。目からうろこの思いだった。確かにその通りで、自分自身を顧みれば、どうしても自分の生きやすい方へ、都合の良い解釈のできる方へ気持ちを向けたがる姿がいくつも思い浮かぶ。だからこそ、自分に害をなす者には悪い結果を、と望むのだ。

しかしながら、この世界は、いやもつと極端に言えばこの

惑星はそんな事柄を超越したところで今も太陽の周りを回っている。仮に地球や宇宙を[〃]神[〃]と置き換えるならば、神は因果応報のような単純な真理などには決して拘泥していない。神の意志は人知の到底及びもしないところに存在して、我々に影響を及ぼしている。酷く難解でなかなか理解ができなかったのだけれど、「ヨブ記」で示された教えにもそのような表現があったと思う。

そうしてみると、深城が物語の中で罰らしい罰を与えられないことにも理解できる。理解はできるが、決して納得はできない。

だから僕は、深城が背負っている「原罪」について考察してみようと思う。

深城の言動を追っていくと、彼は兎にも角にも金、そしてそれ以上に支配欲とそれに付随した承認欲求が見て取れる。周りから一目置かれる存在になることに固執している。そのための商売の成功であり、結果としての金なのだろう。要は[〃]説得力[〃]という財産を、金を持つことで得ようと必死なのだ。そのためなら、金貸しでも女郎小屋でも何でもやる。

けれど、彼を取り巻く者たちは深城という人間に魅力を感じているのではない。その者たちは彼のお金であり、成功を生む商売に群がっているのだ。誰も深城を見ていない。

彼は孤独だ。今までも、そしてこれから、誰からも本当

の意味において顧みられることもなく生きていく。しかしそれは自分で蒔いた種なのだ。彼もまた、誰も信じていないそれが結局、ハツと節子の出奔という結果を引き寄せる。家族を信じられず、受け入れなかったがための離散である。

そして『続・泥流地帯』のラストシーン。

彼が小菊と名付けた金の卵、福子も彼の元から逃げ出した。残ったのは己と、己の金に集まった有象無象だけだ。

彼は愛情を知らずに死んでいくことだろう。これが深城の背負った「原罪」だと僕は想像する。それは「創造」といった方が良いのかもしれない。再三に渡って言及したように、深城は誰からも、何からも罰せられないからだ。読者が罰を「創造」しなければ、因果応報の概念に囚われてしまっている僕のような読者はきつと物語を読み終えることができない。今もって僕は彼を赦すことが出来ないでいる。三浦綾子氏ならば、こんな僕に一体何と言って下さるのだろうか、夢想せずにはいられない。

僕は結局、耕作や拓一とは違い、因果応報の檻の中からずっと抜け出せないままなのだ。

四、泥流地帯

子供のころから、自分の住む地域について学校の授業やお

年寄りから聞かされて知っていたことがある。僕が『泥流地帯』で描かれた未曾有の悲劇に対して、脳裏に鮮明なイメージを想起できたのも実はこの「刷り込み」によるところがとても大きい。

僕の記憶にずっと残っていたもの。それは正に故郷がかつて「泥流地帯」となり、そしてその泥土の上に我が家が建っている、という紛れもない事実だった。

長野県北佐久郡軽井沢町と群馬県吾妻郡嬭恋村にまたがって鎮座する、標高二五六メートルの成層火山である浅間山。今でも活発に活動している火山の一つである。小規模な噴火もまれに起き、麓では車のフロントガラスにうっすらと灰が溜まり、そしてその模様がメディアに取り上げられたりもする。荒々しい山であるが、その雄姿は日本百名山に数えられている。

その浅間山が大噴火を起こしたのは、一七八三年七月のことである。

このときの噴火により火砕流が発生し、群馬県側の河川・吾妻川に流下した。これが麓の集落に流れ込むときには大量の土石流となって、人と家、家畜を激流の中に巻き込んでいった。その土石流はやがて利根川に合流し、驚くべきことに太平洋にまで流入したという。この天災によって、死者は千五百人を超えた。倒壊した家屋もほぼ同数だ。

以上は『泥流地帯』を読んだ後に、浅間山のこの「天明の

大噴火」について調べたことを端的にまとめたのだが、もちろん子供のころに聞かされたことはもっと単純で、もっと怖い「昔話」だった。

土石流が流れた吾妻川は今でも実家を少し下った先に清々と流れ続けているし、川とは逆方向に上って行けば交通量の多い国道が走っている。

しかし、その風景を飲み込むように、泥の塊のバケモノが山の方から凄い勢いで流れてくる。真つ赤な口を大きく、大きくあけて人や家を飲み込んでいく。

そんなイメージだ。子供心に、これはとても怖かった。それは噴火の昔話を聞いた僕が勝手に想像したことだが、その恐怖のイメージとともに浅間山の噴火の事実を決して忘れることなく生きてきた。故郷を離れた十数年があつたにもかかわらず、である。

前置きが多少長くなってしまったが、そうして出会ったのが小説「泥流地帯」である。あらすじを目にしたとき、まず真つ先に脳裏に浮かんだのが、このバケモノの濁流のイメージだった。この小説はきつと残酷で悲惨な物語になる、と先走って考えて暗澹たる気持ちになった。

それは一部分では正解だったとも思うし、今までの章で述べてきたような輝かしい希望や人間を讃えるような側面も描かれていることから、決してそれだけではないと言える切れる。

悲劇の先に見えるものとは一体何なのか。僕はそれについて時間をかけて考えて続けた。

『泥流地帯』には大正年間の十勝岳の大噴火が描かれている。しかし、ここに僕は驚きを隠せないでいる。それは、十勝岳の噴火が引き起こした悲劇は「物語のほとんど終わり間際でようやく描かれる」という点だ。

『泥流地帯』は十一の章から成り立っている。その章立ての最後の二章、「轟音」で十勝岳は噴火し、「煙」でその直後の人々の失意や決意が描かれる。そのたった二章分でのこの小説のタイトルの核心に至るのだ。僕はこの構成にまず驚いたのだ。

それでは、噴火までの九章分は無駄に長いだけなのか。いや、断じてそうではない。この石村家を中心とした人々の営みが丁寧過ぎるほどに詳細に描かれているからこそ、最後の二章が厳然たる存在感をもって圧倒的に迫ってくるのだ。読者はそれまでに十二分に日進の沢の暮らしぶりに没頭している。あたかも自分も集落の一員になったかのごとく、彼らの日常を身近に感じるようになっていくのだ。石村家、それから日進の沢を襲った悲劇がこれによって痛いほどの現実感をもって読者に突き付けられる。作者の手腕、この物語に注ぐ並々ならぬ気迫を僕は感じた。

そうして正に「青天の霹靂」を体現するかの如くに唐

突に起つた天災は、様々な形で悲劇を描く。その第一が、石村家の市三郎とキワの祖父母、姉の富と妹の良子の死だ。

沢の入り口に、真つ黒い小山のようなものが押し寄せて来る。

「あつーあれはー……」

拓一が驚ろく間もなく、その黒い小山はみるみる沢口一杯にせり出して来た。と、その黒い小山は、怒濤が崩れるように出口に広がった。

これは噴火の後山から崩れ落ちてくる土石流のことを文中で初めて表現した一文だ。僕が子供のころに聞いて想像した光景は正にこれだった。『黒い小山』がそのまま赤い口を開けたバケモノになる。読んでいて、息が詰まるほどの恐怖を感じた。

この黒い小山のバケモノに、良子たちは一瞬のうちに飲み込まれて、そして命を奪われた。本当に唐突で、呆気なくて、読みながら僕は呆然としてしまった。

遺体収容所での一幕など、読み進めることが苦痛だった。傷付き、浮腫んだ良子の顔は一見しただけでは彼女であるかと耕作ですら判断できない。しかし、親兄弟が近付いてきた遺体は、その存在を気付かせるために鼻から血を出すという迷信の通りに、良子の鼻から血が流れる。それは紛

れもなく、良子の遺体だった。十勝岳噴火の前夜、生き別れの母親に再会できると心底喜び、眠れないでいた良子のエピソードも相まって、ついにその願いが叶わなかったことが胸を刺す。歯を食いしばりながら読み進めたことを僕は思い出した。

生きていて欲しいとどんなに願っても、無情にも物語は悲劇を生み続けていく。

教師の菊川もまた、泥流で最愛の家族を失った人物だ。彼は拓一や耕作が通った小学校の教師である。彼は人格者で、教え子たちから慕われている存在だ。実際、彼の言葉には力がある。説得力があるのだ。高等科に進んだ耕作が、市街地からの生徒たちに馬鹿にされるのだと愚痴をこぼした時の、菊川の言葉が印象的だ。役所は三日休んでも構わないが、食べ物が三日もなければ困ると言った上で、

「その大事なものを作っているのが、農家だ。一番大事な仕事をしてくるんだ。一番大事な仕事をしていて、貧乏な小作が多い。これはなあ、小作の責任じゃない。世の中みんなの責任だ。お前たち、胸を張れ。日本国中の農家が、つくった物を売らんかったら、困るのは農家を馬鹿にしている奴らだ」

こう言って、耕作たちの心に誇りを植え付けたのだ。貧し

いことを恥じるな、と。

そんな菊川の家族を、最愛の妻と生まれたばかりの子供の命を泥流は奪った。善人の手からかけがえのない財産を奪ったのだ。やはり僕は因果応報、善因善果の法則を願ってしまふ。それは人の理想なのだと分かっている、余りにも理不尽である。それでも苦難とは耐え忍ばないといけないものののだろうか。

そして悲劇の最後の挿話として、耕作の受持ちの生徒、坂森五郎の死を挙げたい。

五郎は母親と死に別れていて、同じく母と生き別れている耕作と綴り方を通じて心を通わすのである。

彼は噴火の日、耕作の家に遊びに行こうと日進の沢へ向かった。この、自身の担任の家に、しかも一人で遊びに行く五郎という子供の心境を思うと、僕は胸が締め付けられる寂しき、人恋しき、他にはどんな想いが五郎にはあったのか父や兄に対して聞くことのできない心を耕作に寄り添わせていたのだろうか。そんな魂と魂の共鳴も、泥流は無情に飲み込んでしまった。

物静かな五郎の死が、僕には一番真に迫って感じられた。

とぼとぼと下を向きながら、耕作の家を目指す五郎。これは行間を読んだ僕の想像に過ぎないのだけれど、そんな少年の姿が不思議とごく自然に浮かんできたのだ。だからこそ彼の死を聞いた耕作が職員室を飛び出したとき、僕も一緒に

駆け出していた。もうこれ以上、悲劇の追体験はしたくないと思いつながら。そうして五郎の骨壺を抱く耕作の姿に涙があふれた。

作者・三浦綾子氏が限りなく現実逼迫って描き出したこれら悲劇の先にあるものは、つまりは泥流の犠牲になった彼らの魂を越えた先にあらねばならない。僕はいくつもの死を目にしていく中で、そんな風に思うに至った。

ここに、妻子を失った菊川の言葉を引用したい。噴火の日、日進の沢を離れていた菊川は、そのために命を救われた。しかし彼はひとりだけ生き残ってしまったとも言える。そんな彼は言う。

「とにかく、災害に遭うと、人の情が身に沁みるよ。先生はなあ、家内と子供は失った代りに、感謝というところが、わかったような気がするなあ。失ったものばかり数え上げてみても、生きる力にならん。自分に残されたものを、数えて感謝しなくちゃなあ」

菊川は悲劇の先に、残されたものに感謝し、大切にするという真理を見出した。残されたものとは、自分の命も含まれているのだろう。彼と同じ境遇に陥ってしまったとして、僕はここまでの境地に達することが果たしてできるだろう

か。とても難しいことだと思う。菊川の周囲には、耕作はもちろんのこと、心の温かい人々が多いのだ。でも、僕の周りも心の温かい人が多いから、もしかすると彼のように感謝の気持ちを感ぜられるのかもしれない。

そして悲劇そのものをどのように捉えるかに関して、石村佐枝がこう言っている。

「苦難に会った時に、それを災難と思って歎くか、試練だと思って奮い立つか、その受けとめ方がだいじなのではないでしょうか」

そして、母のその言葉を受けて耕作が想いを述べる。

「試練だと受け止めて立ち上がった時にね、苦難の意味がわかるんじゃないだろうか」

悲劇を乗り越えられない「災難」と捉えるのではなく、乗り越えられる「試練」と捉える。そして試練を乗り越えた先に見えたものは、拓一の復興した水田に伸びた稲であり、若い男女が好き合つて結ばれるという「希望」である。耕作の言う苦難の意味は、だからきつと希望だ。

そして『泥流地帯』に最後まで脈々と流れる希望を、僕は最後に挙げておきたい。

福子というひとりの人間の存在が、僕には「希望」の象徴のように思われるのだ。それは、泥流に飲み込まれ流されようとも、耕作によつて汚泥の中から救い出される。耕作が彼女の全身にまとりついた泥を拭い落とす場面は、ある種の強烈な印象を残している。命が泥の中から再誕生してきたように僕には感じられたのだ。

——泥まみれの命。

これは冒頭に書いた通り、この『泥流地帯』に流れるテーマを掬い取ろうとしたときに脳裏に浮かんたフレーズだった。暗喩のつもりでそう表現したのだけれど、福子は正に泥まみれの命をさらけ出したのだ。

命を救われた福子は、深城の元からも逃げ出し、自らの手で自らの幸福を捉えるべく動き出す。そこに彼女が体現してみせている力強い「希望」が見出せるように思う。

一介の営業マンに過ぎない僕は、日常生活の中で泥にまみれることはない。

けれどこれから先の未来において、何が起るかなど分りはしない。自然災害に見舞われるかもしれない。その時に、実際に泥に流されてしまったとしたら。また、大切な家族が悲劇の餌食になるかもしれない。これは現実的な意

味においての「泥にまみれる」ことへの恐怖だ。この恐怖を決して忘れてはならない。

暗喩としては、例えそのような未来が訪れようと、石村兄弟や日進の沢の住人たちのように一所懸命になって毎日を生きる、という意味で「泥にまみれる」と僕は表現する。だからきつと、僕も「泥にまみれて」生きているのだ。懸命に毎日を生きていると自信を持つて言えるのだから。

泥にまみれたいのちは、美しい。

三浦綾子氏が創造した世界には、苦難を試練として乗り越えた美しい命の輝きで満ち溢れている。現実の世界にもまた、数えきれなくらいの悲劇や困難が絶えず起きている。それらをまとめて「試練」と捉え、それを乗り越えようとする人々もまた大勢存在している。その先には「希望」があると信じて。

泥にまみれたいのちは美しい。だからこそ、この世界もまた美しいと感じられるのだ。

(終)



「生きている意味とは？」

齋藤 秀光

文芸部の顧問になり、部の活動として朗読劇を図書室で開いた。きっかけは、上川支部が当番校として、全道大会を開くにあたり、三浦綾子著『泥流地帯』の舞台である上富良野町に引率することだ。そこで、上川支部の各高校に、上富良野町に引率するバスの中で作品紹介することになった。それぞれの登場人物について紹介することを任せられ、本校は、「節子」が担当だった。

それを行う前に、上富良野高校で『泥流地帯』を朗読劇にして発表する場があることを知り、私が見学に行った。私は、旭川市の高校に勤務はしているが、富良野に在住している。実際にこの朗読劇を観るまでは、この上富良野町で起きた泥流のことは知らなかった。上富良野高校の有志による朗読劇の熱演は、思っていた以上のものだった。ものすごく、心が揺さぶられた。そこで、早速、部員に朗読劇のことを話した。「節子」についても朗読劇の中での「節子」について話した。だけれど、あくまで朗読劇での「節子」ではない。そこで、部員にも『泥流地帯』を回し読みして、それぞれまとめてくるように課題を出した。それと、本校で生徒向けに朗読劇をやらないか？と持ちかけてみた。もちろん

ん、そんな経験は私も部員もない。部員を何とか納得させ、しぶしぶだったが許可を得た。脚本は、三浦綾子記念館の事務局長であることを知りアポイントを取らせていただくと快く許可をいただいた。

その朗読劇を実施するために、『泥流地帯』『続泥流地帯』を購入し読んだ。当番校業務に追われてはいたが、作品の力強さに圧倒され、長編にも関わらず2日で読み切った。

特に、家族や周りの人間模様がよく描かれていた。突然の噴火による泥流で亡くなった人やそこから這い上がる人の姿が私の心に刺さった。突然のできごと戸惑いながらも、亡くなった人を偲び、生きること必死になることは容易ではない。身近だった人の死を受け入れるのはどれほど辛いことか。また、家の事情により、不本意な人生を受け入れないといけない人物が描かれていた。時代と言えどもそれまでだが、それを受け入れ、前に進もうとする姿に考えさせられた。また、私たちの学校の担当人物だった「節子」も、家の事情により、世間から冷ややかな目で見られながらも、人のためにできる道を切り開く姿があった。そして、泥流に埋め尽くされた自分たちの土地の復活に何年も要しながら、世間・町民と闘いながら復活を遂げる人物。教育を通して、町民を支える主人公の姿もあった。私は、いかなるできごとが起きて、人の「生きる意味」を貫くことの難しさや使命を考えさせられたし、これからの自分の人生につい

ても考えさせられた。

きっかけは、文芸部の活動ということだったが、私自身、この舞台である上富良野町を毎日見ながら、通勤している知らないことを知ることができ、そういう状況下でこの素晴らしい大地があることを改めて認識した。私たちは、今のコロナ禍で考えさせられることばかりである。しかし、この『泥流地帯』は、私たちの人生の道しるべになるだろう。

学校で行った朗読劇では、三浦綾子記念館の事務局長も観に来られた。私も部員も緊張しながらなんとかやり遂げられた程度のものであった。でも、作品・脚本の力強さで乗り切ることができた。これは、貴重な体験である。読書で終わることなく、当番校の務めで終わりではなく、緊張しながらも人前で発表出来た経験こそが大切なのである。1人でも多く、この作品を通して考えていただいたり、自分たちもこの作品を通して何ができるのかを考えた。これは、初めの一步に過ぎない。現在、見えない敵である「新型コロナウイルス」とは、共存していかなければならない。今こそ、「生きる意味」が問われている。そう考えさせられた『泥流地帯』だった。



「新泥流地帯」芽依が想い描いた町」

渡邊 悌

■ テーマ「人間の融和と再生」

・現代社会のマイノリティーへの差別（女性差別、障害者差別、民族、性的マイノリティーへの差別、経済格差による差別）やハラスメントを描き出し、虐げられている者の置かれている立場や、地域、学校での関係性、気持ち、意識等を具体的に丁寧を描き出す。しかし、十勝岳噴火の被災地域で復興活動に励むマイノリティーの人達をマジョリティーの人たちが垣間見ることににより、差別していた側の意識が少しずつ変わり、マイノリティーの存在を認め、共生社会への一歩が踏み出され、将来への希望が描かれる。

・「LGBT」や「発達障害」というラベル（属性の明確化）により、その人達の存在が可視化され、社会の中に見えるようになったが、「…があるからじゃない」と言う自分たちとは別世界の人達として、新たな区別、差別が起こっている。

・差別の克服は、人をその属性から見るのではなく、その人の「人間性」や「人間性の投影される行動・態度」を経て、人としてあるべき規範を共有し、その人と共感することによって可能である。その意味で属性からではなく、人間

性や価値を考える作品にしたい。

■ 構想

・オリジナル作品の登場人物の関係図を作り、それを模した関係図を現代に即して設定変更して作成し、若干登場人物や設定を変える。

「石川家」

・原作の石川家の祖父市三郎は理知的な老人として描かれているが、新泥流地帯の石川家の祖父哲雄は典型的な田舎の保守的な頑固爺で、町議で議会委員長をしている地域の有力者として描く。「男子厨房に入らず」等、家庭や酒席では男尊女卑的な言動やパワハラをするタイプ。力づくで、現在の地位を勝ち取ったことから、多くの人から恨みを買っている。祖母由井は典型的な夫に尽くすタイプ。夫の言われるまま、自分の思いを押し殺しながら生活しているため、結婚生活40年間の不満を募らせているが、それを口に出すことが出来ない。その不満のエネルギーを祖父哲雄の意に反して腹違いの四人の孫の世話を甲斐甲斐しく見ることで補っている。

・原作では母親佐枝は父親義平と死に別れ、祖父市三郎に子どもを預けて遠隔地で髪結いの修行や病氣療養をして、作品には全く登場しない。新泥流地帯では、母親早苗とし、民俗学の研究者で大学の教員と設定した。前夫との間に二人の子どもと、現父シブシブとの間にも

二人の子ともがいると設定変更した。現父シブシソは南アフリカ出身の黒人。黒人差別と戦うNPO法人の代表だが、過激な言動(政府の差別的な政策に対する批判的言動)から南アフリカ当局に睨まれて四年前に失踪(政府当局からの拉致の疑いも)。それまで親子四人は南アフリカの比較的治安が良い地域で暮らしていたが、現父シブシソの失踪を探る意味もあり、母親早苗は治安の悪い地域に調査研究に入ることになった。そのため、母親早苗は子どもと暮らすことは危険と判断し、けんか別れた実家に子ども四人を預けるという設定にした。母親早苗の結婚を祖父哲雄は猛反対。「親子の縁を切る」とまで、宣言して喧嘩別れしている。

原作では子どもたちを、長女「富」、長男「拓一」、次男「耕作」、次女「良子」と設定されているが、子どもの設定を前夫との間に、長女「琴葉」、長男「悠真」を設定。現父シブシソとの間に、次女「芽依」、次男「陽翔」とした。前父の子どもを引き取り、母親早苗と現父シブシソと四人の子どもが暮らしていたが、現父シブシソの失踪で祖父哲雄の石川家に預けられた。腹違いの兄弟は仲が良く、特に長男「悠真」は次女「芽依」、次男「陽翔」の面倒を良く見ていた。芽依は成績優秀だが、内気な女の子。父親似で肌が黒く、髪もパーマがかかり、黒人特有の容姿をしているため、学校ではからかわれたり、いじめの対象になる。次男「陽翔」は発達障害があり、特別支援

学級に通いつつ、通常の学級にも通い授業を受けるが、一方的で乱暴な言動によって、クラスの子から敬遠されている。長男「悠真」はスポーツ万能で、高校卒業後J・A.に入社し、青年部のリーダー。次女「芽依」、次男「陽翔」を常に助けている。長女「琴葉」は年が離れているため、他の兄弟と少し距離がある。

〔武井家〕

原作では長女「富」が嫁入りした相手として「武井」が登場し、その母「シン」によって嫁いびりが行われる様子を描くが、新泥流地帯では長女を「琴葉」として描き、武井と結婚する設定はそのまま残す。しかし、この稿では武井をアイヌ民族の流れを受け継ぐ家系として設定し、嫁ぐことで民族的差別を受ける状況を描く。武井家は家代々木工職人をしてながら生計を立てている。原作では嫁入りした「富」は姑「シン」にいじめられるが、ここでは「姑」嫁問題としてではなく、「民族差別」として描く。武井家は地域から孤立し、ほとんど地域住民との関わりを持たないで生活する。それ程までに、辛い差別的な扱いや言動を受けている。

〔曾山家〕

原作では小学校同級生の家として曾山家が登場する。子どもとして「国大」「福子」「鈴代」を設定し、「福子」は深城へ売られていくが、「新泥流地帯」では曾山家を「虐待家族」として登場させ、一人娘の「日和」を虐待する様

子を描く。

〔株式会社 黒場〕

・原作では隣家として「柄沢与吉」が登場し、二人の使用人も登場する。新泥流地帯では会社経営者で保護司の「黒場昌明」を登場させ、児童相談所を通じて虐待児の「日和」を保護する役を与える。

〔アウトロー 深城〕

・原作では「福子」が売られる女郎屋の深城はそのまま登場させ、LGBTの人たちを雇ってゲイバー等水商売を手掛け金儲けをしている、地域のアウトロー深城として描く。原作では女郎屋深城の子「節子」は「耕作」に恋心を抱き失踪し、逆恨みした女郎屋の深城は祖父市三郎に因縁を付けるが、新泥流地帯ではアウトロー深城の子として「麻衣」が登場し、長男（悠真）に恋心を抱くが、叶わぬ恋であることを知り、自ら命を絶つ。祖父哲雄の殺害動機の一つになっている。

■ あらすじ

・祖父哲雄は、娘早苗の結婚を認めていなかったが、現父シンブシンの失踪という事件を前にして子ども四人を預かることにした。しかし、子どもたちへの差別的扱いが目にするものがあつた。特に、長女（琴葉）と長男（悠真）をかわいがり、次女（芽依）に対しては容姿から、次男（陽翔）に対

しては障害から受け入れられず、拒否的な対応になっていた。しかし、祖母由井は祖父哲雄とは逆に、次女（芽依）、次男（陽翔）をマイノリティー故に懸命に支え続けようとした。

・長男「悠真」と次女「芽依」を中心にしつつ、四人の子ども達が協力して祖父哲雄との生活や学校でのさまざまな差別を乗り越えて行く様子を描く。同級生に虐待児の日和やショーパブで働くLGBT等マイノリティーの子どもたちも描くことで、子どもたちの屈折した関係を表現する。特に長男「悠真」は高校卒業後、J・A.に就職して青年部部長になり、精神的にも、経済的にも自立した大人へと成長していく。次女「芽依」は黒人特有の容姿をしているため、学校ではからかわれたり、いじめの対象になり悲しい体験を積み上げていたが、その時々長男「悠真」が心の支えになってくれる。しかし、次女「芽依」は中学進学する頃から、学習、スポーツの全てで優れており、少しずつ力を発揮し始める。その結果、いじめていた子どもたちと立場の逆転が起こる。次女「芽依」はLGBT等マイノリティーの子どもたちを巻き込み、生徒会長に立候補し、学校改革を始め、その矛先は翻弄される菊川先生を巻き込み、学校や教育委員会改革へと向かっていく。その時に十勝岳の噴火に遭遇し、学校や同級生を失うが、LGBT等マイノリティーの子どもたちや親を巻き込んで地域の復興

活動に取り組む。その活動に感化された、J・A.に入社し青年部のリーダーになつていた長男「悠真」や会社経営者で保護司の「黒場昌明」をも巻き込んだ運動へと展開していく。地域的に孤立していたアイヌ民族木工職人武井は、今までの差別されてきた体験や阻害されてきた恨みから、なかなかこの運動に加わろうとしなかったが、次女「芽依」はLGBT等マイノリティーの子どもの熱心な働きかけで、心を動かされ、運動の輪の中に加わり始める。上富良野中央小学校(架空)担任の代替教員菊川先生も、学校長、教育委員会の方針に翻弄されながら、マイノリティーの子どもの立場に立つて振る舞うが、代替教員で校内での立場は弱く、吃音があることから他の教員から疎まれ、翻弄される様子を描く。ここでは学校現場が抱える課題を浮き彫りにする。

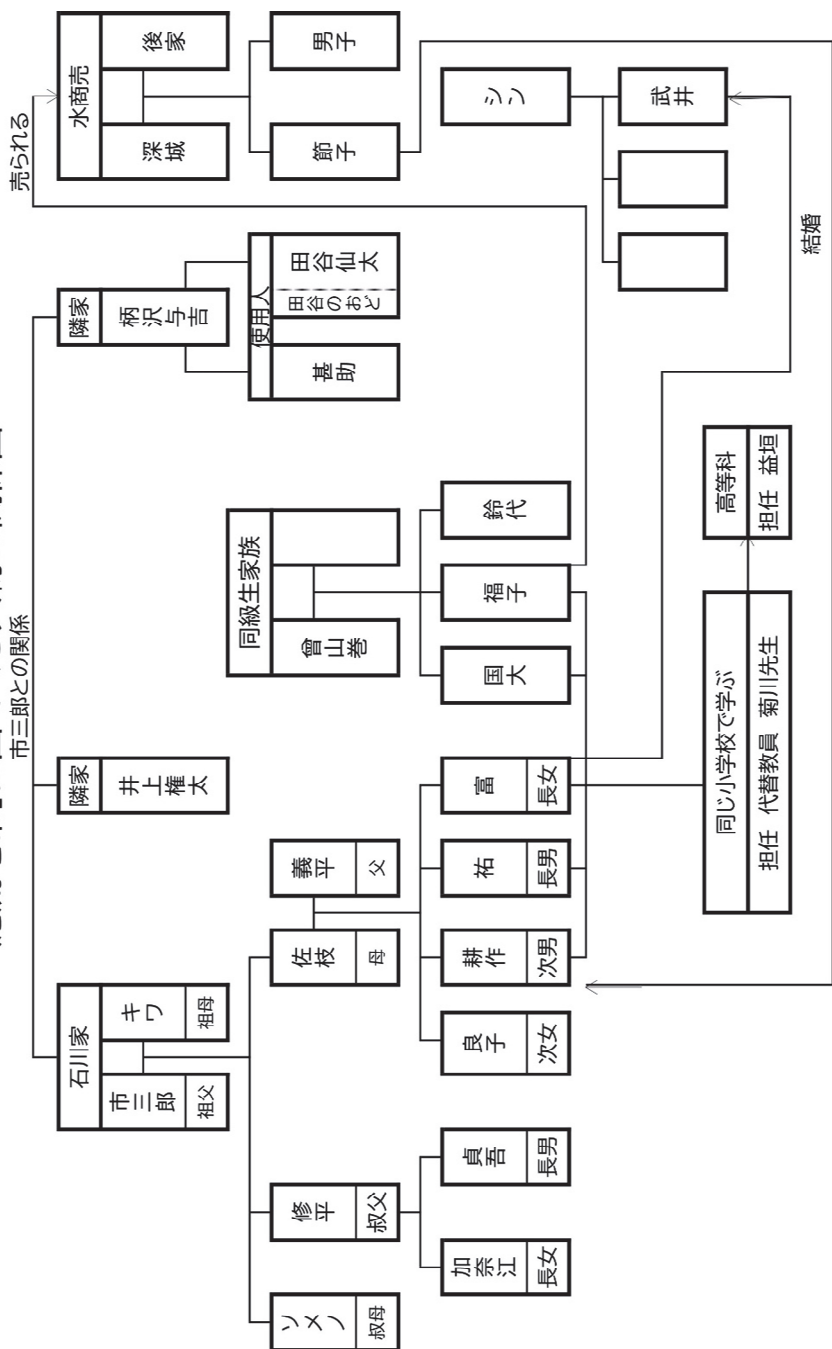
・アウトロー深城は如何わしい商売を展開することで、地域の名を汚しているという理由から、祖父哲雄から目の敵にされているため、二人は犬猿の仲。アウトロー深城は、新たにシヨープを作ること、祖父哲雄から強く反対され、議會を巻き込んだ反対運動に発展し計画がとん挫し、多額の借金を抱えることになった。また、長男「悠真」に恋心を抱いた娘「麻衣」が叶わぬ恋と知り、自ら命を絶つたことに対して逆恨みをしたため、祖父哲雄を強く恨み、祖父哲雄の殺害計画を隣家井上孝夫と共謀して立てる。

計画は祖母由井を言いくるめて多額の生命保険に入り、時期を見計らつて祖父哲雄を殺害し、保険金の受取人名義の祖母由井を言いくるめて、保険金だまし取り、多額の借金返済に当てる計画だった。しかし、殺害を前にして、突然十勝岳の噴火予兆が見られたため、アウトロー深城はこの機会を利用して殺害を実行することにした。隣家井上孝夫と相談し、「現地視察」を名目に祖父哲雄を車で連れ出すが、タイミング悪く大噴火に巻き込まれ、日新ダムが崩壊。その泥流に巻き込まれ、三人とも命を落とす。後日、保険金は祖母由井に下りることになる。

・曾山家はこの噴火による泥流に巻き込まれ、全員命を落とす。そのため、虐待児の「日和」を保護する「黒場昌明」が「日和」の里親になることになり、新たな生活が始まる。噴火の混乱で住民達は大混乱に陥るが、シヨープで働くLGBT等、マイノリティーの人達は、自らの命をささげる献身的な救助活動を通して、地域住民からも認められる。↓尊厳の獲得と市民権の獲得

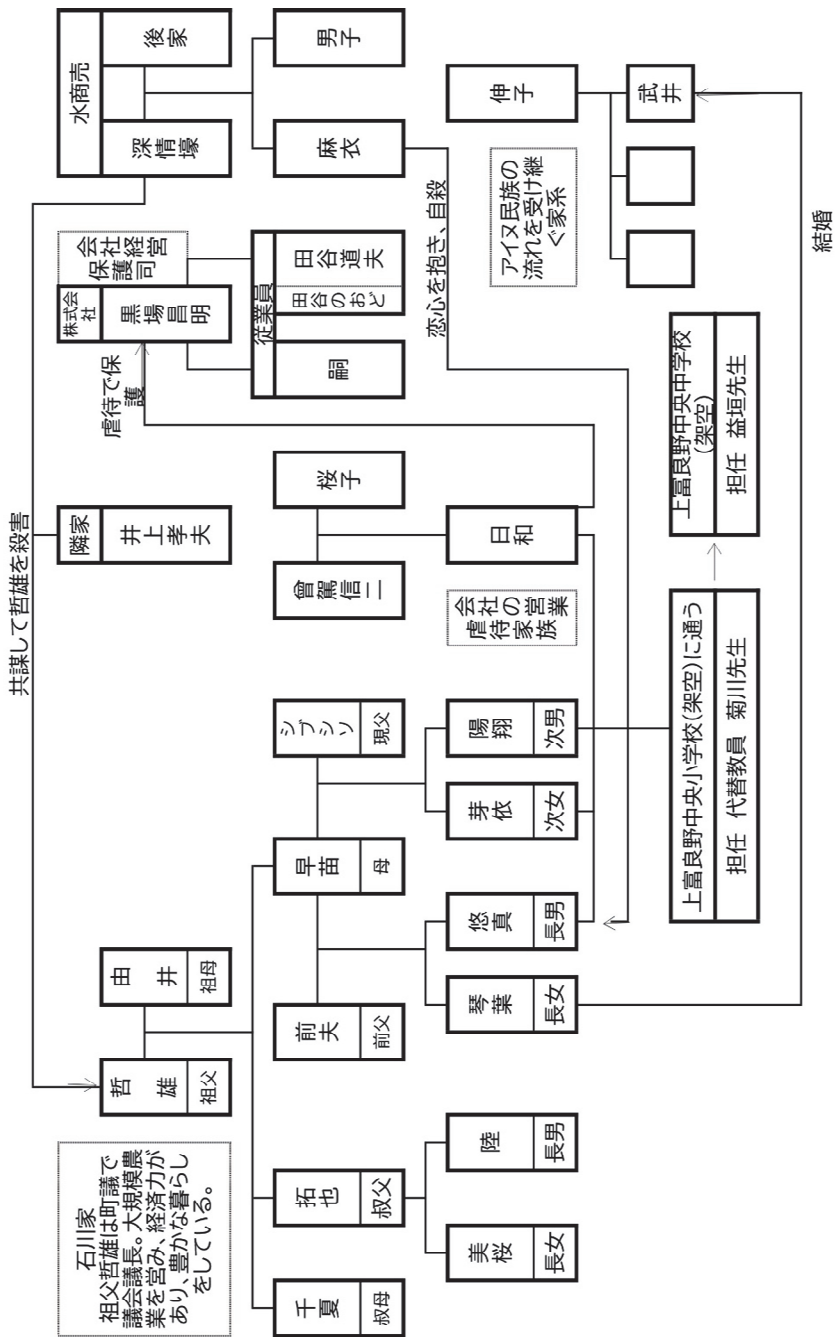
・噴火によって祖母由井は、多額の保険金を得ると同時に、祖父哲雄から自由になる。母親早苗は噴火の一報を受けて、南アフリカの職を辞して日本に戻ることを決意。祖母由井の保険金を元に日本でNPO法人を立ち上げ、マイノリティーの人たちと二人の子どもの暮らしが新たに始まる。

「泥流地帯」に出てくる人物の関係図



耕作に好意を持つが、失踪

新構想に出てくる人物の関係図





この星で生きること

(ペンネーム) 花川 あき

真新しいブックカバーに包まれた文庫本を読みはじめた私は冒頭から一瞬にして物語の中に引き込まれてゆきました。

上富良野を思うとき、鮮明に浮かんでくるのは紫色に染められた華やかなラベンダー畑や、モザイク画のように美しく広がる美瑛の丘です。それが観光や富良野岳登山で何度か訪れた私の印象です。そして、その時々に見てきた上富良野の風景はダイナミックな自然の美しさと、丹精込めて育てあげられたラベンダー畑に、長閑で穏やかな農村のイメージでした。しかし泥流地帯、続泥流地帯を読み終えたとき、私はただ呆然とするばかりでした。それは、これまで私が抱いてきた上富良野のイメージとは、まったく違ったものに変わっていたからです。その変化とは上富良野が長閑で美しい観光地というだけではない、もっと奥深い地の底を見たような感慨深いものでした。奥深い地の底とは決して暗いイメージではありません。上富良野の地が筆舌に尽くせぬ開拓者の汗と涙の労苦によって作りあげられ守り続けられてきたという厳然たる事実です。私はその重い歴史を知ったとき、遙か遠い極寒の地だった上富良野へ新天

地を求めてやってきた全ての開拓者に対して畏敬の念を抱かずにはいられませんでした。そして泥流地帯のストーリーから北海道開拓の礎を垣間見たような厳肅な思いにかられました。

泥流地帯に登場する石村家族やそのまわりの人びとは、それぞれに与えられた運命に翻弄されながら純粋に生きる人間の底知れぬ強さがありました。また十勝岳噴火という恐ろしい災害にあつても、真つ向から立ち向かうとする逞しさがありました。

それにしても何故、何の罪のない人々に容赦なく不運が降りかかるのか。そんな釈然としない思いが文字を追う私の胸のなかですっとくすぶり続けていました。けれども二冊の泥流地帯を読み終えたとき、そうした思いは静かに消え去っていました。それは人生に平坦な道など無いのだということ、どんなに苦しく困難な境遇であつても目の前にある小さな幸せに心を寄せることができるなら、それがこの星で生きる道ではないか、と改めて気づかされたからです。また、私は読者から離れて主人公耕作のなかに自分自身を重ね合わせている自分に気づきました。それは私が耕作と同じように一〇歳のとき母との別れを経験していたからなのかもしれません。

主人公耕作の母佐枝が、何も言わずに家を出た別れの場面は、ありありと私の胸に迫ってきました。それは幼い日の私の姿そのものだったからです。そして苦難にぶつかるたびに立ち止まり、自問自答を繰り返しながら葛藤する耕作の心のあり様は私の青春時代を彷彿とさせるものでした。また耕作には兄弟思いの兄拓一と姉の富、そして妹の良子がい었지만、私にも姉と兄がいたことは、とても幸せなことだった、と改めて気づかされたのです。

私が母と別れたのは昭和三十五年の春のことでした。一〇歳の私にとって母との別れは辛く悲しい出来事でした。また私達兄弟には耕作兄弟のように孫達を慈しむ祖父母もいませんでした。ただお酒に溺れた父が時折そばにいただけでした。そんな私達兄弟三人はまわりの人たちや、見ず知らずの人たちに支えられながら暮らすことができました。しかし母は不憫な私たちの生活に胸を痛めて再び父のもとに戻ってきたのです。しかし父との生活が長く続くことはありませんでした。母は悩んだすえに、私たちを連れて母子で生きる道を選びました。それからの母は生きてゆく為に懸命に働きつづけました。しかし五十七歳になったとき病に倒れてこの世を去ってゆきました。それが母との永遠の別れでした。

肉親との死別ほど深い悲しみはありません。けれども目の前の黒い泥流に押し流されてゆく死別の悲しみは想像すらできません。そして祖父母や妹を助けようと泥流の中へ飛び込んでゆく兄の拓一を見た耕作の思いもはかり知れません。拓一の姿はまさに命さえ惜しまぬ真の愛そのものでした。その拓一が奇跡的に助かったことは大きな救いでしたが、泥流は多くの人たちの命を呑みこんでしまいました。噴火という地球の営みは人間には残酷で容赦のないものでした。

十勝岳噴火の歴史は今を生きる私達にも無縁ではありません。私たちが生きてゆく大地は火山噴火や地震と共にあります。十勝岳大噴火から九十四年が経った今では、豊かさや便利さに逆行するように、地球が疲弊してしまい自然災害が起きるようになりました。こうした災害が起きるたびに成すすべもなく多くの人びとの命が奪われてゆく現実にただ胸が痛むばかりです。どんなに科学が進歩しても人間の力で自然をコントロールすることはできません。自然の脅威にただ無言で跪くしかありません。けれども人間の命はこの自然によって生かされています。拓一の生き方には、自然の力を信じて守り続けること、自然の脅威に果敢に立ち向かうこと、この星で生きてゆくことの根元を自分の身を呈して指し示してくれたように思われてなりません。

泥流地帯に登場する石村家族や共に生きる人々のひたむきさと強さは私の心の奥深くに刻まれたままです。日々の生活の中で心が弱ったとき、怒りや迷いが生じたときは二冊の泥流地帯を読み返して、この星で生きる力を取り戻したいと思います。ある名女優の言葉で「人間にとつての財産は感受性ではないか、よく使ってください」と語っていました。泥流地帯が映画化されたときには、それぞれの俳優が演ずる姿から、さらに深い何かを探りだし、より深い何かを感じてみたいと楽しみでなりません。

泥流散歩② 「日新分教場」

耕作や拓一、福子らが通った日進分教場は「日新尋常小学校」として実在しましたが、物語同様、泥流によって地形ごとその姿を失いました。



森閑とした沢の深部、学校跡に立つ木碑の前で耳をすませば、笑い声溢れるかつての賑わいが蘇ります。
【(正)「雪の道」の章】



福子は幸せをその手に掴めるか

落合 良子

福子は大事にしていた白い石を耕作にあげた。それは、耕作の中学受験が決まった時のことだ。幼なじみの耕作に、自分にはできない出世頭としての期待を込めていたからともとれるし、単に耕作のことが好きだったからかもしれない。後に福子は深雪楼に売られ、節子とその義母に助けられ関わりを持つていく。その中で、節子が強く思いを寄せている耕作を慕い続けることは、福子には憚られたのだと思う。

苦界に身を置く中、福子はいつしか拓一と気持ちを通じ合うようになる。弟の耕作をかばって骨折した拓一を見舞ううちに、小さい頃から自分をかばってくれていた拓一の包容力に気付いたからだろう。福子の気持ちは、深城金一との結婚を石村兄弟に相談した際にも揺れ動いていた。拓一に「しあわせになるなら嫁に行け」と言葉を掛けられた後、重ねて耕作に相談するシーンがあるからだ。「耕ちゃんが行くなど言ったら、行かなくてもいいのよ」なんて、好きな人が自分のことを引き留めてくれたら一生不幸なままでもいいという宣言だとは思えない。毎日続く苦しみの中、生きていることが救いなのかどうかもわからない福子

にとつて、泥流の中から自分を救い出してくれた耕作にすがりたいというのは、理解できないことではない。

それでも、福子の生き方はありだと思う。拓一という人間は立派すぎる。噴火の際泥流に流された家族を助けようとその中に飛び込み、できないかもしれない復興を目指し、耕作の身代わりになって骨折し、果ては変形治癒になつてしまう。普通の人間なら、弟が怪我せずに済んでよかったと思いつつ、心のどこかでは100%そうは思えないはずだ。そんな男性に好かれても、重たいのではないだろうか。私はあなたに好意を持ってもらえるような人間じゃない。福子の叫びが聞こえてきそうな気がする。聖人君子の拓一より、みんなの希望の星である耕作の方が思いを寄せやすかったのだと思う。では、なぜ福子は拓一を選ぶことができたのか。それはもしかしたら、拓一が大怪我をしたからかもしれない。

近年大規模災害が起これと、被害に遭つた方から「復興しない」と亡くなった人に申し訳ない」というような言葉を聞くことが多い。深山峠で耕作が語る、「懐かしきで一杯のものを持っていると、人間はそう簡単には墮落しない」という言葉にも共通している気がする。なるほど、だから頑張れるのかと納得する一方で、それを貫けるのは聖人君子だけだ、現実見てよと言つてしまいたくなる。でも、例えば戦後頑張つてこられたのも、亡くなった人たちへの申し訳なきが

原動力になったのだろうか、殊に日本人はそういう思いが強いのかもしれない。美しいけれど、正当化したくない、そんな思いの強さを拓一や塩狩峠の主人公は持つている。だからこそ、強いままの拓一では駄目だったのだ。福子が本当の意味で幸せになるためには、既に多くを失つた拓一ではあるが、誰かに支えてもらう側になるという変化が、拓一自身に必要なものではなだろうか。

結婚して苦界から逃れられれば幸せか、と考えると、相手に借金を負わせたと思つていうのは無理だろう。拓一の生き方や置かれた状況、その気持ちを理解し、支え合つて拓一と歩むことが福子にはできるはずだ。「百年後、二百年後の人たちも、この田んぼのおいしいお米を食べるんだもねえ」という言葉が、拓一をしっかりと支えている。その言葉を口にした福子なら、きっと自分なりの幸せを掴むことができると私は信じている。



「泥流地帯」を読んで

平野 京子

私の子供時代、今のJRが国鉄と呼ばれていた時代、国鉄の職員とその家族は、各路線に配置されているそれぞれの駅を中心に、国鉄よりあてがわれたそれぞれの住宅で、ごんまりと肩を寄せ合って生活していた。だから、国鉄職員の家族と他の住民とは、同じ呼び名の一地域内で、きちんと住み分けて暮らしていたことになる。

ある日、父と母は声落として会話していたことがある。その中に「上富良野」という言葉があり、「国鉄職員の一部が応援に行ってきたらしい。」ということがあった。この「上富良野」。国鉄職員の一部が応援……。という言葉以外、天真爛漫で無頓着だった頃の私は、父母の会話の内容については何も知らないで、その後の人生を送ってきたのである。

この度、この作品を読むきっかけを得、一読してみても、父母の会話は、きつと、このことだったのだという思いを強くした。70年ほど前のものである。その頃の日本は、敗戦後の生活の立て直しに懸命で、大人たちは皆、自分の本来の仕事の他に、朝、仕事に行く前も、帰宅してからも、ごく小規模な畑を作ったり、1、2頭の家畜を飼って育てていたりなどと、営々と働いていたように思える。ちよとした小さな空き地を見つけては、作物を育て、収穫できた喜び

を家族で分かち合い、喜びとしていたというような生活である。家族内の結びつきも、貧しい生活ではあったが、今の世よりずっとずっと強く、温かく、また、子供達は、親に駆り出されて畑仕事の手伝いをさせられたり、子供達だけで、連れ立って小さな川に魚釣りに行ったり、泳ぎに行ったりと、活気に満ち満ちた生活を送っていた。子供達は太陽の光や清流の水を全身に浴び、山野を駆け巡る、まさに、「太陽の子、自然の子」であった。

石村市三郎という人は、作品の中では、58歳。私達の親の世代と大体重なる。上富良野の日進地区で、農業を営み、風雪に耐え、田畑に人生の強靱な根を張り、人々の尊敬を集めていた立派な人物である。いわば大地から生まれ、大地に生きた「大地の人」であった。少々のことでは動じることのない、びくともしない「深い、信念のある」生き方、考え方をもち、その地域にとどまらず、多くの人々に多大な影響を与えていた人である。私は、この人物に心を強く奪われてしまい、この人物を中心にしての感想を書くことにした。

「山ブドウのこと」で、孫の耕作が、深城鎌治とトラブルになり、成り行きで彼の娘の顔に、かすり傷を負わせてしまうということが起きた。この時、深城は娘を連れて、石村家にまで押し掛けるといふ、緊迫した事態にまで発展してしまった。市三郎は事態を、深城との会話のやり取りの中から、よく把握したうえで、却って、深城に、「お前さんに、母

親の悪口を言われて傷ついた「わしら」の孫達の、心の傷は一生涯負い続けることになる重大なこと。」そして、「心の傷は人間には計り知れねえもんだ。」と、相手にも、納得出来るように諄々と言い聞かせて、その場を収めたのである。力量の大きさを思い知らされる一件であった。

また彼は、親から受け継いだ葉草に関する豊富な知識その他を駆使して、困って、頼ってきた人々を傷病から救助している。そして、代金は受け取ることなく、治癒できたことそのことを、自分への最大の報酬としていたのだった。特に戦後の窮乏時代、商店も少なかったであろう地域では、それは、人々には有り難い救いの手であり、崇高な行為であったと言えよう。

日頃から、彼は、「正しいことをするのに、人にどう思われようと、構わねえ。」と言っているし、「正しき者には苦難があると書いてあったぞ。」と、孫の耕作に、聖書の言葉を聞かせ、強い信念を持った生活を送っている。普段から、神仏を敬い、晴耕雨読の、清廉で思索に満ちた生活態度を窺わせられて快い。

だが、そんな彼も、耕作の進路については、結局どうすることもできなかった。耕作から「中学校への進学のこと、じつちゃんに聞いてみれ。」との担任の菊川先生の指導について、初めは「清水寺の舞台から跳び下りたつもりで……」と言って、市三郎は進学を許可したものの、耕作に必要な学費が、時期的にも、同じく、孫娘・富の、結婚にまで、そし

て、家全体にまで深刻な影響を与えることに困惑し、市三郎は「お前らの父親が生きていたらなあ。」と、思わず息子、義平のことを口走る。彼の懊悩ぶりが、読みとれる。また、耕作は耕作で、姉と元山鉱業事業所勤務の武井との気持ち、偶然に知ってしまった。彼は、自分から中学校進学への道を断ってしまった。

大政奉還とか明治維新とか、大騒動した割には、明治憲法下で、多くの農民は、大きな社会の仕組みの中では、相変わらず、喘ぎあえぎ毎日を送らざるを得ない、小作人なのである。毎年、収穫の半分を年貢として納めなければならない一小作人の力では、例え優秀な力を持っている子、孫でも中学校へ進学させることは殆ど叶わなかったのである。これは、一個人の力のせいなのではない。民衆の生活を顧みない政治を執る、国の姿勢の問題であろうと思うが、ここで、私は当時の政治について、憲法について、また、貴族院等に属する人々については、敢えて触れないこととしたい。今は、自分の力では、克服できないすべてを理解した市三郎は、孫・耕作の胸中を想いやり、如何ともできない自己の無力を悟り、懊悩し、耕作の肩を抱いて惟々、泣くばかりであったのだ。学力十分な、可愛い孫の夢を叶えることの出来ない無念さは察するに余りある。民衆を顧みない苛政は、正に「猛虎より猛々し」である。

しかし、耕作はどこか祖父に似ている「視学」からの、「人間の一番の勉強は困難を乗り越えること。」という教えを

思い出し、また、菊川先生の「勉強は義務だ。義務は正しい務めのことだ。人に役立つためにすることだ。」という教えを信じて、「中学校へ行けないことぐらい、ぐつと我慢しなければならぬ。」と考えるのだった。それでも「先生への夢」は諦められず、学校の講義ノートを取り寄せて学問を続けるという別の方法でその道へ歩むことを考えた。よぼよぼの老人になっても、子供たちに慕われ続ける教員に、なることを目指すのだった。これも、祖父・市三郎の、つねづね「成功者とは自分がなりたいと思つたものになれたら、それは、成功者だ。：誠心誠意、人のために生きるものになれたら、それは、成功者というものだ。どんな貧しい百姓でも：立派な成功者だ。」という言葉からも、強く感化を受けているといえよう。

市三郎の信念は以上述べて来たように、気高く、尊く、立派で偉大である。それでは、このように傑出した人物はどうして現れたのか。もちろん、一番に考えられるのは親から貰つた気質であり、育つた環境であつたろう。物心つく頃より、毎日、親の働く姿を見、親の口にする厳しい自然や生活、厳しい仕事上の教えを耳にして、同時に、それぞれの困難への対処の仕方を身に付けていたり、また、時としては子供には重すぎる手伝いをさせられたこともあつたろうと思われる。しかも、その一つ一つが自分達の「生活・人生・命」に直結しているのである。だから、彼を初め、特に家族は、

自然やその他の脅威に対し、身を寄せ合い、心を一つにして、団結して立ち向かわざるを得なかったのである。こうして、思いやり、支え合い、親孝行心や、姉弟思いという絆の強い家族、家庭が成立し、そのような環境の中で市三郎も生を受け育てられた人物と考えられる。決して楽ではない農業の仕事、その中で、毎日、愛馬を中心として、もがき苦しんでいる中から、繰り返し思索の中から、人生や仕事、また、世の中というものの深い洞察力というものが、自然に培われていったと考えられる。だから、自然に対しても敬虔であり謙虚であつた。

共に苦勞してきた「家の愛馬 青」の最期を見届けた市三郎は、片膝を付き、多分、節くれだつていたであろう両手を合わせて「長い間、ご苦勞であつた。」と、深々と頭を下げ、心からの哀悼の辞、弔意を表している。一家の「大黒柱」、家族、愛するもの「を失つた悲しみに、大粒の涙を、地面に黒々と落としている。：感動の一場面だ。

更に孫娘の富が武井家に嫁ぐとき、「勝手に帰つてきちゃならん。一生添い遂げにやならん。武井さん、ふつつかな娘ですが：と語尾を震わせながら、孫娘を送りだしている。自分の息子・義平の代役として、祖父の立場として、「いきびや麦めし、芋等が日常食の」一小作の言動にしては、比類のない立派さ、というほかはない。そして、このような立派な人物をバックに据えて、この作品は、孫4人、息子嫁の

佐枝、妻キワがそれぞれの思いで、生活・人生を紡いでいるのだ。

ところで、子供達は、菊川先生の結婚に際して、池を贈り物としていて、その作業が終わった後、皆で一緒に歌をうたった。富が嫁いでいった後にも同じように、子供達で歌をうたった。：私は一読者として、こうした場面面で歌われる子供達の歌を、是非聴きたかったと思う。どんなにか清らかで美しく、どんなにか心に響く歌声であつたろう。：そして、私には清らかなこれらの歌が全編を通して、バックミュージックのように静かに流れており、感動のうねりとなっているように感じてならない。

もちろん、この作品には、無自覚で、手の付けられない人物も登場する。曾山であり、深城であり、市三郎の息子の修平である。これらの人々の言動には、深い「内省」への欠如が認められる。我が子ばかりではなく、他人のことまでも平然と、その「基本的人権」を蹂躪したりしている。だからこそ、作品が盛り上がると分かりながらも、その勢いや調子に乗って、ここに取り上げ、更に詮索したりすることは、私には出来ない。

それにしても26年の、十勝岳大噴火に起因した山津波の凄まじさの様子は、ドキュメンタリータッチで力強く描写されていて、息詰まる思いで一氣に読み下してしまつた。：そして、耕作の見たものは、心で強く結ばれていた身内の、変

わり果てた姿であつた。遺体安置所には、祖父市三郎と、妹の良子の遺体が並べられ安置されていた。祖父は青い表情をしていた。良子は一度も母の顔を見ないまま、一生を終えた。耕作は思う。開墾30年、いなきびや麦めし、そして、芋を日常食としている現状に甘んじ、長年、粒々辛苦、愛馬と共に、共同の重労働生活を送り、貧しいながらも一応、安定感のある生活を築こうと努力をしていた者達への、これが、正当な報いと言えるのか。良子は、母に死に顔さえ見てもえなかつた。良子の髪を梳かしてやりながら、耕作は号泣した。：ここまでを読み続けながら、私は胸打たれながらも、浮世無常の、人生というものの過酷さ、奥深さを今さらながら考えさせられるとともに、突然、清らかで氣高い、子供達のコーラスの大団円が、耳低に幻聴として、リフレインで聞こえてくるように感じたのだ。：。

それにしても、家族全員の心の支えとなり、いつも先頭に立って元気に働いていた、氣高く強い、家族思いの生き方をしていた、「大地の人」「信念の人」祖父市三郎の最期は、「栄光」への「はなむけ」の飾り道もなく、あまりにもあつてなかつた。でも、反面、潔い最期、深い深い感動を伴った素晴らしい最期、人生であつたし、力を十分に発揮できた人生であつたと言いたい。「あなたは、開墾完遂後の肥沃な大地、豊饒な稔りを夢見て挑み、そして、道半ばにして無念を胸に、倒れ伏した父の遺志を受け継ぎ、懸命に努力し、

歩を前に、十分に確実に進められた、「大地の人」「立派な成功者」でありました。そのことは孫の拓一や耕作にも十分に引き継がれています。」と市三郎に伝えたい。そして同時に、「あなたは、栄光の美しい飾りに優しく包まれて旅立った、感動の最期でありました。」と私は、市三郎の耳元で強く強くそして確かに伝えたい。「拓一は、いつでもどこでも、命を懸けて、誠心誠意人のために尽くす、信念のある立派な若者に成長しましたし、耕作は、権太の「耕ちゃん」先生が分かっても分からなくても、することだけはするべ。」という言葉に目覚めさせられ、ひどく恥じいり、高い分別を持つ、人間にまで意識が高まり、随分、成長しましたよ……。」とも、強く強く確かに伝えたい。

確かに、悲しいし、むなしい結末である。だが、これは、それぞれを生きてるもの全てに負わされている宿命と、考えざるを得ないものであろう。「生」が含んでいる、根源的な矛盾と捉える人もいるかもしれない。

そしてまた、その悲しみや、苦しみ耐えて、生きて行くことのできるのは、そして、残された者同士、助け合って、この事態を乗り越え、前進していけるのは、やはり人間の「意思の力」「精神の力」だけであるし、そのことを覚っているのは、これもまた、ある意味では、悲しいことではあるが、ただひとり、人間だけといえるのではないだろうか。

終わり



全力で生きる美しさについて

(ペンネーム) 小川 波瑠

私の母は本を読み始めると、周りの音が全く聞こえなくなるほど集中するタイプで、私はその母の遺伝子を濃く受け継いだらしく、かなりな活字中毒です。

短大の夏休みなどは、朝から夕方まで、縁側の椅子に座り、当時は若い娘らしく、エミリーブロンテとか、曾野綾子さんの作品を読み耽ったものです。

この度、「泥流地帯」の、書名に惹かれました。読む前は、台風に依る洪水の話だとばかり思ってた居りましたが、噴火の泥流だとは意外でした。

大正末期の、十勝の開拓農家の生活の厳しさに驚くと同時に、何か懐かしさを感じました。そして、日本という国は、農業国なのだと思います。

街場で生活していると、そこで、生活が完結していると、錯覚しがちです。

蘆沓(わらぐつ)を作る場面など、一度挑戦してみたいと思うほど、臨場感溢れる描写にひき込まれました。

様々な困難に立ち向かい乍ら、愛と信頼と思いやりに満ち、大地にしっかりと根を下ろした生き様に、ただ、ただ、教

えられました。

特に印象に残った場面があります。

始業式の帰りに、市街に寄る耕作が、床屋の前を通った時、「中から戸を開けて男が一人出て来た。鏡に耕作たちの腰から下が写って、戸が閉められた。」このなにげない描写が、映画のワンシーンの様で、印象的でした。

もう一つ気に入った場面は、馬の蹄に蹄鉄を打つところ。子供の頃、旭川の社宅の近くに、動物病院が有って、リアルタイムで見た事があり、現実感を似て読みました。

母親の佐枝はついに一度も登場する事なく、想像を廻らすだけけれど、娘の良子が、美しく、優しく、聡明だと思っているのを追認し、きつとそうだと思つて読みました。こういう描写の仕方、作品に深味を与えていると思う。

最も感動したのは、耕作が、「真面目に、正直に生きた人間が、何故こんな目に遭うんだ。真面目に生きることが馬鹿臭い。」と言うと、「俺は又、同じ目に遭つても、やっぱり真面目に生きるぞ、生狡（なまずる）くは生きない。」と、拓一が言う所です。

心が洗われるような思いになりました。

作者の思いが、この一言に、込められていると思いました。今はこんな気恥ずかしいほど泥くさくて、正直な生き方をする人間は居ないのではないかと思つたのですが、他人の気持を忖度し、損得を考え乍ら生きる事も面白いかも知

れないけれどやはり、人間の基本はこれだと、思います。人間の魂は、そういう生き方を望んでいると、思います。

十勝岳の噴火の悲劇を全く知らなかったのですが、自然災害の恐しき、その迫力溢れる筆力に圧倒されました。

そして、大自然の前で、人間はなんと無力な存在かと思えます。

今私は、早朝の掃除のパートをして居ります。両親を看取り、十年がたちました。

その間、思わぬアクシデントや紆余曲折があったと、自分では思つて居りましたが、大仰に思う事ではなく、これは試練なのだと、この作品を読んで思いました。

この作品との出逢いは大きい事でした。

拓一が、「な、耕作、母ちゃんば大事にするべな。」に、思わず涙しました。

これは、続編を読まねばならないと、思つて居ります。

最後に、人間には、二種類しかない。親切な人間と、不親切な人間。何かしてやりたい人間と、何かして貰いたい人間。

願わくば、親切な、何かしてやりたい人間の範疇に入りたいものだと思います。



「三浦小説に生き方学ぶ」

木下 昭夫

転勤で道内をあちこち赴任して歩いた。

根室では1973年6月、根室沖地震を体験した。花咲港に係留されていた漁船が、押し寄せた津波で次々と転覆し恐ろしさを実感。

日高門別では2004年8月、台風15号が上陸し河川が氾濫、5名が濁流で流され死亡した。農・林業など多大な被害が出た。

富良野では、2006年上富良野で十勝岳噴火の避難訓練に参加した。十勝岳は1926年(大正15年)5月の噴火で泥流を発生させ、美瑛、上富良野で多くの死傷者を出した。事前に防災施設を確認するため、望岳台から十勝岳の間を視察した。噴火した時の泥流の砂防ダムや防災センターなどが整備され対策が講じられていた。

十勝岳噴火を取り上げた本を探してみたら、三浦綾子さんの「泥流地帯」と出合った。明治に開拓で福島から入植し、懸命に生きていく石村一家の物語だった。

小作として麦飯を食べる極貧の中でも、人として誇りを持って農業に取り組み生きて来た。入植して約30年、なんとか希望の光が一家の目の前に見えてきたときだった。そん

な石村一家を一瞬の不幸が襲い掛かった。

十勝岳が噴火して、主人公石村耕作の祖父、姉、妹が泥流にのまれて死亡した。泥流に襲われてから祖父母らを探す悲惨さ、肉親を失う悲しさはなんども涙に字がかすみ読めなかった。

生き残った耕作が、兄拓一に「真面目に生きていても馬鹿臭いようなもんだな」と嘆いて言う。だが、拓一は「おれはな耕作、馬鹿臭かったとは思わんぞ」「生まれ変わったら遊んで暮らそうとか、生ま狭く暮らそうなどとは思わんべな」と応える生きざま。

間もなく定年を迎えるときだった。仕事は世のため、人のために第一に取り組んできた。拓一の生き方に共感し感銘した。

人はどう生きるべきかを教えてくれた一冊だった。



『泥流地帯』 山合の秋 第一節を読んで

(ペンネーム) 一番センター田谷仙太

「外は闇だった」

昭和五十一年、そんな書き出しで始まった日曜版の新聞連載小説。四十五年もの歳月を経た今なお読む人の心をつかんで離さない三浦綾子さんの代表作にして壮大なヒューマンドラマ『泥流地帯』。

私自身、生涯の愛読書と聞かれれば逡巡なく掲げる唯一無二のこの作品。語り始めると本当にキリがないので、冒頭の章「山合の秋」第一節のみに限定して思いを綴らせていただきます。

ちなみにこの作品を執筆するにあたり、綾子さんは何度も上富良野町に足を運び、日進の沢のモデルである日新地区や十勝岳を見てまわり、当時健在であった被災者やその家族から丁寧な聞き取りを行っているそうです。

連載開始を目前にした町民の期待感は何ばかりか。もともと圧倒的であった北海道新聞のシェアをさらに押し上げたかもしれないね。

と、そんなことを思い浮かべながら、そして当時の新聞

誌面を、活字や挿し絵を想像しながら、気鋭の作家三浦綾子さんの新聞連載の初回到胸を躍らせる日曜日の朝のつもりで冒頭の章を読み直してみました。

初読のころからこの作品の中で特に惹かれる単語が「星光(ほしかげ)」です。星影ではなく、星光。

いずれも星の光、という意味で同義なのですが、「星光ひとつ見えない」から「墨をぬったような(闇)」と続くことで「星影ひとつ」よりさらに暗く、舞台である日進の沢の、現代の人里ではなかなかお目にかかれない圧倒的な暗さが眼前に広がっているような感覚に包まれます。

正統『泥流地帯』を読み終えた後、ぜひこの場面を思い浮かべてほしいのです。冒頭のこの場面が暗ければ暗いほど、光に満ち溢れたラストシーンがより眩く尊いものに感じられるはずです。

そして続けざまに登場する「ねっとり」と手に絡みつきのうな闇」。一瞬にして読者を日進の沢にいざない、ほのかに暗闇への恐怖さえ感じさせてしまう魔法のような一文です。当時の、四十五年前の読者にとってはかたて感じた懐かしい情景だったのかもしれませんが、いずれにしても開始からたった数行で読者は大正中期の北海道、真つ暗闇が広がる秋の寒村へと引き込まれたことでしょう。

続けて、闇を恐れる拓一少年の姿が描かれます。ケンカも恋も復興も常に一直線、怖いもの知らずの最強番長が闇闇におびえ、小用をたすのも一苦労するなんとも意外なお姿。

とてもさり気なく描かれていますが、この描写は私が正統『泥流地帯』を読み解くうえで大きな力ギとなりました。それは拓一が、父の死をきっかけに漠然と闇を、死を恐れ、そしていつの間にか克服し(あるいは忘れ去り)成長するという、まるで自分たちと同じような、普通の人と変わらない少年期を送っていること。これは後に鋼の信念で未曾有の泥流災害からの復興をけん引する拓一が実は超人でも聖人でもなく、普通の人であるということを示していると思うのです。

青年期の拓一の行動も一つ一つは「普通」のことであり、彼を超人たらしめるのは環境、状況に全く左右されずその「普通」を「貫き通す力」の一点に尽きることに気付かされるわけですが、そこに触れると文量が倍になりますので泣く泣く割愛。

いずれにしても拓一が凄い人であることは疑う余地もありませんが、あくまでも「普通の人」であるということはこの作品にとっても重要なことだと思うのです。

本作そのものがスーパーマンによる奇跡の復興ファンタジーなどではなく、拓一ら「たまたま災害に居合わせた普通人」の信念がいかに強く尊いものであるか、何がそうさせたのか、そして私たちがスーパーマンの登場を待ちわびて過ごさずとも、いつでも身近に拓一のような存在があり必ず巡り合える(気づける)、或いは私たち自身が拓一のように誰かを支え導く存在になれるということが示されているような気がします。

「拓一がきつと近くにいて、自分が拓一になれる」

物語の冒頭で示唆されるこのことは、読者の人生をずいぶん前向きにさせる重要な描写なのではないでしょうか。

さて、家族の団らんから始まったこの場面。札幌へ髪結い修行に出ている母のことに話題が移ります。ここでは「いつ迎えに来るのかな(拓一)」「札幌一の髪結いになって、お前らを迎えに来る(市三郎)」と、一貫して「迎えにくる」と言っており「帰ってくる」ではないことにとっても興味を引かれます。

もしも一人前の髪結いとして母・佐枝が早い段階で帰ってきていたとしたら、子供たちを迎えにきて市街地やほかの町へ移り住んでいたでしょう。日進の沢では商売にならないでしょうし。

そうするとこの時点では拓一や耕作が農業者として市三郎の跡を継ぐ想定はなかったように思えます。それなら「帰ってくる」となるでしょうから。

石村家としては、小作とはいえ嫡男が早世しているわけですから、市三郎とキワの引退前に孫たちが農業者として仕上がる見込みがなければ、次男である修平が小作権を接収するなり、カジカの沢より条件の良い石村本家に移り住む可能性などもあったのでしょうね。佐枝の修行も含めて相当複雑な家族会議を繰り返したんだろうなあ、と想像するとさらにもう一步、物語の世界に深く浸っていける気がします。

そんな(母が迎えに来る)会話をしながら、祖母のキワはストープでそばがきを作っています。出来上がった頃合いに、拓一が妹の良子の皿を差し出しますが、キワは「まず、じつちやまからな」と市三郎の皿にとりわけ、次いで良子の皿に取り分けます。

この場面では拓一が真つ先に妹の皿を差し出す優しさがとても印象的ですし、これに限らず物語全体を見渡すと石村家では他の家と比べて女性の立場が尊重されていることもうかがえます。もちろん現代との単純比較はできませんが。

しかしそれよりも戸主である市三郎の存在を実に自然

に尊重するキワの行動が光ります。

単に年高や性別で判断しているわけではなく、長男である拓一よりも拓一が妹へ向ける優しさが尊重され、さらにそれよりも開拓期を生き抜くために必要不可欠な権威、つまり世帯員全員の命を預かる最高責任者が持つべき威厳を決して損なわせないところにも石村家らしさが垣間見えます。

確かに、家督を譲りセミ隠居していたはずの市三郎が息子義平の死により再びその立場に復帰した以上、単なる孫煩惱の優しいじつちゃんでは困るわけですから。

さて、熱いそばがきを食べながら耕作少年が思いを巡らすのは二年前、母との別れとなった日のことです。

「米の飯食わせてくれつとよ」と、カジカの沢に住む叔父の修平宅へ四人の子供が遊びにでかけます。しかしこの、子供を出かけさせる口実も味わい深いものがあります。「米の飯」。

物語中、幾度となく白米様の尊い立ち位置が描かれます。憧れ、豊かさ、贅沢、時には背徳や差別の象徴として。

とにかく子供たちにまだ雪の融けきっていない片道二キロの道のりを歩ませ、大はしゃぎさせるモノ、と考えると率直に感心します。現代の子供たちに同じことをさせようと思ったら、なかなかの工夫と労力と出費を覚悟する必要があります。

ありそうです。

いずれにしても結果的に子供たちを騙す材料に他なりませんので、減多に食べさせることのできない米の飯を腹いっぱい食べさせることが石村家の大人たちの精一杯の償いだったのでしょうか。食材であり、贖罪であり(上手いこと言ったと思います)。

とはいえ、そもそもそんな手の込んだことをしなくても……と思いましたが、札幌へ赴き、いつ戻れるかわからない母が六年生、四年生、一年生、そして四歳の子供たちを幾日かけようと諭すことなどできないでしょうし、ましてや急に「じゃ行つてきませう」なんて旅立つのは絶対に不可能でしょうから、仕方ないですね。

そして修平の妻ソメノの「家さ帰ったら、びつくりする」とが待つてるよ「あんたらの母さん、もう家におらんわ。遠くさ行つて、もう帰らんわ」という言葉。初めて読んだときは、ちよつとキツすぎじゃないかと、デリカシーに欠ける叔母さんというイメージを持つてしまいました。がよくよく考えるとこれは意外とフラインプレーというか、家に帰りつくまでの半里(約二キロメートル)の道のりを走らせることで子供たちに覚悟させていますよね。楽しく歌いながら帰ったら母さんいなかった、の方がダメージは遥かに大きいような気がします。

さてこの当時、長女の富は小学六年。石村家女性陣の中でも、天真爛漫に喜怒哀楽を表に出す末っ子の良子と違い、富の感情(内面)が描かれることはありません。この場面でも同様なのですが、四歳の良子を背負ったまま、足の速い拓一に「少し」遅れて走ったとありますので、あの大人しい富が「すつこい勢いで」走っていることがわかります。非常に数少ない感情描写のひとつといえるかもしれません。

それはさておき、走っている間に考えを巡らせ、理解し、家に帰っても居るはずがないと覚悟した母親の姿。ひと足先に帰りつき、狂ったように家中を探す拓一を、あとから追いついた富はどんな気持ちで見たのでしょうか。

富の目からは、大黒柱である父・義平の死に続き、振り所である母親の気配が消えた我が家は、幼い拓一や耕作が感じたよりもさらに空虚なものであったのかもしれない。

のちに佐枝や福子に負けず劣らずのいばら道を歩むこととなる長女・富。その試練は「石村家の長女」からキワに次ぐ「石村家の母代わり」と環境が激変したこの瞬間から始まったのかもしれない。

なおこのときの佐枝、数え三十三歳。余談ですが新垣結衣さんと同じ年(令和二年現在／嗜好による例示)です。こ

の若さで四人の子をもうけ、夫に先立たれ、子供を預けて髪結い修行の旅に出る……。連載第一回で十分ハードな人生が描かれています。この後も札幌へ出る理由が明かされつつ、肋膜炎を患ったり泥流災害で家族を失ったりと、試練のバリエーションでいうと三浦文学屈指の苦勞人といっても過言ではありませんよね。

とは言いつつもここまで描かれているのは素朴な北海道の片田舎の、ハードではあるものの「開拓農家あるある」的な日常でしたが、最後の最後に突然香ばしい一文が放り込まれます。

「もう一つの（札幌に出た）理由を、市三郎はまだ誰にも語っていない。」

おそらく同時期に女性誌で連載していた『果て遠き丘』のドロドロ具合を知っている読者はちよつと身構えたような気がします。あ、ヤバイぞ、綾子さん新聞の日曜版で何しようとしてんだろ、と。

なおここまで本文中に上富良野という地名は出ていません（ちなみにこの章第六節が初出となります）、北海道の新聞とはいえ「十勝連峰」という言葉だけではこの、どんな話なんだろうかピンと来ていない人も多かったでしょうね。大正時代かつ『泥流地帯』というタイトルではありません

が、大正十五年の泥流災害についてはこの時点で半世紀近く経過しているわけですから、ご当地上富良野町でも災禍の記憶の風化が懸念されているような状況だったそうです。

これほどに重く難しいテーマでありながら、長い連載の第一回目の前段で、読者を大正六年の十勝連峰の麓、開拓農家の慎ましい暮らしの中に放り込みつつ、読者の想像を掻き立て読み終えた瞬間に来週の日曜版を意識させるサスペンスぶつ込み。実に見事な演出であったと思います。すごいです。

さて、この時点で物語本文の文字数を大幅に超えてしまいましたが、冒頭で申し上げましたとおり本当にキリがない（これでも色々割愛しております）ほどに読めば読むほど背景が広がるというか、作者の描いた世界に深く入り込んでいける三浦文学。

その中でも特にこの正統『泥流地帯』は読むたびに新たな発見があり気づきがあり感動があり、生涯の愛読書とするに相応しい名著だと思います。

発刊から四十年以上、さらにこの先も多くの人に読み継がれ、拓一たちが見据えた百年、二百年先を生きる人々にも感動が繋がれていくことを切に望みます。



故三浦綾子氏が「泥流地帯」続泥流地帯」

に込めたメッセージ考察

田中 弘美

はじめに

五月二十九日金曜日。私は朝刊の囲み記事に目を留めた。「泥流地帯」作文募集である。珍しいことに対象は大人を含むという。

故三浦綾子氏(以下、「著者」と記す)の小説は高校時代に概ね読んだ。きっかけは国語教師から出された課題「読書ノート」を書くためである。旭川の高校だったこともあり、図書館には三浦文学が揃っていた。どの小説から手に取ったかは定かではないが、一冊読み終えた時には他の作品を読みたいという気持ちに駆られた。課題のための受動的な読書から、三浦文学に惹かれ能動的な読書に変わった。時間を忘れて何時間も没頭して、時には夜更けまで読書していたことが今では懐かしく思い出される。「泥流地帯」、「続泥流地帯」は無論読んでいた。しかし、それ以来手に取ったことはなかった。この新聞記事が目にとまらなければ、日々の忙しさに流されて読み返すことはなかったかもしれない。再び三浦文学に触れる機会を与えてくれたこの企画

に感謝したい。久しぶりに手にしたこの二冊は、実質数日間で読み終えた。高校時代に感受したこと、時を経て人生経験を積み、今現在の自分が作品に共鳴するものの違いに気づかされた。一つの作品を通して自分自身の変容を感じられるというのは貴重な経験である。

そこで、コンクールを契機に今の自分の感性に耳を澄まし、考えや思いをまとめることとした。高校時代は物語の世界そのものを感じるに留まっていたが、今回はそれ以上に、著者の思いを客観的に感じ、考える部分も大きかった。そこで、テーマを表記のように掲げ、著者が「泥流地帯」「続泥流地帯」に込めたメッセージを考察し、著者が遺した深い思いに近づいてみたい。

本作品は、一般的に誠実に生きる者とするのではない者という人間像の対比により、人生の報いとは何かという点が焦点化されやすいように思われる。しかし、著者はそれだけでなく様々な視点を盛り込み、登場人物に語らせ、問いかけているメッセージが多岐に及んでいるように思われる。以下、項目ごとに考察してみた。

一 北海道開拓の歴史

一 一 先人への畏敬の念

貧しい中、忍耐強く誠実に逞しく開拓してきた耕作の祖父、市三郎と祖母、キワ。著者は彼らの存在を物語の中心に寄せながら、北海道開拓に従事してきた人々を鮮やかに映し出している。開拓時代から助け合いの中で生きてきた人々。そのありようは、市三郎が薬草や野菜から薬を作っては無医村の村人の生活を守ってきた姿から伺える。他にも農作業の繁忙期にはお互いに助け合う『お互い様』の精神。当時の暮らしぶりや苦勞は、例えば厳冬を生き抜くため掘りごたつや灰を使い、肩を寄せ合って夜を過ごす知恵と工夫からも伝わってくる。登場人物の当時の生活全般を通してリアルな想像を読者に与えながら、先人たちの苦勞を伝え残したいという筆者の意思が伝わってくるのである。巻末の参考文献等から、筆者が十勝岳噴火に関する資料閲覧、関係者へのインタビュー等を行い徹底した取材をしたことが垣間見られ、丁寧な時代考証が物語をよりリアルにしている。これらの一つ一つを通して北海道で生まれた筆者の、この大地への深い愛情と先人への畏敬の念が感じられるのである。

一 二 記録としての側面

本作はなぜここまで徹底した取材の上に創作されたのだろうか。それは、著者がこうした歴史的事実を後世に残す一助になりたいという、小説家としての使命感のようなも

のがあったのではないだろうか。二年前、北海道は命名百五十年という節目を迎えた。そう考えると改めて、北海道開拓の歴史を克明に映し出した貴重な作品の一つといえるだろう。

この作品は特に続編において、拓一の十勝岳噴火後の姿が焦点になっている。噴火によって火山灰や木が押し寄せた絶望的な田畑。そこに対し復旧と開拓者への思いを抱きながら、真摯に向き合う姿が描かれている。非常に過酷な状況下でも諦めずに日々復旧作業を行う拓一。最後は苦勞の末、奇跡のような復興を遂げる。このことは小説という架空のことではなく、現実にも拓一のような人々がいたからこそ今の北海道がある。現在の上富良野の実り豊かな土地は、荒地からの復興が事実であったことを証明している。これらを鑑みると、小説でありながら記録として残し、伝えたいという筆者の強い意思が伝わってくる。

二 教育者としての視点

二 一 元教師としての経験からくる視点

→ 生活世界から子どもを理解する

かつて著者が主人公の耕作と同じ代用教員として、教壇に立っていた経験があるからこそ書ける点も注目したい。

特に「綴り方」の中から、子どもの生活世界から子どもを理解しようとする教師のありようは、現在も非常に重要な変化的テーマでもある。

「桜吹雪」という章の中で、教師になった耕作は綴り方の授業をする場面がある。子どもたちの綴り方を通して、学校の生活だけではなく家庭環境を含め、その子どもの生活世界全般から複合的に理解しようとする。特にそれは、受け持ちの板森五郎の詩「まんま」を読むシーンに顕著に表れている。耕作が短い詩の中から五郎の家庭の様子を想像し思いを馳せ、より深く理解してく場面である。この詩の耕作のコメントが、後に五郎との結びつきを固くしていくという大事な場面でもある。これは現代においても非常に重要な視点であり、著者は確かな目を持って子どもを理解しようとしていたことが伺える。時代を超える確かな見方は、著者自身が真の教育者であったことの証といえよう。

二二 登場人物を通してみえる著者の理想と信念

優秀な耕作は進学を望むものの、家族のために夢を諦めて進路を変更する。しかし、その運命の中でも懸命に生きていく。こうした耕作のセリフには、著者の信念や思いが見え隠れしているように思われる言葉がある。「師範出の先生より、いい先生になる自信ある」「(略)よばよばのじいさんになるまで、生徒を受け持っていたいな。生徒を教えて

こそ先生だべ。(略)これらのセリフは、著者の教師としての信念だったのかもしれない。他にも、研究授業の視察に訪れていた視学が、授業で活躍した耕作に語る次の言葉も印象深い。「人間の一番の勉強は、困難を乗り越えることだ。」これは筆者の闘病生活や人生経験によるものであろう。大事な局面では、回想シーン等でこの言葉が再び登場する。兄の拓一は幼馴染の福子を青年になっても一途に想い続け、置屋へ売られても差別や偏見の目をもたない。置屋経営の父をもつ節子は、父のような親をもつ娘として生まれたことを悔やんでいる。しかし、そうした境遇にも屈せず自分をしっかり持ち率直に意見する。執筆当時の時代背景の女性としては先進的な女性像として描いている。

これらの登場人物に、著者の信念や理想というものが見え隠れしているように感じられるのである。それは、やはり原点にあるのは教育者としての三浦綾子という側面なのである。

三 女性が一人の人間として生きていくということ

～人権問題と女性の自立～

本作品の中で、主要登場人物である福子は、父親である巻造の作った借金の肩代わりに置屋に売られていく。そも

そも置屋が物語中に強い印象を与えるよう創られているのはなぜか。推察されるのは、著者が福子を通して人権問題を読者に問いかけているのではないかということである。かつて日本では貧しい農家の娘たちが人身売買されていた。自分の意志とはかけ離れたところで人生が決まり、自由もなくモノのように扱われていた女性たちが実際に多く存在していたという事実。女性の権利、自由、男女平等を考える際の原点というべき部分を扱い、読者に一考を投じているように思えるのである。

さらに、女性の自立という点では節子という存在が象徴的である。節子が生きる本作品の時代、女性の自立や社会参画とは程遠く、かなり先進的な生き方を書く女性像として映る。節子は非道な生き方をする父の娘に生まれた宿命を背負いながらも、行動力をもって別の生き方を強く強く歩んでいく。自分の意思を貫き、家を出て旭川の医院に住み込みながら自活する。その中で「看護婦」という手に職を持つことを目指していく。「続泥流地帯」の後半では、福子が置屋から自由になるという点において、女性の運動家が登場し女性の自立、人権という問題を節子が意識していくように描いている。その節子が、福子の人権を取り戻し、自己決定できる人生へと導き、物語のクライマックスに脱出劇を見事に描き切っている。基本的人権という大事なテーマを物語の根底に据えながら、物語の最後に読者へ印象づ

けていることそのものが、著者の強いメッセージと受け取れる。

四 読者を引きつける表現と構成

登場人物それぞれの人生をみた時、物語全般を通して、時代は変わっても人間の本質は不変であるという著者の信念のようなものが感じられる。「生きる」とはどういうことか、その意味を問うているように思われるのである。人間の多様な側面を登場人物によって鮮明に描き出しながら、人間の根幹にかかわる永遠のテーマ性を備えていることがこの作品の偉大さであろう。

さらに、登場人物の心情描写が実に豊かでみずみずしく、心の動きを非常に繊細に丁寧に描いているという点は作品に深みを与えるものである。同時に、今なお決して色あせることのない豊かな北海道の自然の情景表現も忘れてはならない。著者の独特の感性から生まれる表現は豊かであり、文字からぬくもり、木々や風の音、寒さ、風景などが三次元で感じられる。北海道の豊かで厳しく美しい雄大な自然が繊細に伝わってくる。それも、この小説が読者を引きつける要因であろう。

最後に物語の進行が読み手に次へと行かせる巧みな構成になっていることも取り上げたい。物語の気になる部分で

次の章へ引き継がせるわけだが、次章はすぐに前章の続きから始まらない。ストーリーの時間差を挟んだ巧みな構成別の情景から穏やかに始まり、さりげなく物語の中に前章の続きがちりばめられている。こうした巧みな構成力も作家としての技量といえよう。

終わりに

以上、著者故三浦綾子氏の「泥流地帯」、「続泥流地帯」について考察をしてきた通り、様々な視点が盛り込まれたものであり、時代を超えても読み継がれるべき価値のある作品である。こうした作品が映画になるという構想があるのは本当に嬉しいことである。映画化されることにより幅広い年代が作品に触れ、考える機会になるだろう。北海道民はもちろんのこと、日本中の人々、さらにグローバルにも魅了するような素晴らしい映画を期待したい。



果て遠き泥流地帯

(ペンネーム) 神楽岡 マイ

香也子は常盤公園から旭橋に向かった。先ほどまでうるさかった消防車や救急車のサイレンは聞こえない。

「私は何をしているんだろう」

誰からも相手にされないのは自分が悪かったのか、いいえ、私は自分に正直に生きてきただけ。その何が悪いんだろう。

ついさっき「女の人が倒れている」と虚偽の通報をした旭橋まで来た時、「ここで私が倒れていれば、少なくともウソにはならないわね」と香也子と思った。

「兄ちゃん、あそこにいる女の人、何かあったんだろうか？」

「ああ、何か事情があったようだな。耕作、いつものアレ、持っているか？」

「持っているとも。ちょっと、声かけてくるわ」

「アレ」を持った男が香也子の背後から声をかけた。

「お姉さん、何かあったかな？」

不意を突かれた香也子は驚き、その声のするほうに顔を向けると、教師風の男がそこにいた。

「あ…、あなた、誰？」

「いや、怪しい者ではないよ。なんか寂しそうにしていたから、どうしたかなって思ってた」

「ナンパならお断りよ」

「いやいや、そうじゃなくて…」

「あ、わかったーちろろのパンケーキで私を釣って、そのまま深雪楼に売り飛ばすつもりね。馬鹿にしないで頂戴！」

「いやあ、まいったな…」

教師風の男がたじろいしていると、足が少し不自由そうな連れの男が追いついた。よく見ると顔立ちが似ているようで、二人は兄弟なのではないかと香也子は感じた。二人ともまあまあイケメンなので、香也子は会話をつづけることにした。

後からやってきた足の悪い男が口を開いた。

「お姉さん、名前はなんていうんだい？」

「人の名前を聞くなら、自分たちから名乗るのが礼儀なんじゃないかしら？」

「確かに、それもそうだ。俺の名前は開拓の『拓』に数字の『一』と書いて拓一だ。最近、巨人からロッテに移籍した投手の澤村拓一と同じ名前なんだけど、あちらは『ひろかず』と読むから気をつけてほしい。」

「（巨人？ ロッテ？）…」香也子は何のことを言っているのか理解できなかった。

次に弟のような男が話し出した。

「俺は『耕す』と書いて『こうきく』と読むんだ。もっぱら、野良仕事は兄ちゃんに任せているんだけど、学校で生徒の心を耕して、正しい心を作っているのさ」

「あなた、まさかいま『俺、ちよつとイイこと言えちやいました』なんて思っていないでしょうね！ ふんっ！ 私の名前は香也子。『かなりな子』と書いて香也子よ。覚えておくといいわ」

「別にナンパをしているわけではなく、この本を読んでもらいたくて声をかけたんだ」

耕作は一冊の本を香也子に手渡した。

「泥流…地帯…？」

「まあ、気が向いたら読んでみてよ。じゃあ僕らはこれで本を渡されてきよんとしている香也子をそのままにして、二人の男は去っていった。」

「兄ちゃん、あの人、かなりの美人だったな」

「うむ、でも福子ほどではないな」

「兄ちゃん、いつからそういうキヤラになったんだ？」

香也子は渡された本をじっと見つめていた。

「泥流地帯」…、まさにいまの私の心は泥流。きつと何かつながりがあるに違いない。パラパラとページをめくってみると、上富良野や旭川の文字が入ってきた。

「あら？ これは地元の話なのかしら」

香也子は急に親しみを感じ、最初から読みはじめた。外は闇だった。

読み終えた。香也子は涙を流していた。何に対して流れた涙なのかはわからない。真面目に生きてきただけなのに、このような結末を迎えていいものだろうか？おかしい、なにかがおかしい。

「私も正直に生きてきただけなのに、どうして周りの皆は私の相手をしてくれないのだろう」と、小説と自分を無理やり重ねてみたが、やっぱりそれは無理だった。

それにつけても、なんとという結末。機動戦士Ζガンダム第50話で、カミーユが宿敵シロッコを打ち破ったのち精神崩壊を起こし、「大きな星が点いたり、消えたりしている…」と口にしたとき以上の衝撃を受けた。

しかも、「もう一度生まれ変わったとしても、おれはやっぱり真面目にいきるつもりだぞ」「生まれ変わったら、遊んで暮らすとか、生まれて暮らすとは思わんべな」などと言っている。香也子には驚きとともに、とても新鮮な感覚が脳裏に焼きついた。

「山が！山が押し寄せてくる！パパー早くハイヤーを呼んで頂戴！」

本の印象がよほど強かったのか、その晩、香也子は夢の中で泥流にうなされていた。夢だったことに安心した香也子

だった。が、このお話はこの結末でおしまいなのかがとても気になりはじめた。もう一度本を手にとり結末を確認したあと、そのまま奥付に目をやると、鉛筆で書いてあるメモを見つけた。

「あら？何かしら？このメモ」

メモにはこう書いてあった。

「続きが気になるのであれば、旭川駅南口から氷点橋を渡り、そのまま突きあたりまで歩いたところに六角屋根の白い建物がある。その建物の左手奥で、運が良ければ一人の女性と出会える。そこであなたの探し物が見つかるであろう。耕作アンド拓一より」

「耕作、拓一？そういうえば旭橋で出会った二人もそんな名前前で、この本に出てくる主人公兄弟も同じ名前。偶然かしら？ふしぎ発見」

ミステリーハンターとなった香也子はすぐさまハイヤーを呼び、「六角屋根の白い建物」に向かった。

目的の場所に着いてはみたが、確か「運が良ければ」という条件がついていた。しかし、女性の姿が視界に入った時、かすかな心配は杞憂に終わり、「マッドアングラー隊に回されて、早々に木馬に出会えるか。私は運がいい…」という機動戦士ガンダム第26話のシヤアのセリフを思い出した。

香也子は早速女性に話しかけた。

「こんにちは。この泥流地帯の続きが気になってわざわざ

訪問したの。さつきと続きを教えて頂戴」

女性は一ツの紙袋を香也子の前に差し出した。

「あなたが求めているのは、この二つの紙袋のどちらかに入っているわ。軽いほうの紙袋か、思いほうの紙袋か。どちらにする？」

以前の香也子なら間違いなく「高価な方」を選んだであろう。しかし、今の香也子は違う。

「運試しね。それじゃ、謙虚にこの軽いほうを選ぶわ！」

「香也子さん、正解よ。この軽いほうには『続泥流地帯』が入っているわ。ちなみに重いほうには、三浦綾子記念文学館が全力を挙げてコピーした複製版『果て遠き丘』4巻セツトが入っていたの。せつかくだから、これもお持ちなさい」

「あら！ いいの？ ありがとう。あなた、名前は？」

「私の名は陽子。結構大変な人生を送ってきたのよ」

「あなたの人生には構ってられないの。ごめんなさいね、それじゃ、また」

「待って！ 香也子さん！」

「何かしら？」

「税込み五千六百六十五円よ」

「……カードは使えるかしら？」

「キャッシュレス決済OKよ！」

香也子は手に入れた「続泥流地帯」を一気読みした。香也子は涙を流していた。何に対して流れた涙なのかわからな

い。何もかも流されても、そこから立ち上がる勇氣、気持ちの強さはどこからきたのだろう。真面目に生きることが、正しく評価される社会になればいいのと思った。未来をみつめて生きなくてはならないと思った。

ラストシーンは山田洋次監督の名作「幸せの黄色いハンカチ」を思い出した。男の中の男、高倉健さん。健さんのように生きたいと香也子は思った。

そうだ、私も自立して生きていこう。いつまでもパパに頼ってられない。取り急ぎ、あの六角屋根の白い建物で売りのバイトをしよう。陽子っていったつけ？ あの子もなかなかかわいいから、私と二人で売り子をすれば評判もあがるんじゃないかしら。いや、あがる。きつとあがるはず。

この大きなビジネスチャンス逃さない手はないと、香也子は足取りも軽く、六角屋根の白い建物に向かって行った。ハイヤーで。

— 完 —



誇りを持って努力を

久保 杏耶音

「努力は必ず報われる」私はこの言葉が大好きである。私が受験生だった時、たくさん聞く機会があった。正直に言う、当時、努力しても無駄なことだと思っていたし、まうこともあった。そう思いたかったのかもしれない。しかし、私の母は、無駄なことなんて一つもない、絶対、何かに活きると気づく時が来ると私に言ってくれた。この言葉から私は「努力は必ず報われる」と信じたいと思った。また、私の恩師は、この言葉に、「それが正しい努力なら」といつも注釈のように言っていた。私は、正しい努力かは分からなくても報われると信じて努力することが、私の生きがいになると思うようになった。

今回、『泥流地帯』『続泥流地帯』を読んで、再度この言葉を考えるきっかけになった。努力と報いの関係。これは、簡単に答えの出せるものではない。私は、報われると信じて努力したいという考えを持ち、この考えは、拓一の考え方に近いのかもしれないと思った。

「おれはな耕作、あのまま泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生れ変わったとしても、おれはやっぱりにまじめに生きるつもりだぞ」

この言葉は、私を非常に迷わせた。拓一は明らかに報われていなくても努力したいと思うことだ。私は報われると思うからこそ、努力していたと思っていたのに、これは努力と呼べるのだろうか。報われなければ生きる価値は本当にないのだろうか。この非常に難しい問いに答えを出すことは、今の私にとって困難である。なぜなら拓一や耕作のように、家族を失い、どんなに頑張っても報われない日々が続く、こんなに辛く苦しい生活を私は経験したことがないからだ。耕作は、拓一のようにまじめに生きることが馬鹿らしく思えてしまう。努力を生きがいにしたいと思つたはずの私も、迷い絶望してしまった。

拓一と耕作、同じように生活をともしにしていた二人は泥流を機に真逆とも言える考え方になってしまった。私自身は、拓一のように努力を惜しまない人間でありたいと思う一方、耕作の考える馬鹿臭いという言葉に共感してしまう自分もいた。拓一と耕作、この二人の両極とも言える考えは、一人の人間の内部に眠り、潜在的に誰もが抱えているものではないかと思った。本当は皆が苦しく辛い時は、努力を馬鹿らしいと思ってしまいが、その気持ちを押さえるようにして努力しようと思断しているのだと考える。これにやはり報いは関係してくる。報われなくても努力するのではなく、報われると信じて信じて努力した結果として報われたか、報われなかったで、この言葉になるかならないか

なのではないかと思った。この時初めて拓一の言葉が理解

できるように思う。報われると信じて必死で努力したと言いきれるまで努力した人間は、報われなくても後悔はないのかもしれない。後悔しないくらいまで、努力すれば、拓一の気持ちがかかるのだ。これは自分に誇りを持つことができるかどうかではないだろうか。報われると信じて努力を惜しまない拓一は、自分に誇りを持ち、自信を持って努力したと言い切れるのだ。つまり自分に誇りを持って努力できることこそが、この作品が伝える生きる価値なのではないかと私は思う。努力と報いをただ成功しているかしていないかで判断してしまいがちであるが、自分が満足にやり切ったと言える時、自分なりに報われたと思えることもあ

るのではないかと思う。結果として、この作品の最後に拓一は報われる。しかし、拓一はあの時、あの土地で報われていなくても努力を続けていたのではないかと私は思う。努力する自分に誇りを持って生きることと価値を見出せた時、人はもつと努力できるのだ。

今、『泥流地帯』『続泥流地帯』を読むと、三十余年続いた平成、その後の令和という流れの中で起こった震災や、台風、豪雨、酷暑といった災禍、未曾有の感染症であるコロナウィルスに翻弄される人間の姿がリンクする。

この作品の登場人物はそれらだけでなく、噂話や、自分の思い込みにも翻弄される。

主人公の耕作も、自立の道を求め出ていった母親・佐枝を、村人の心無い噂で自分たちを捨てたと疑っていた。のちに恋仲となる節子をも「深城の娘」というだけで、初めは反感を持っていた。

『泥流地帯』の前半でこんな場面がある。

深城は、石を投げ節子の額に傷をつけた耕作を憤り、祖父の市三郎の元に押し掛ける。

そんな深城に対して市三郎が言う。

「この耕作が石を持ったのが本当だば、そりや石を持つだけの訳があつたんだべ」

「いや、非があつたかどうか、まんずその様子ば聞かせてくれつていうこつた。はじめの初めから聞かせてくれ」

「ま、裁判官でも両方の言い分をよく聞いてから判断するべ、



後藤 夏江

そういうもんでねえべか」

そして、市三郎は節子が負ったくらいの傷は何日もしないうちになるが、と続ける。

「しかしな、大事な母親の悪口を言われてな、わしらの孫らの心に受けた傷は、生涯なおらんかもしれんでな」

人の顔に泥を塗るような、流言蜚語。

思い込みから正義感を振りかざし、根拠もない噂を流す。

今、SNSなどインターネット上での誹謗中傷で、自殺した芸能人の報道が後を絶たない。

一般人でも一度拡散された誹謗中傷をどうすることもできず、精神的にダメージを受け、偏見から職を失い、人間関係も崩壊し、人間不信に陥り、孤立する人も少なくない。

コロナ禍でも、感染者や医療従事者に対する差別などが横行している。

これは「人禍」と言っているのではないか。

耕作の幼なじみの福子も賢くけなげな少女だったが、父親に売られて、深城の経営する店で芸者となれば、村人から蔑まれ、自尊心を失う。

重ねて印象に残るのが、噴火で泥流の地と化した故郷を再生させようとする、復興派の吉田村長と反対派の深城たちの存在だ。

吉田村長とその家族は、「泥棒村長」などと、反対派から

嫌がらせや流言蜚語を受ける。

耕作は吉田村長を、

「どんなに人に悪く言われても、決して悪く言い返さない。それどころか、悪く言う人たちのことを、かばっている」

「そんな悪口を言う奴は言わしておけ。だけど、日本一の村長だと思っている人もたくさんいる」

と弁護し、教え子たちに、

「泥棒でもない者を、泥棒だと思い込むような生徒がいることは、先生が悪いんだ」

と自分を含めた大人たちへのゆるしを乞う。

また耕作の兄、拓一は弟の教え子、愛之助の父親による暴行で怪我を負ったが、その父親を訴えようとはしなかった。相手が弟の教え子の父親であるという体面ではなく、愛之助の心に自分の父親が大好きな先生の兄に怪我をさせたことを深く刻まれるのを思い量ったのだ。

これは市三郎の、「心に負った傷は生涯なおらない」の言葉に通じる。

この一連の物語は、噂に惑わされず、自分の目で真偽を確かめることを教えている。

そうして、吉田村長のように、相手を「赦す」ことも教えている。

実は再三、悪者として登場する深城も、父親として幼かった節子の顔の傷を案じる一面をもち、愛情が薄れ内縁の

妻であるハツを追い出し、愛人を後釜に迎え入れた際も、愛人を「いつまでも日陰の身でいいのか」という博打仲間の言葉にそそのかされたと噂をされた。

非業な人間である深城だが、節子に対する父親らしい愛情、情のままに動いてしまう人間の弱さを感じるのは私だけだろうか。

福子は自分を売った父親を、それでも父親だと言い、父親の死後も残った借金を払い続けようとした。

私は、節子を選んだ看護という職業が、父親である深城をへ赦す道につながっているのではないかと想像する。

節子自身も父を嫌ってはいるものの、父のおかげで裕福な暮らしができたことを否定してはいない。もしこの父親が病氣になったら、節子はきっと懸命に看病するはずだ。

耕作が兄、拓一を「かなわない」と思う場面が何度も出てくる。

それは、拓一が自分も、他人も疑うことなくひたむきに生きていくからではないか。

ネット世界の用語で、趣味などにどっぷりつかれることを「沼」という。

私たちは、ネットという「泥沼」に浸かつてはいないか。

そして、思いもよらない形で、誰かの顔に「泥」を塗ってはいないか。

膨大なネットの情報により、指先ひとつで個人の尊厳を

奪う危険をはらむ現在社会は、まさに泥流地帯といえる。

そこでかけられた泥は簡単には洗い流せない。

いつかその泥は自分に跳ね返ってくる。

これも私の想像だが、全く正反対に見える節子と福子は、だらしない父親を持つ、へ娘の業の象徴であり、髪結い、看護という技術を身に着ける佐枝、節子は呪縛から逃れ自立する女性の姿なのだと思う。

ともすれば拓一・耕作兄弟に目が行きがちだが、エピソードひとつつや、登場人物ひとりひとりにさまざまな伏線が敷かれていて、読み返すたびに新たな発見があった。この物語に出会うきっかけを与えてくれた、この公募に感謝したい。(了)



人生哲学の教え—人間の可能性を拓く名著

(ペンネーム) 石つ子 賢

令和二年五月二十九日の北海道新聞朝刊に「泥流地帯」

「続泥流地帯」作文コンクールの案内が掲載されていた。大変興味を持ち、インターネットで募集要項を拝読した。

作文の部：読書感想や論考、創作、何でもありの字数枚数無制限に惹かれ応募した。

三浦綾子さんの本との出会いは、大学時代に読んだ「塩狩峠」であった。實在の話であり読んで大変ショックを受けた。また、自分自身に自問自答した記憶が今でも鮮明に覚えている。それは「自分の命を捨てても、俺は他人を救えるであろうか」人間とは、命とは何かを真剣に考えた一冊であった。

爾来、三浦綾子さんの本をこよなく愛し、読み続けている。更には「三浦綾子全集」まで揃えた。三浦綾子ワールドの虜になった証拠である。

さて、「泥流地帯」・「続泥流地帯」を読んだ。この作品は、大正十五年五月二十四日発生した十勝岳噴火により、泥流が一気に美瑛川と富良野川を下り、二十五km離れた上富良野町まで達し、一三七人の犠牲者を含め大きな被害を受けた実際の話を綾子さんが現場に何回も赴き、取材・

住民への聞き取りをし、丹念に書き記した本である。

これらの本を読み、人生の後半戦に入った私に、さらなる人生哲学の教えを諭してくれたことから、それらの言葉と自分のこれまでの生きざまを通して論じてみたいと思う。

前半の「泥流地帯」は、拓一・耕作らの人間模様が主に綴られ、最終章から噴火により泥流と化した町を見て、絶望の淵に立つ耕作の情景で終わっている。続編を読まずにはいられない衝動に駆り立てられた。

「泥流地帯」の最初から人生の教えを乞うことになった。人間としてどう生きべきかを様々な場面で教えてくれる前半のこの本は、一字一句体に染みつくようにして読んだその場面ごとに綴ることにする。特に自分自身のこれからの生きる指針となるべき言葉に傍線を引いた。

最初から最後まで出てくる「深城」との最初の対決の場面である。耕作が深城に投げた石が、深城の娘・節子にあたった場面で耕作の祖父・市三郎が次のような事を言う。

「そうでねえべかな。あんた、女の子の顔に傷つけた、女の子の顔に傷つけたと、何べんも言いなきる。そりやあ無理もねえ。だがこのくれえの傷は何日もせんうちになおる。しかしな、大事な母親の悪口を言われてな、わしらの孫らの心に受けた傷は、生涯なおらんかも知れんでな。顔の傷と、心の傷と、どっちが大事か、あんたは知らんのか」

現代では筋が通らない市三郎の言葉だと思うが、誰もがこの言葉に納得するし、説得力があり、人生の機微をついている言葉である。

相手が誰だろうと「人間として真つ当な考え」を信念をもつてどうどうと言った市三郎を尊敬した。同時に父親を早くに亡くし、母親が居ない状況下であるが、この祖父母に育てられていれば、拓一・耕作ら兄弟は間違いなく、まっとうな人間として成長していくと確信した場面であつた。

次に祖母のキワが太陽を拝む場面である。

拓一が言う「な、ばつちゃん、何で太陽ば拝む」

祖母：「何でって、ありがたいから拝むべき。おてんとうさまがなきや、人間だつて、畠のもんだつて、一日も生きていられんからな」拓一：「だつてばつちゃん、太陽は、拝む者にも、拝まんものにも照つてるべや」祖母：「見えんどもええ、真心は届くべ。誰にも見えん所でも、真心こめて生きることだ。」

人が見てるとか見てないとかそんなことはどうでもよい。どんな場面でも、真心こめて常に何事も行うんだと優しく拓一に教えていく。

耕作が嫌いな益垣先生の授業参観での出来事である。

尊敬する菊川先生に突つかれて耕作が解答する。無事に授業参観が終了した時、一旦廊下に出た視学が耕作に言葉をかけるために戻ってきた。そして、視学：「君の家は

何をしているのかね」耕作：「農業です」視学：「なるほど、惜しいなあ」そして、次の言葉です。

「頑張つて勉強し給えよ。人間の一番の勉強は、困難を乗り越えることだ」正しく、この本の主題であるように感じた。

この場面について、耕作に菊川先生が諭す場面がある。次のような内容である。

菊川：「耕作、お前、誰のために勉強しているんだ？」益垣先生のために勉強しているのか」「そうじゃないだろう。先生が変わる度に、この先生は気に入ったから勉強するのだ、あの先生は嫌いだから、勉強しないのだでは、先生にふりまわされることになる」

「勉強は義務だ。義務というのほただし義務ということだ。人に役立つためにすべきことなのだ。誰がどうであつても、やるべきことやらなきやならん」であつた。

私はこの言葉を聞いて思い出したことがある。ソニーを創設した井深大さんが小学生に入学する社員の子どもたちにランドセルをプレゼントしている風景をテレビで視聴した。その時、井深さんは子供たちに「何のために勉強するのでしょうか」と優しく言っておりました。子どもたちが様々な考えを述べていましたが、井深さんは子どもたちにもこう言った。「勉強は、立派な大人になるためにするんだよ」とニコリ笑つて言った。

兎角、人は日に見えることだけで判断してしまいがちで

すが、目に見えないものに大切に大事なことがあるということだと思ひ感動した。

次の場面では、祖父・市三郎が孫たちに諭す場面がある。

良子が「悪いこととしても罰が当たらんなら、楽だねえ、じっちゃん」

市三郎「あんな良子。だからって悪いことをしていいってことではないぞ。自業自得つことがあつからな。それにな、悪いこととして罰があたらんのが、一番の罰かも知れんな。そんなことが確か聖書にあつたっけなあ」

聖書曰く「正しき者には苦難がある」

私たちは、苦難に出会つと「何も悪いことをしていないのに何故なんだろう」と思つてしまう。

私もそのような事を真剣に考えた出来事があつた。今から二十七年前の平成五年七月

松田家には、悲惨な出来事が続いた年月であつた。

「当時小学校一年生であつた娘が交通事故にあつた。この年は雨が多く、運動会が延期され、六月末に行われ、七月一日(月)娘は代休の日でした。楽しいはずの代休に娘が交通事故にあいました。その知らせを聞いた私は、現場の我が家に行きましたら、道路に事故車があり、車の前面が大破に近い形でしたので、娘はダメかもしれないと救急車で運ばれた病院に向かいました。車を運転しながら考えて

いたことは「娘の葬儀のことでした」しかし、病院に着き、玄関に入ると処置室から、聞き覚えのある「泣き声」が病院に響き、もしかして、娘が助かつたのかと思つた瞬間でした。車に十八m引きずられた娘は「顔面を含め包帯で体を覆われていました」娘と対面した瞬間に涙がでました。「助かつた」と。助かつた娘は、ここからが大変な状態がしばらく続きます。それは、包帯を取り換えるときに、皮膚にくっついていた包帯を取り換えるときの苦痛でした。病院中に泣き声が聞こえる瞬間は耐えられない気持ちと代つてやりたいという気持ちでした。鎖骨等の骨折もあり大変でしたが、妻の献身的な看病に徐々に娘も安定していきました。

その二週間後、私の生まれ育つた奥尻町青苗が地震(北海道南西沖地震)の後の大きな津波で壊滅的な状態になりました。娘の生命に異常がないことを確認した私は、公務の出張に出かけました。恩師の住んでいた天塩にいました。恩師と楽しく飲んでいた最中「テレビに映し出された見慣れた光景」それは、私が生まれ育つた青苗の住民が高台で叫んでいる映像でした。その時には、青苗の南端部は津波にさらわれて跡形もない状態になっていたとは、その時分はまだ分かりませんでした。翌日それが判明したのでした。私の両親は、一週間安否がわからない状態でした。父は私に連絡を取ろうとして、唯一ある電話の前に立つが、気持ちが悪転している状態から、私の自宅の電話番号を忘れてしまったとのことでした。その時、父の目に入つたのは「函

館市立病院の電話番号」でした。父は「そうだ孫が入院している病院だ。そこには嫁がいるはずだ」と思い、やっと私の妻に連絡が取れ、私の両親が無事であることが確認された瞬間でした。父親は、やっとの思いで新築した我家があつたという間に焼かれていく様を高台から見ていたとのこと。私自身切ない思いになりました。松田家の少ない親族六名がこの津波で亡くなりました。母は、遺体が発見されると体育館に赴き、遺体を確認し、親類と分かれば手厚くしておくつたと聞きましたし、父は青苗区長をしていた関係で、避難所での対応に追われていました。フェリー運航が開通した二週間後生まれ故郷に行き、両親と再会し、焼かれた自宅跡、津波でさらわれた箇所を巡りました。留めなく涙がでました。同時に勇気を貰いました。それは、私の両親の働く姿をみたからでした。自分のことより、他人のために一生懸命笑顔で接している姿に触れたときでした。」

この年は、私自身「何で我が家にこんなことが起きるんだろう。神も仏もないものか。といいしれぬ苦悶をした思いがあつた。」

その時は、分からなかったことが、今、長年勤めた職場を定年退職し、年齢も六十四歳になり、人生の後半戦に差し掛かった今だからこそ「正しき者には苦難がある」という意味が理解できるようになった。ある人はこうも言った。「越えられない試験は神様は与えないんだよ」本当に人生は試験の連続である。試験があるからこそ人生なんだろうと思

うようになった。

「泥流地帯」最終章「轟音」いよいよ泥流に町が飲み込まれていく。拓一・耕作の祖父母、妹が亡くなってしまふ。母親の佐枝が函館から帰ってくるというのに。泥流に飛び込んだ拓一も助かり、この本の最後はこういう言葉で結ばれている。

耕作「なあ、兄ちゃん。まじめに生きている者がどうしてひどい目にあつて死ぬんだべな」

拓一「わからんな、おれにも」

耕作「こんなむごたらしい死に方をするなんて：まじめに生きていても、馬鹿臭いようなものなんだな」

拓一「：：：そうか、馬鹿臭いか」

拓一「おれはな耕作、あのまま泥流の中でおれが死んだとしても、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生まれ変わつたとしても、おれはやっぱりまじめに生きるつもりだぞ」

拓一「：じつちゃんだって、ばつちゃんだって、おれとおなじ気持だべ。恐らく馬鹿臭いとは思わんべ。生まれ変わったら、遊んで暮らそうとか、生まれ変わらそうなどとは思わんべな」耕作は黙つてうなずいた。

これらの言葉（教え）から、拓一・耕作兄弟は、これまで祖父母から教わった「真つすぐに生きる生き方」を信じ今までで通り、自分を信じて誠実に生きていくだろうと感じるし、

今後この兄弟たちはどのような試練が待ち構えているんだろうか。また、どんな試練にも母親とともに、希望を失わない生きざまをしていくのだらうと思いつつ「泥流地帯」を読み終えた。

「続泥流地帯」続であることから、当然泥流地帯となった故郷での暮らし、拓一・耕作・佐枝の人生はどうなるのだろうかと心配と希望をもって読むだろうなと感じた。その通りとなった。続の最初の章は大正十五年七月十一日の「村葬」から始まる。その章で拓一と耕作の会話、そして、佐枝。

「そうだなあ、耕作の言うのはもっともだ。耕作の言うことは筋が通つてる。お前は頭で考えるからなあ。だがなあ、耕作。俺は心で考えたいんだ。ほかのいい土には、俺は何の心も動かん。こんだけ、じつちゃんやばつちゃんや、姉ちゃんや良子の命ば…奪った泥流だから…だからな、耕作、俺は元の土地に戻してみたいんだ。燃える土だから、俺はやってみたいんだ。じつちゃんたちが開拓した時、一本一本木を伐り倒してな、その度に、空がひろがっていくのを見て、歓声を上げたっていうじゃないか。そんな時の苦勞を俺はな、硫黄臭い土に鍬を入れることで、味わってみたいと思うんだ。みんなの命を奪った土だから…ほかの土地なら、俺は…農家はごめんだ」

佐枝…「拓一、お前は一度死んだも同然だからね。心で考える拓一が、考えたことなら…母さんも一緒に…今度こそ一

緒に苦勞するよ」

さらに耕作は「泥流は自然を荒らすことができて、人の心まで荒らすことはできないはずだ」

悲惨な泥流地帯となった生まれた場所で頑張っていこうとする強い決意と亡くなった人間の魂が生き残っている土を復活させようとする人間の可能性を強く感じた。

その強い決意と覚悟が表れているのが、上富良野起債反対同盟会主催村民大会で拓一の次の言葉が証明している。

拓一…「三十年前、一本一本木を伐り倒し、あの土地を肥沃な畠に変えた祖父母たち、その苦勞を思えば、ぼくは、復興せずにはいられないんだ！」

「ぼくは、命をかけても復興する。一応の科学的な調査も進んでいることだから、ぼくはこれを暴論だとは思わない。先ほど弁士の中に、枯木に水をやる馬鹿はいないと言った人がいる。ぼくは断じて、あの土は枯木ではないと信じている」と。

国男が拓一にこのように言う場面がある。

国男…「拓ちゃん、難儀するのはいいよ。する甲斐のある難儀ならな。しかしな、何の報いもない難儀を、俺は拓ちゃんにさせたくないんだ」

拓一…「それはな、国ちゃん。何て言ったらいいのかな。俺は、こんなふうにいるんだよ。ここに米が実るかどうかわからない。少なくとも、三年経ったらわかるだらう。三年経って、もし

実らないとわかったら、その時は俺も諦める。すると人は言うだろう。その三年の苦労は水の泡だったてな」「そりゃあそう言うさ」「しかし、俺はね。自分の人生に、何の報いもない難儀な三年間を持つということはね、これは大した宝かも知れんと思ってる」「うん、宝だ。たとい米一粒実らなくてもな。それを覚悟の上で苦勞する。これは誰も俺から奪えない宝なんだよ。わかるか、国ちゃん」

「実りのある苦勞なら、誰でもするさ。しかし、全くの何の見返りもないと知って、苦勞の多い道を歩いてみるのも、俺たち若い者のひとつの生き方ではないのか。自分の人生に、そんな三年間があつたって、いいじゃないか。俺はね、はじめからそう思ってるんだ」

この拓一の言葉は、三浦綾子さんが拓一に代わつて私たちに伝えようとしている言葉だと強く感じた。それは「人生には紆余曲折は当然あるが、そこには、無駄なことは何一つとしてないんだ」ってことを教えてくれた言葉である。

復興に向けて頑張ろうとしていた拓一に再び不幸が訪れる。それは、耕作が生徒に書かせた綴り方に反感をもっていた父母集団が連動会の反省後、耕作を待ち伏せし難癖をつけ、棍棒で殴ろうとした瞬間に拓一が耕作の前に立ち、下腿部を骨折する重傷を負った。そんな拓一に耕作は言う。耕作：「兄ちゃん。俺は不公平だと思うよ。もし神というものがあるとすればだよ。もっと公平であっていいと思うん

だ。悪いことをした奴は悪い報いを受ける。いいことをした奴はいい報いを受ける。それが神のいる証拠のような気がするんだがな」

拓一：「そうだなあ…」

いよいよ「泥流地帯」「続泥流地帯」のクライマックスに進むことになる。母親佐枝の登場となる。

拓一：「それは俺たちには、わからないけどさあ。吾々人間の頭では計り知ることのできない何かが隠されているんじゃないのかなあ。ねえ、母さん。母さんは教会に住みこんでいたから、いろいろ聞いてるだろうけどさ」

佐枝：「ええ、母さんもね、これはいろいろ考えたことだし、お話も聞きましたよ。母さんに話してくれた牧師さんはねえ、『神は愛なり』って。そのことだけを信じていたらいいて」

修平：「じゃ、どうして災難を下すんだ、嫂さん」

佐枝：「修平さん、わたしには上手に説明できませんけどね。今、拓一が言ったように、人間の思いどおりにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ。ですからね、苦難に会った時に、それを災難と思って嘆くか、試験だと思って奮い立つか、その受けとめ方が大事なのではないでしょうか」

修平：「しかし、正しい者に災があるのは、どうしてもわかんねえなあ」

拓一：「叔父さん、わかってもらわなくてもさ、母さんの

言うように、試練だと受けとめて立ち上がった時にね、苦難の意味がわかるんじゃないだろうか。俺はそんな気がするよ」

※苦難に会った時、それを災難だと思って嘆くか、試練だと思って奮い立つか、その受け止め方が大事

「泥流地帯」・「続泥流地帯」を通して、この言葉を三浦さんは私たちに本当の意味で伝えたかったのではないでしょう。若い人たちには、なかなかこの言葉を理解するのに苦しむかもしれないが、頭の片隅のどこかに置いて、常に前向きに頑張つて欲しいという三浦さんからのエールかもしれない。

これらの事から私は、三浦さんの著書である「愛の鬼才 西村久蔵の歩んだ道」(小学館文庫)の次の文を思い出した。
・落第した久蔵に父伸夫は「こう言いました。

「人生いろいろあらあな。落第もある、破産もある、失恋もある。久蔵、おれも小樽の支店を委されて、ま、しくじったようなもんだ。しかしな、久蔵。ころべば起きりやあい。起きりやあいなんだ。」「なあに、人間、ちゃんと生きて行けば、失敗もいつか勲章になる。…」」(pp61-62)

・また、久蔵が友に裏切られた時に母力クは久蔵に言います。

「どんなに辛かっただろうね、久蔵。でもね、辛い目に会わせてくれる人が、私たちを人間にしてくれるものなのです。いい人だけが、私たちを育ててくれるものではないのですよ。それほどに口惜しい目に会わせてくれたお友だちは、今にお前の恩人になるかもしれません。決して恨んではなりませんよ」(p68)

これまで読んできた「泥流地帯」「続泥流地帯」と共通する考えがあり、掲載した。そこには、1、人生の失敗は、後に自分の勲章になる。2、自分から見て嫌な人・苦手な人程、自分を成長させてくれる。その方々を自分の成長のための恩人だと思ふこと。私自身この言葉を大事に大切に、これからの人生を生きていきたいと思っている。だからこそ、「続泥流地帯」の最後の言葉がとてもしっくりきた。何事にも諦めないことが人間の可能性を拓くこと、正に人生哲学を教えてくれた二冊であった。

結びになるが、三浦さんと同じくキリスト教信者であり、後に「感化院の父」と称される「北海道家庭学校」の創設者・留岡幸助の事を思い出した。

遠軽の家庭学校に「有難」という額がある。留岡が好んだ言葉と聞く。右から読むと「なんあり」左から読むと「ありがたし」となる。

即ち「人は困難なことにぶつかって、それを乗り越える度

に成長していくものだ。だから、困難なことにぶつかるとは大変なことだろうが、実は有難いことなんだ」という解釈になる。(新世紀「ひとむれ」仁原正幹著 生活書院 p97)

私は、苦難の道というのは人それぞれ考え方に違いがあるのかと思うが「苦難」・「困難」は自分を成長させてくれる人生の糧と思い、それは大変有難いことなんだという考えに立ち、自分の残りの人生を全うしたいと考える。

三浦綾子さんの「泥流地帯」・「続泥流地帯」の二冊は、生きる意味を一人一人に問うた名著であると思う。

素晴らしい書籍と出会えたことに感謝する。



『いつも心に拓一を』

(ペンネーム) 鵜飼 鮎子

小学六年生の夏、宿題に悩む私に母は三浦綾子作『泥流地帯』を薦めた。正直者は馬鹿を見るし、努力は裏切る。善因善果／悪因悪果なんて人間の願望だ。母がこの本を通じて私に教えた現実とは、だいたいそんなところ。母親が十二歳の可愛い娘に突きつける現実としては少々衝撃が強い気がする。ただ、母の思惑どおり、私はこの本を己の血肉に変えてこれまで生きてきた、と自負している。初めて出会ったあの瞬間から、私の心には、ずっと拓一が住んでいる。

この本で私の人生が変わった、と言い切れる経験を持つ人は今日日さほど多くないだろう。今時みんな本なんて読まない。でも私の人生を変えたのは間違いなくこの本だ。当時の私というと、スクールカーストのそれなりの上位在籍から一転、読書のせいで衰えた視力を補うための分厚い眼鏡と思春期特有のニキビに悩まされるお年頃だった。多分そのころ、人生はあまり楽しくなかった。四年生のころ告白してくれた男子たちは、見た目の変化に過去を悔やむかのように、私を無視するようになっていた。小学生男子の恋心なんてそんなものだろう。これらの環境の変化を

私は気にしていないつもりだったけれど、多感な時期の娘の機微を、母は敏感に感じ取っていたのかもしれない。

「あなたにはまだ難しいかもしれないけれど、読んでごらん」と母から差し出されたボロボロの文庫本を、私はあつという間に読んだ。母が敬愛して止まない作家の作品を初めて読むことで、大人の入り口に少し近付いたような気がしたものだ。周りの視線が気になって、ともすれば控えめになりかけていた私に「周囲からどう見られるかじゃない。自分がどう思うのか、何がしたいのかを考えて行動すれば良い」と拓一は言っていた。何だか肩の荷が下りた気がした。そして拓一に恋をした。「拓一が魅力的に見えるなんて若いわね、私はじっちゃん派よ。」と母は言った。何はともあれ、自分が正しいと思うことをしよう、とその時私は心に住み始めた拓一に誓った。

中学生になり眼鏡からコンタクトレンズに変わった私のポジションは、高からず低からずそれなり。当時の私はあまり人と群れて騒ぐのが好きでなく、群れるのが嫌いな女子たちと群れていた。ある日派手な派閥の女子のひとりがグループから追い出され、周囲は遠巻きにそれを見ていた。彼女が避難所を選んだのはなぜか私だった。そして私はそれを受け入れた。彼女がどこかで何かをしたにせよ、私に拒否する理由はないから。少しすると彼女はもとの地位に

戻っていった。取るに足らない期間で、そんなことがあったのさえ忘れていた。

二年経ち、クラスも違い疎遠だった私の卒業アルバムの寄せ書きに、彼女は「二年前は助けてくれてありがとう。あの時は本当に救われました」と書いていた。びつくりした。すっかり忘れていて何のことかわからないほどだった。でも、誰も気にも留めないような私の小さな行いが、誰かの救いになっていた。この小さな事件は私の自信に繋がった。多分、私の心に住む拓一も、少し褒めてくれたと思う。

高校も大学もそれなりに楽しく遊んで過ごして、本をたくさん読んだ。社会に出て十年、読書しても人間は大して立派には仕上がらないことを実証しながら生きてきた。心に拓一を住まわせて二十年になるけれど、どうやら私はヒーローにも偉人にも拓一の妻にもなれないらしい。人生多分そんなものである。それでも、私の心の真ん中には永遠に拓一がどっかと胡坐をかいている。きっと今も良子に供える人形でも彫りながら。ちなみに何回読んでもまだじっちゃん派の境地には至らない。先日母に「じっちゃんよりお母さんの方が年上だよと教えたらしョックを受けていた。そうやって、拓一もじっちゃんも、ずっと私たちの心の中に住んでいる。いつの間にか耕作より拓一より年上になり、お佐江さんを越え、やがてじっちゃんやばっちゃんよりも歳

をとる。そのころ私はどんな人間になっっているのだろう。褒められるからやる、叱られるからやらない、の行動基準では拓一に苦い顔をされてしまうかもしれないけれど、私は好きな人に褒められたいのである。拓一に「よくやったなあ」と言われたいのである。それが私の行動の礎である。

『泥流地帯』『続泥流地帯』は私に人生を教えてくれた。正直者は馬鹿を見るし、努力は裏切る。善因善果／悪因悪果なんて人間の願望に過ぎない。どんなに不条理で理不尽でも、私たちはそんな日々に何とか折り合いをつけて、どうにかこうにか生きていく。自分がどうしたいか、何を信じるか。これからも丁寧に、愚直に、人生を繋いでみようと思う。いつも心に拓一を住まわせて。



太田 礼子

今年の9／30から10／4まで札幌、旭川、上富良野十勝岳へ行く予定でした。もちろん、泥流地帯や三浦綾子作品の舞台をめぐるためです。しかし、キャンセルをしました。実は、今年度は就職氷河期向け公務員試験があり、10月末の2次試験が控えており、旅行をしたために新型コロナウイルスに感染し2次試験を受けられないといけないと思いキャンセルしました。

これで、合格していればキャンセルしたことにも我慢できるのですが、すでに1次試験で敗退をしました。

一緒に行く予定の夫も勤務日を変更してしまい、再予約もできません。

旅行を決めたのも、キャンセルをしたのも、試験を受けることを決めたのもすべて私です。

気持ちはモヤモヤしています。

しかし、気づいたことは私には自由があるということです。泥流地帯の主人公と比べたら比べ物にならない幸福なことと思います。

この幸福を大事にしつつ、北海道に行けるのを楽しみにしています。



「泥流地帯」と「続泥流地帯」を読んで
感じた大切なこと

(ペンネーム) すみれ

あらずじを見てから読み始めたため、「いつ災害の描写が来るんだろう」とびくびくしながらページをめくっていたが、百ページにさしかかる頃には物語そのものに引き込まれていた。主人公の耕作が姉の富とその婚約者武井のやりとりを偶然聞いてしまい、その後の彼の決断と行動にショックを受けたからだ。そして、耕作とその兄拓一の幼なじみで、拓一の想い人である福子が売られてしまつてからは、彼女がこれからどうなっていくのかが気になりつつ、読み進めていた。

三浦綾子氏といえば「氷点」のイメージが強いため、ドロドロした人間関係になるのではないかということが災害描写以上に恐ろしかったが、思ったほどひどくはなかったのだ。そこは安心して読み進めることができた。それでも、拓一の福子への想い、耕作の友人節子の耕作への想いが報われるのかどうか、耕作は福子と節子のどちらが好きなのか「続泥流地帯」を読む上で特に気がかりだった。しかし、村民大会の帰りに節子が、耕作が中学に行くのを諦めたと知って泣いてくれたとわかってから、耕作は節子の想いをしっかりと受け止めるようになるため、人間関係についてはあ

まり心配しなくてよくなったと感じた。

耕作と拓一は本編で様々な苦難に会うが、その中でも最たるものといえば、やはり泥流によってなにかもを失ったことではないかと思う。「泥流地帯」および「続泥流地帯」の主なテーマはやはり、作中でもたびたびあげられる「なぜまじめに生きている者が苦難に会うのか」だろう。耕作たちの祖父市三郎は、耕作に「この石村の家、何かに祟られているべか」と尋ねられた際、「聖書には『正しき者には苦難がある』って、ちゃんと書いてあったぞ」と答え、「何で正しい者が苦難に会うんだ」という問いには、「そいつはなあ、人間の理屈で考えてもわかんねえことだ」と答えた。そして、拓一がなぜ辛いことや苦しいことがあるのかと問うた際は、「辛いこと、苦しいことを通して、神さまが何かを教えてくれているのかも知れんな」と語った。「続泥流地帯」の終盤で耕作は、母の佐枝から促される形で聖書のヨブ記を読んだことをきっかけに、自身に「善因善果、悪因悪果の考えが根強くあったことに気付く。それらはあくまで自分たちが『善行には善い結果が、悪業には悪い結果があつてほしい』と願っているだけにすぎず、つじつまを合わせるために出てきた考え方にすぎない」ということを、拓一、佐枝、叔父の修平に語った。その後、四人は以下のようなやりとりをしている。

「(前略)人間の思いどおりにならないところに、何か神の深いお考えがあると聞いていますよ。ですからね、苦難に会った時に、それを災難と思つて歎くか、試練だと思つて奮い立つか、その受け止め方が大事なのではないでしょうか」

「しかし、正しい者に災があるのは、どうしてもわかんねえなあ」

修平が呻くように言った。と、拓一が言った。

「叔父さん、わかつてもわかんなくてもさ、母さんの言うように、試練だと受け止めて立ち上がった時にね、苦難の意味がわかるんじゃないだろうか。俺はそんな気がするよ」
明るい声だった。耕作も深くうなずいた。

では、佐枝の言うように、苦難を試練だと受け止めるためにはどうすればいいのかというと、それについても、作中で語られたことに手がかりがあると私は考える。

市三郎は、富に「金持つて偉いんか」と尋ねられた際、「人間の偉さはな、物をどれだけ持つてるかということでは決まらん。金をどれだけ持っているかということでも決まらん」と答えた。それを聞いた拓一に「貧乏人のほうが偉いかい」と聞かれると、「金の多い少いは人間の偉さには関係はねえ。金持にも貧乏人にも、馬鹿もいれば立派なものもある。問題は、目に見えるものが問題じゃねえ。目に見えないものが大切じゃ」と答えた。その後、さるかに合戦を例にあ

げ、人間は目に見えるものがほしいのだと語り、「にぎり飯はすぐに腹がすく。だとも柿の種には命があるべ。おがれば木になってまた実がなるべ」と続けた。

では、目に見えないものを大切にするといっても、具体的にはどういうことなのか。その例としてあげられるのは、耕作が同級生の権太に父親から「叱られても、叱られなくても、やらなきゃあならんことはやるもんだ」と言われたと聞いた際、「先生に叱られても、自分で正しいと思ったことは、したほうがいいんだ」と思い、「自分のどこかがまちがっている」ことに初めて気がついたことだろう。権太は毎日、担任の益垣先生に叱られているが、だからといって病気の母親の手伝いをせずに学校に走って来たりはしないと言う。このとき耕作は、市三郎が「正しいことをすんのに、人がどう思おうがかまわねえ」と言っていたことを思い出しており、「叱られても、いいことはするもんなんだ」と思った。人にほめられることをして、叱られることはしないというのも、「目に見えるもの(人にほめられるという行為)がほしい」からだろうし、たとえ叱られたとしても、自分にとって正しいことをするべきだという考え方は勇気が要ることであり、市三郎の言う「目に見えないもの(自分にとって正しいこと、それを貫く勇氣)を大切にすること」に当てはまると思う。

このように、市三郎は耕作と拓一にたびたび、生きていくにあたって大切なことは何かを教えてくれている。拓一

が「復興したい」という意志を何があっても揺るがさなかったのは、市三郎の教えがあつたからだろう。現に、拓一は福子の兄国男から何の報いもない難儀をさせたくないと言われた際、三年経つても米が実らなかつたら諦めると言つた後、「自分の人生に、何の報いもない難儀な三年間を持つということはね、これは大した宝かも知れんと思つている」と語り、誰も自分から奪うことはできないと述べている。

そしてもうひとつの例としては、佐野文子という女性が遊女のために命がけで戦つているというエピソードだろう。国男は軍で知り合つた笠巻からその話を聞いたとき、「一体どこからそんな勇気が出るんかなあ」と尋ねた。すると、笠巻は「それはね、勇気じゃないよ、愛だよ」と答えたという。そして、彼女が「愛には恐れがない」という言葉と「人、その友のために命を捨つる、これより大いなる愛はなし」という言葉をモットーにしているということも語つた。これを聞いて耕作は、佐野文子が行っているように、「自分とは関わりのない、いわば責任を負う必要のない人たちのため」の愛こそが、教師が生徒に向ける愛よりはるかに崇高なものであると思わずにはいられなかつた。これもまた、市三郎の言っている「目に見えないもの（無関係な人々のための愛）」を大切にすることにはまると思われる。

以上のことから、苦難を災難と思つて嘆くのではなく、試験ととらえて乗り越えるためには、金銭といった目に見

えるものではなく、勇気や愛情といった目に見えないものを大切にすることが必要ではないかと私は感じた。福子が最後、旭川行きの列車に乗る（深雪楼から逃げる）という選択をすることができたのは、自分のためだけでなく、拓一と耕作、そして節子のために、彼らの愛情に報いるために勇気をふりしぼつたからではないだろうか。

泥流散歩③ 「噴火記念駐車公園」

石村家（旧）から下流に数百メートル、日新（作中では日進）の沢の入口にある駐車公園には、泥流によって押し流されてきた巨岩が記念碑の土台として保存されています。

その重量なんと68トン。下から見上げると拓一が飛び込んだ「山津波」の絶望的な破壊力が想像できます。



なおこの「十勝岳爆発遭難記念碑」の建立は被災からちょうど一年にあたる昭和二年五月二十四日。

物語に実名で登場する吉田村長の娘「ていちゃん」が除幕を担いました。



『人生の試練の意味とは何か』

——三浦綾子「泥流地帯」を読んで——

松野 富子

今年の春に、私は書店で偶然この本を見かけて、裏表紙の文面を何気なく読んだ。

大正15年5月、十勝岳大噴火。突然の火山爆発で泥流は開拓部落を一気に押し流し家族の命を奪い、田畠を石河原に変えた——。

それを読んだだけで、思わず二年前に経験した胆振東部地震の時の激震とブラックアウト（停電）の恐怖体験を思い出した。まさにフラッシュバックのように感じた瞬間だった。今年は更に、新型コロナウイルスの感染で私達は「コロナ禍」の試練を経験している。

こうした状況の中で私が『泥流地帯』と出会えたのは、不思議な偶然かもしれない。

さらにこの小説は、史実に基づいているので十勝岳の大爆発の場面は、圧倒されるほどの迫力で胸に迫ってきた——主人公の拓一と耕作の兄弟を中心に、上富良野の開拓農家で暮らす「石村家」には過酷な状況であった。

父は山の事故で亡くなり、母も働くために遠方で働いていた。家には、拓一と耕作の他に、祖父母の市三郎、キワ、あとは姉の富と妹の良子で6人。貧しい中での暮らしで余

裕は無く、大変であった。私も育った環境が同じ農家で、家族は両親、祖父母、子どもは私の他に弟と妹が3人の大所帯だったので当時のことを、しみじみと思い出す——私は両親の下で成長できて、とても幸せなことだった。実際に貧しきで家族が離散したケースも聞いたことがある。

泥流地帯の小説では、十勝岳の泥流は硫黄を含む大量の泥と流木で濁流となつて家屋も木々も、そして人までも容赦なく、のみ込んだ。

祖父母も、姉も妹一瞬にして亡くなり、守つてあげられなかった気持ちがない。

原作者の三浦綾子さんは、この泥流地帯の小説のテーマとして、まじめに生きている人たちが、なぜ過酷な試練を受けなければいけないか——を追及しているのだそうだ。

困難な状況に打ちのめされそうになつても、主人公の拓一と耕作兄弟は、苦勞をしながら開拓した土地を、もう一度稲の実る水田にしたいと、決意をする。

「試練だと受け止めて立ち上がった時に、苦難の意味がわかるんじゃないだろうか」と拓一が小説の最後に話してくれた言葉の意味は、まさに現在の私達に向けてのメッセージだと思う。

私は泥流地帯を読んで、いつの時代も人間は社会の中で、人との関わりを通じて互いに尊重し、認め合い許し合うことが不可欠だと、あらためて思った——。



『拝啓 石村 耕作先生』

上島 真紀子

あなたはすごい人です。学校始まって以来の秀才と呼ばれ、父を失い、母は修行のため不在の中、祖父母を助け、兄妹、家族みんなで力を合わせて、貧困と闘いながら、一生懸命、誠実に生きていましたね。

大正15年、十勝岳が噴火し、すさまじい山津波が発生し、祖父母、姉、妹が犠牲に。姉の姑は「心がけのいいもんは助かるよ。」と言い放ちましたね。先生は、「まじめに生きている者が、どうしてひどい目にあって死ぬのか。」と。

お姉さんの姑のような発言をする人、いますね。「ALS（筋萎縮性側索硬化症）は業病」と元東京都知事の石原慎太郎氏が発言、謝罪しました。難病にかかった人は、前世の悪業の報いだ。と。許せません。

私はかつての職場の平田先輩を膠原病で亡くしています。とても優しい先輩でした。いつもニコニコ笑って、話をウンウンと聞いてくれました。昼休みにはキャッチボールをして走り回っていたのに、車椅子になってしまつて、入退院を繰り返して。きつと精神的にも肉体的にもつらかつたでしように一切、愚痴ったり、怒鳴ったりしませんでした。あんなに優しく、何事にも一生懸命な平田先輩が若くして亡くなったのでしょうか。心がけが悪かったから？私のほうがよっぽ

ど悪いです。

因果応報？私は信じません。生き残った者と亡くなった者の間に、理由なんてありますか？たまたまの結果ではないですか？人間はすぐに「どうして？」と理由を探してしまいます。理由付けすることで安心できるからです。もちろん災害や病気に対しての備えは大切です。でもすべての災害、病から人間は避けることはできません。どんなに科学が発達しても人間はちっぽけな存在だと思えます。先生を見習い、今出来ることを頑張つて生きていきます。平田先輩に恥じない生き方をします。

私は数年前、地質研究所に勤務しておりました。地質研究所には、十勝岳の火山活動について研究している研究員達がいいます。十勝岳の噴火の兆候を探るべく、日々研究に励んでいます。気象庁や大学関係者達も常に、十勝岳の噴火口を確認しています。日新の沢をはじめ上富良野町の皆様は、沢山の人達に見守られています。

十勝岳は噴火をしたら恐ろしい災害をもたらし、人々の財産や命を奪う惨事となりますが、十勝岳連峰のすばらしい眺望、温泉や地熱発電など恩恵をもたらせてくれます。上富良野町のサイクリングは最高と、サイクリング仲間が絶賛していました。サイクリングに上富良野町を訪れたい、そして、先生が一生懸命守り抜いた日新地区の地に立つてみたいと楽しみにしています。



「泥流地帯」「続泥流地帯」における
登場人物の分析および総括

(ペンネーム) 中闘士ルオジク

【目次】

【序論】

【第一章：泥流地帯】

第一節・市三郎と菊川先生

第二節・深城との因縁

第三節・福子と節子

第四節・十勝岳噴火

第五節・総括および作品テーマ考察

【第二章：続泥流地帯】

第一節・拓一と耕作

第二節・深城からの決別

第三節・全体の総括

第四節・あとがき

【序論】

私が三浦綾子という作家を知ったのは、ツイッター上のフ
オロワーさんからの影響が大きい。

元々大学の文系に属していた経緯から、歴史に対する知的
好奇心が旺盛だったのもあり、「塩狩峠」を手につけたの
がきっかけである。「塩狩峠」では一人の鉄道員が生まれ、
悩み、キリスト教と出会い、そして客車の暴走から身を挺
し殉じるまでの人生が描かれている。

ではなぜ「泥流地帯」を選んだのか。

ひとつは三浦綾子という作家をもっと知りたい、調べたい、
そして読みたいという三つの知的好奇心に起因するもので
ある。そしてもうひとつは、作品という「目的地」に挑み続
けたいという飽くなき探求心に起因するものである。ただ
目的地と一口に言えどもルートは多岐におよび、中には違
った解釈を提示するルートもある。

さて、私はその中のルートの一つとして、今回は「泥流地
帯」および「続泥流地帯」という作品を自ら見て、感じ、そ
して作品に対しての解釈をここで示したいと思う。

【第一章：泥流地帯】

第一節・市三郎と菊川先生

主人公である石村拓一とその弟、耕作を語るためには、二人の登場人物の影響について語らなければならない。その人物とは、祖父である石村市三郎と、恩師である菊川先生である。

まず、市三郎と菊川先生は「耕作達の立ち位置を熟知している理解者」という共通項があり、生活の一部分で、またある時は教育の場でそれぞれ悩みを聞き、解決の糸口を出す人格者であり、同時に知恵者でもある。

そんな二人の相違点として、市三郎と菊川先生の作中の扱われ方にある。市三郎が薬の処方やアドバイス等を通じて、兄弟だけではなく村の人々から尊敬される、いわば精神的支柱となっているのに対し、菊川先生は教育面での活躍が強く、耕作は彼に憧れて教師としての道を歩むきっかけとなる。いずれにせよこの二人の存在によって、兄弟の人格形成に影響を与えたのはまず間違いないだろう。

市三郎は泥流の渦に消え、菊川先生も妻子を失ったが、二人の精神は兄弟に引き継がれ、やがて上富良野復興への礎となるのである。

第二節：深城との因縁

さて、ここからは兄弟を悉く妨害し、作中で多くの人々

を苦しめる深城鎌治について語る。

彼の作中における一連の所業の数々は、石村兄弟だけではなく、娘である深城節子、更に耕作の幼馴染である曾山福子の人生にも、深淵のようなぼつかりと空いた影を落としているのである。

まず彼が犯した所業について見てゆくと、母のいない耕作に平然と後家呼ばわりし、高い利子をつけて人々から搾取をするなど、総じて人々から所業について嫌われている描写が多い。特に娘である節子に対する接し方は、とても誠実とはかけ離れた接し方と態度であり、結果的に彼が勝手に持つてきた縁談を拒んで逃げるまでに至っている。

そんな彼の作中最低の所業は、耕作の幼馴染の福子を買収し、自らが経営する遊郭「深雪楼」の遊女「小菊」としてこき使うという点である。ただこの一件に関しては、福子の父親も借金のカタとして売り渡す事に喜々として同意しており、深城だけの所業とも言えない部分がある。

無論そんな横暴を拓一が許せる筈もなく、作中では彼女を買い戻すために金を必死でかき集めている姿が描かれている。

彼の横暴は十勝岳の噴火以降ますます悪化してゆくが、それに関しては第二章第二節にて改めて後述したい。

第三節・福子と節子

前述したように、曾山福子と深城節子は、それぞれ深城鎌治によって運命を狂わされてゆく悲劇性を帯びている。前者が遊女にされた耕作の幼馴染であるのに対し、後者はその深城の娘というだけで謂れもない迫害が待っている立場にある。

では、その悲劇性とは一体何なのか。まず福子から見えてゆくと、父親によって深城に売り渡され、更には遊女としての生き方を余儀なくされている。これだけでも絶望でしかないのに、泥流によって自分以外の家族を喪う。

彼女も最終盤で泥流の中から耕作によって助けられるが、仮に生き残っていたとしても家族は泥流の中に消え、また深雪楼の遊女としての生き方に戻る。これぞまさしく「生きていても絶望」でしかないのだ。

だがそれでも、彼女は耕作達の希望となっていたのである。そのキーアイテムが耕作に渡した白い石である。耕作はたとえ彼女が遊女となっても大切に扱い続けた。その石は泥流で流されてしまうものの、裏返せば耕作達と福子を結びつける「希望のアイテム」となったのである。

一方、節子には耕作との間にある幼少期の記憶が関係している。彼女は深城に暴言を吐かれ、カッとなった耕作による投石によって額を負傷する。だが傷を負わされたにも関

わらず、それでも耕作を許す。それは一体何故だろうか。

前述したように節子に対する深城の扱いは横暴である。負傷した際も彼女に対する心配というよりも、「嫁に行けなくなる」という一点のみに言及し、決して心配しようとしなかった。もしあの時、節子を投石から庇っていれば、少なくとも父としての威厳やメンツは保たれていた筈である。つまり節子からすれば、実の娘を庇おうともせず、ただ世間体を重視する父親の姿勢に、この時点で失望していたのである。

だからこそ耕作が言い放った、いわゆる「俺の嫁」宣言は、父親によって強いられ、重苦しく狭い世界を崩してくれる、唯一無二の希望だったのである。

第四節・十勝岳噴火

さて、この節において最終盤でのターニングポイントとなる十勝岳の噴火と泥流について語ってゆく。ここで感じた点としては、噴火前に頻発する地震に慣れてゆく心理的な侮りから、そこから誰しもが予想できない突然の泥流によって全てが消えてゆく流れは、正確性もさることながら自然の一面を描いていて恐ろしいと感じた。

泥流によって拓一と耕作も祖父の市三郎達を喪うものの、とりわけ悲惨だったのは妹、良子である。彼女は母である

佐枝の髪結いを心待ちにしていただけに、そんな期待をも一瞬で奪っていった泥流への怒りと悲しみは、耕作達と共に感ずる部分があった。

泥流が奪っていった人命の描写は、耕作達の家族だけに留まらない。この頃になると耕作は教員としての職につき、クラスを担当するまでに至っていた。その受け持っていた生徒の中で、特に坂森五郎に対して気遣っていた描写が多かった。

彼には母親がいない。その点から耕作は親身に接し、詩を通じて五郎もまた耕作に心を開いてゆく。噴火の日には耕作と遊ぶ為に一里以上ある道を歩き、泥流に流されてしまふ。

五郎と接してやれなかった耕作の後悔と慟哭。それは裏返せばそれだけ菊川先生の授業のスタンスである教え子の接し方を、耕作も受け継ぎ、大切に使っていた事の証左であろう。

第五節・総括および作品テーマ考察

作品としての「泥流地帯」の総括として、私が本作から感じたテーマは「築き上げてきた安寧の破壊」という点である。しかしながら安寧の内訳は、深城によって深い影を帯びている部分がある。それでもなお、上富良野の地に懸命に

生きる人々の姿は逞しきを感じさせるものがあつた。

そんな中で起こった噴火と泥流は、人々から先祖が拓いていった土地を、親兄弟を、そして彼らが積み重ねていった思い出をも破壊し尽していった。それでも耕作達は人々の思いを胸に秘めて、泥流後の上富良野の大地を踏みしめてゆくのである。

「第二章・続泥流地帯」

第一節・拓一と耕作

前作「泥流地帯」においては、市三郎のような先達が切り開いていった上富良野の地が、十勝岳の爆発とそこから溢れ出た泥流によって全てを飲み込んでいく過程が描かれた。本節では惨禍から立ち上がり、復興を成し遂げようとする拓一と耕作について述べる。

実質的に市三郎の立ち位置については拓一である。

彼は本作においては実質的な主人公といえるポジションと言え、違う意見を収集しようとする反対集会に参加し意見を述べたり、上富良野の復興を目指す吉田村長に賛同したり、流木を除去するなど、総じて復興の最前線に立っている印象を受けた。

だが復興は容易ではない。まず、田畑に積もった泥には十勝岳の硫黄が含まれており、とても生育には不向きである。作業中に付着した泥を落とそうと焚火の中に落とした拓一が、青い燐光を放って燃える泥を見て恐怖を抱いた点からも、その困難さが伺える描写と言えるだろう。

また、作中では吉田村長や拓一ら復興派と、反対派の間で揺れている過程も同時に描写されており、終盤で拓一は反対派である四季堂達に絡まれた耕作を庇い、下腿骨を折られて歩きづらくなってしまう。

それでも拓一の信念は揺るがず、遂に蒔いた粃が稲の実を結ぶまでに至る。

一方、作中序盤の耕作は、どちらかと言えばやや反対派寄りのリアリストとしての描写が多く、兄が成し遂げようとする上富良野の復興や、人前で涙ひとつこぼさない母、佐枝に対する不信心から内心苛立ちを募る一面が伺える。そんな彼の心境の変化のターニングポイントはふたつある。

ひとつは前述する反対派に絡まれた自分を、拓一が庇って下腿骨を折った出来事。もうひとつは、涙を見せなかった佐枝の姿を見た事で、母も泥流で亡くなった良子達を忘れていなかった事を悟る出来事である。どちらも拓一と佐枝に抱いていた不信心を解くきっかけとなり、耕作もまた兄の夢に共感し手伝うようになる。

かくして、数多もの逆境に諦めなかった兄弟の努力と飽

くなき姿勢は、遂に反対派の言葉に屈せず、噴火前のように田畑に稲が実る大地を蘇らせたのである。

第二節・深城からの決別

ここまでは拓一の復興への歩みと、それに伴う耕作の心境の変化について述べてきたが、ここで「泥流地帯」から持ち越した課題がある。それは、深城鎌治に対する一連の決別である。

本節では深城節子および曾山福子を中心に、彼女たちがどのように彼の悪意から決別したのかを語る。

深城の悪意は泥流があつても変わらず、むしろ拝金主義と上富良野の復興を否定する姿勢は泥流以上に黒く、自ら経営する遊郭「深雪楼」を一時的に旅館にして儲け、ぼったくりとしか言いがたない料金で料理を提供するのはまだ序の口で、復興を目指す拓一を泥流様々だと小馬鹿にし、更に吉田村長の妨害に糸を引いたり、一貫として悪意を振り撒いている。

では彼女たちは如何にして、深城の悪意から逃れる事が出来たのか。まず節子から述べてゆきたい。

節子のターニングポイントとしては、節子の母、ハツが突如として深城から横領をでつち上げられて深雪楼を追い出された事である。しかも事もあろうに、深城は結託してい

る博徒の親戚を後妻として迎える為に、ハツの追い出しにかかったのだ。この時節子はハツを庇い旭川へと移る事となった。

一方、福子のターニングポイントは、そんな節子から深雪楼からの脱出を持ち掛けられた事である。前述したように福子は父親に遊女として売られ、更に泥流で家族そのものを喪い、残されたのは父親が残した膨大な借金だけである。それ故に、持ち掛けられた福子は困惑し、脱出に躊躇してしまう。

しかし節子の説得や拓一と耕作達の援護によって、一步を踏み出した彼女は、節子たちや関係者の根回しによって遂に「自由」を手にする。

ラストで鳴り響く汽笛と白いハンケチは、深城からの勝利宣言でもあり、同時に決して黒く染まらない自由を、福子がよくやく手に入れたという証左であるのは間違いないだろう。

第三節：全体の総括

総括すると、「泥流地帯」が「築き上げてきた安寧の破壊」の物語であるならば、「続泥流地帯」は「安寧と心の再生」の物語だと言える。

かつてそこには、先達が築き上げた故郷があった。

しかし泥流は親兄弟や彼らが開拓した大地を、そして思ひ出をも黒く塗りつぶし破壊していった。拓一と耕作、節子や福子にとって喪つたものはあまりに大きく、残された課題は多かった。

ある者は傷つきながらも、稲が実を結ぶ様を見届け、またある者は今日も教壇に立ち、次世代への導き手となって教育の最前線に立つ。

ある者は産婆と看護婦として、旭川の地で命に携わる職業を選び、ある者は閉ざされた世界から脱出し、遂に自由を得る事ができた。

彼らを縛っていた鎖は解き放たれた。そこにあるのは、それぞれ目指してゆく方向性と可能性、ただそれだけである。
(了)



「泥流地帯」の感動と教訓を未来へ

湊 孝康

(1)「重いテーマ」に感謝！

三浦光世さんの「三浦綾子秘話」(平成13年)によれば、道新日曜版に掲載が始まって間もなく、編集者から「テーマが重すぎる。『泥流の村』くらいでどうか」という指摘があったそうです。しかし、お二人は、「続編もあって、村だけに終始するわけでもない」として、そのまま進めました。もともと、この小説は、光世さんが、提案したもので、綾子さんは、しばらく慎重だったようです。これらの経過があつて、今日見られるような大作ができ、わたしたち読者にとつても、感謝でいっぱいです。

綾子さんの決断には、道新の熱心な要請のほかに、あの大爆発による惨事とそこで生き死にした人たちの苦勞を思えば、断わることが難しかったのでしょう。

さらには、「新約聖書」の中に、「本人の罪でも、親の罪でもない。ただ神のみわざが、彼の上に現れるためである」(ヨハネによる福音書第九章一〜三節)という言葉があり、光世さんが、この聖句を引用し綾子さんの書く心を惹きだし

たものと思います。

これは、イエスが、道を通りかかったときに、生まれつきの盲人を見て、弟子からの問いに答えた教えです。綾子さんの永いながい闘病生活において、「何かの祟りではないか」と言われたこともありま。それだけに、この言葉が大いに自身力になり、慰めや希望になった、と言われています。私たちの日常生活においても、例えば、「我が家だけに、どうしてこんなに不幸や苦しみが続くのだろうか」という時期もあります。私などは、たった一年半のうち五人もの肉親を失いました。

聖書について、もう一つだけ紹介します。旧約聖書の「ヨブ記」には、「神の前に全く正しいヨブ」という人が、瞬く間に大量の家畜を略奪され、災害によって子女が死に、自らは大変な病気になるという、「不可解」ともいふべき困難が例示されています。

光世さんは、「このヨブ記を下敷きに、十勝大爆発を書いてほしい」と綾子さんを説得しました。クリスチャンとして分かり合えたものと思います。早速、事前準備です。お二人は、実地調査や創作の構想建てには大変な苦勞があつたようです。

家族構成にも光世さんの家族歴を参考にするなど、夫婦に

よる「二人三脚」のコラボは厳しいながら順調に進んだよう
です。

「人生における苦難を、どのように受け止めるか。この小説
のテーマも、まずまず盛り込んでいる」という光世さんの確
信に、読者は、きつと、わくわくしてこの大作に挑み、そし
て、一人一人がそれぞれに教訓を読み取ることができたで
しょう。

（2）「正しい者には災いが多い」

小説のテーマである、「人生の苦難をどううけとめるか」
という課題に対応する言葉として、本項目の聖句が本書の
多くの個所で引用されています。

この言葉は、旧約聖書の詩篇第三四篇十九節にある言葉
であるが、新約聖書にも苦難という言葉が多くみられます。
神は苦難を恵みとして与えているという表現もあります。

例えば、ある程度有名な「ローマ人への手紙」(第五章二、
五)からの抜粋があります。

そこでは、「……イエスにより今立っているこの恵みに信仰に
よって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望を
もって喜んでいる。それだけでなく、患難をも喜んでいる。

なぜなら、患難は、忍耐を生み出し、忍耐は、練達を生

み出し、練達は、希望を生み出すことを知っているからで
ある。そして希望は、失望に終わることはない。なぜなら、
わたしたちに賜っている 聖霊よって、神の愛がわたしたちの
心に注がれているからである。」と明記しています。

聖書の話は、この程度にします。大事なことは、綾子さん
は、新旧聖書の隅々まで読み込んだうえで、小説の中でも、
決して難解な言い回しをせずに、平易な言葉でそれらの趣
旨を取り込み、普通に書き込んでくれています。したがって、
一つ一つの文章に、深い味わいがあるのです。光世さんの
「小説秘話」によれば、前掲の道新編集者から「何か勘違い
してはいませんか。少年少女小説をお願いしたのではない」
と苦情の電話がきたそうです。綾子さんは、『氷点』は小五
が読める程度を目安にした、という。本書もせいぜいその程
度ではなかったか。「文書に凝るということは殆んどなかっ
た。」と書いています。

加えて特筆すべきことは、現地の取材がよく行き届いて
おり、それがしっかり頭に整理されています。ですから、十
勝岳大爆発に伴う描写が圧巻です。登場人物を入れ混ぜ
ながら、すさまじい山津波、そしてその轟音等が、真実味
をもって描かれています。さすがの光世さんも、「実に克明
に、よくぞここまで書いてくれた。とにかく、私はこの小説

を綾子に書かせたことが、正解だったと思う」と述懐しています。

(3) この小説で私が感動した三場面の紹介

(3) 1 (耕作の妹) 良子の死

「ようやく七、八人の遺体を確認した頃には、耕作は軽いめまいをおぼえた。頭の芯が、ずきずきと病む。修平(耕作の叔父)の日に焼けた手が、次の死体の白布にのびた。髪の毛で女と知れた。耕作の胸が異様に騒いだ。修平が白布を取り除いたその途端、血の氣のない青ざめた鼻から、血がたらたらと流れた。

「おう！良子じゃないか!？」修平が叫んだ。

額にも鼻にも傷がつき、顔がむくんでいる。すぐに良子とは判別できない。が、三人は今日、丘の上で消防団の男に聞いてきたのだ。

「そうかね、お気の毒にあんた方、死体収容所に行くんかね。世には不思議なことがあるもんでな。親兄弟が行くと、鼻から血が出ることもあるんだよ、血がねえ……」

まさかと思って聞き流して来たのだが、確かに今、三人は、鼻血の出るのを見たのだ。

耕作は、思わず死体の方に手をかけてまじまじと顔を見た。

傷つきむくんだ顔に、母親似の良子の面影はない。唇の形が、似ているといえはいるだけだ。(以下、略。「泥流地帯」P411～412)]

このあと、本人確定させるための良子の身体に何かしるしはないか、調べた。耕作より

「良子なら、右の耳たぶに、ほくろがある」と答え、三人で探した結果、果たして、右の耳たぶにほくろが、確認された。

まず、修平が、良子をかき抱き、ついで、貞吾が叫び、耕作が良子の名を絶叫した。耕作は、幼いころから、良子の耳垢をとってやったものだ。ついこの間も、良子は、耕作の膝にかわいいほを乗せ、じつと耳垢をとらせていたのだ。今耕作は、ポケットから叔母からあずかった櫛を使って、髪の毛を黙ってとかし続けた。

一昨日、函館で髪の毛の修行中の母、佐枝から手紙があった。それを読んだ良子は顔を真っ赤にして喜んだ。「わたしも旭川まで迎えに行くといつて、幼い時に別れたままで、物覚えついてからは会っていない母への再会に、夜になっても、眠れず、「母ちゃんどんな顔、写真と同じ？」などと言って遅くまで起きていた。修平は、かわいそうになり、むくんだ良子の肩をかき抱いて泣いた。耕作は、山の大爆発の様子を兄の拓一と偵察に行った時、良子は、谷間の家から大きな

声で、「何か見える!？」と心配そうに山に向かって叫んでいた、あの姿がいじらしく脳裏に映り、胸が張り裂けそうに切ない思いに駆られたのです。

その後、祖父市三郎、祖母キワ、嫁いだ姉の武井富が次々に死体で発見された。祖母母と良子三人を救助しようとして濁流に飛び込んだ兄の拓一だけは、奇跡的に大きな桂の二股に引つ掛かり助けられた。三人の自前火葬の火をつけようとした瞬間に馬に乗って駆け付け、劇的に、亡くなった祖父妹の三人に離別の再会ではあるが、会うことができた。

大正15年7月、上富良野尋常高等小学校の屋内体育館において犠牲者百四十四名の追悼式が挙行された。五月二十四日の夕方、突然、大音響とともに、黒い雲が垂れ、雨にかすむ視界の中で、沢の間から、黒い小山がぐいぐいお押し寄せ、一分と経たないうちに、祖父母や良子を飲み込んでしまった。荒れ果てたあの大地が、あれから数年たって、青い稲穂が育つとは、だが、予測できたであろうか。上富良野の逞しい農民の開拓魂は、これからも歴史の教訓として永く語られることと確信しています。

(3) 母佐枝の「苦難」の意味

「母の傍らに、縫物が広げられている。その母が泣いている。耕作は、隙間から、のぞく。母は声を立てずに泣いている。前掛けで涙をふくと、母は、手を組んで頭を垂れた。祈っている。祈りながらも、頬に涙が零れ落ちる。

耕作は胸が詰まった。今までに、このように泣く姿は見たことがない。泣くことのない母を、ひどく不満に思っていた。母さん、じつちゃん、ばつちゃん、良子のためになぜ泣かないのか。

近頃、耕作は、なぜヨブ記が、難解なのか気が付き始めていた。理由はいろいろだが、何より自分自身の中に、ヨブの友人たちと同じく、善因善果、悪因悪果の考えが根強くあつたからだと思う。「文芸評論家の佐古純一郎氏は、「こまでくると、耕作と作家の三浦さんが重なり合ってくるのを感じるという。(昭和五十七年七月、続泥流時代「解説」)

「母さん、人間の頭では、計り知れない何か隠されているんじゃないか。母さんは、教会に住み込んでいたから、いろいろ聞いているんじゃないか。」

「母さんも、いろいろ考えたし、お話も聞きましたよ。話してくれた牧師さんは、『神は愛なり』だって。そのことだけを知ったらいいって」

修平は、驚いていった。「神は愛なり。じゃ、どうして災難を下すんだ、姐さん」

「……人間の思い通りにならないところに、何か神の深い考えがあると思います。ですから、苦難にあったときに、それを災難と思って嘆くか、試験だと思って奮い立つか、その受け止め方が大事ではないでしょうか」

「しかし、正しいものに災いがあるのは、どうしてもわからぬえ」と修平。

拓「わかってても、わかんなくとも、母さんの言うように、試験だと受け止めて、立ち上がったときにね苦難の道がわかるのでなからうか。そんな気がするなあ」
明るい声だった。耕作も深くうなずいた。

佐古氏は言う。「三浦さんが、この小説で、読者に訴えたことは、この拓一の明るい声だったのではないか。もし、私が『泥流地帯のテーマは何か』と聞かれたら、それは、〈苦難の意味〉ということではないか、と答えたい」と結んでいます。

(3) 3 深雪楼(みゆきろう)福子の開放

上富良野発、早朝一番の旭川行きの汽車が、迫ってくる。煙を吐きダイナミックに収穫中の田圃を駆け抜ける。貨車の後ろが郵便車で、その後ろに客車が続く。今、赤いマフラ

ーか白のハンカチが車窓から振られる。町長はじめ、たくさん近隣の農家の皆さんが稲刈りの手伝いに参加し賑わいを見せている。

汽車は、ついに至近距離まで近づいた。耕作も、拓一も緊張して車窓に注目している。

白いハンケチならば、成功。赤いマフラーならば、不成功です。あつという間の瞬間ですが、耕作の目の前を、確かに、白いハンカチが振られて過ぎました。

拓一の友人曾山国男の妹福子は、耕作の同級生でもあります。福子には、拓一がほのかに好意を示しています。福子は、父親蔵蔵が酒と博打で大きな借金を作り、やむなく女郎屋の「深雪楼」に身受けさせられます。深雪楼の代表の深城は、あこぎな商法で蓄財を重ね、今では、村の有力者に上り詰めて居る。娘の節子は、家を出て、自立しているが、実は、ひそかに耕作に愛の告白をし、旭川の医者、女性の社会運動家など有力な人脈もあり、活動の裾野は幅広い。東京の女学校も出て、そちらの友人も多い様子。

永年福子の脱出計画を練ってきたが、今日は、これを実践する日。今ある福子の借金は、拓一、国男、耕作などが中心に長期で返済し、当面の深雪楼との「借金」については、旭川の有力者に借入れ依頼の要請をするなど準備が進ん

でいる。

旭川への脱出以降は、すでに、居住場所も決まっており、状況次第では、社会運動家との連携も進めていくことになるという。

とにかく、節子は、自由活発な女性であり、実家の「人売り」、「不当な金稼ぎ」に堂々と反旗を示し、若い女性の権利や生活と自立を守るために活動するという気迫は、綾子さんの求めようとした生きがいに合致するのではないかと共鳴しています。

(4) 後記

今までに本書をそれぞれ数回読んだに過ぎません。私自身のことを考えれば、高齢ではありますが、もっと読み込んで、先に進みたい。

例えば、巨大災害と住民意識の変遷、災害と農業復旧、農業圏における子供の育成法、ICTの効果的な運用の方向性(個別、地域別)、制度の不備、学校の機能、地域間連携、衣服・食べ物・住居のファッションなどのような多様なジャンルに優先順位をつけ、三浦綾子さんの「泥流地帯」との情報リンクを試み、そこから得られたアプリや教訓を次世代に生かしていけるか、その可能性を探りたいと思う。

〈参考資料〉

「泥流地帯(上・下)」三浦綾子著 新潮文庫

「三浦綾子創作秘話」綾子の小説と私」三浦光世著 主婦の友社

「映画化プロジェクト ニュースレター第1号」第6号」

「上富良野 News 自然・歴史」一社かみふらの十勝岳観光協会

「かみふらの」

www.town.kamifurano.hokkaido.jp/index.php?id=2137

以上



『泥流地帯』、『続泥流地帯』を読んで 私の雑感

中村 愛

今年上富良野町に引っ越してきて、改めて読んだ泥流地帯と続泥流地帯。町を散歩するとき、この物語に思いをはせる。フィクションであり、限りなくノンフィクションと言えるこの作品。広大な景色の中、地道に日々を生きる老若男女の姿が丁寧に描かれているためか、字だけの本を読んでいるのに、まるで朝ドラを見ている気分になる。

泥流地帯には、ときおり風が吹く。この町の爽やかな空気を体感しているからかもしれないが、私にはそれがとても効果的に感じ、作者の三浦さんがあえて吹き込んだものだと思っている。汽車が通り過ぎる描写もそのひとつで、人々が繰り広げる様々な出来事を余所に、安定したのどかな風景を感じさせる。また、拓一が馬に乗って登場する場面や走り去る場面には、風とともに緊迫感が走る。節子が登場すると、まるで晴れの日にサーッと風が吹きぬげるかのように、生きの良い場面になる。一方、佐枝の場面はまるで風がない。この緩急が絶妙に作用することで、作品にさらに臨場感が出て、物語に引き込まれた。

十勝岳噴火にともなう大惨事の描写は壮絶で、火山のそばに住むことになった者として、心底ためになった。自然現象の面だけでとらえると、噴火パターンにおいて泥流という

現象は決して大きな類のものではないと今まで私は認識していた。しかしながら、人々の生活を巻き込むと、ここまで破壊的で恐ろしいものになるのだということに気づき、息をのんだ。そして、泥流という大きな一つの事実に対するとらえ方やその後のふるまい方が、こんなにも人によって違うことを知った。一方で、報いについてはほとんどの人が同じように考えている。心がけのいい者が助かり、そうでない者は罰が当たるといふのは今でもよく言われることであるが、災害時にそれを当てはめてはならない。

ところで、この作品には全世代の人々が登場し、それぞれの人が実在しているかのように人間味が滲み出ているので、面白い。私は、耕作と節子に現代的な雰囲気を感じ、拓一と福子には奥ゆかしい古風な雰囲気を感じている。そして、蛇足だが、私の頭の中では、市三郎が武田鉄矢さん、吉田村長が大泉洋さんに置き換えられている。

読書中、5歳の息子が「声に出して読んで」と読み聞かせをせがむことがある。「こうきくくんは？」とか「坂森」がろうくんは？」とたびたび尋ねてくることもある。子どもが多く登場するから、なんとなく親近感が湧くのかも知れない。上富良野で育つことになった我が子も、いつか自力でこの本を読み、泥流地帯を感じる日がくるだろう。そのとき、どの登場人物に共感するだろうか。何を思うだろうか。



泥流地帯全編を読んで

石川 洋美

北海道の中心に位置する上富良野。十勝岳を眺望とする山岳地帯で、思い浮かぶのはラベンダー畑に代表される美しい風景だ。

時は大正15年5月24日、十勝岳の大噴火による山津波で、そこに住まう144名が一瞬にして犠牲になった。その史実に基づいた物語で、父親の夭折により、母親とも別れて暮らし、幼少期から祖父母に育てられた石村家の兄弟姉妹、小作農の貧しい家庭ながらも家族で助け合い、慎ましく暮らしている。

主人公は頭脳明晰で後に教師となる弟の耕作だが、対照的な性格で行動力のある兄、拓一の影響を強く受けながら成長して行く。恩師の菊川先生や幼馴染の福子、級友などに囲まれた楽しい学生生活が生き生きと描かれている。

母親が帰って来ることになり、耕作も代用教員になり、やつと暮らしが良くなると思った矢先に大惨事が起きた。目の前で祖父母や妹、畑、愛馬など全ての物が一瞬にして泥流に流されてしまう場面は壮絶で、自然への驚異の念と人間の無力さを感じた。

偶然にも泥の中から耕作が助け出した福子と、奇跡的に生還した拓一。

兄弟の恋愛感情の妙も巧みに表現されていて物語に彩を

添えてくれる。

愛する家族を失い、多くの悲しみと困難に見舞われながらも、荒れ地の復興に精力的に取り組む拓一の姿。その時諦めなかった人々がいたから今の美しい風景があるのだと感謝したい。

兄弟の会話の中で「まじめに生きている者が、どうしてひどい目にあって死ぬのか？ 邪なものが栄えるのか？」の問答で「現実には決して善因善果、悪因悪果ではないんだなあ。」という言葉が心に残り領いた。

母親の佐枝が読むように示した聖書のヨブ記を私も読んでみたが、結局は神の前では正しい人は一人もおらず、ただ信仰によつてのみ義とされていることが分った。自分の行いが正しいと思うのはある意味で傲慢だとも思った。

色々な苦難があった時に、それを試練だと受け止めて立ち上がろうとする拓一の精神性に筆者の三浦綾子さんの意図を感じた。

佐枝が兄弟に話した「神は愛である。」というメッセージと石村家を囲む人々が織りなす物語の隅々に「愛」を感じた作品であった。

壮大な長編小説だが、この物語が映画化されることを楽しみにして上映される時には白いハンカチ持参で観に行きたいと思う。



「泥流地帯」を読んで

三浦 倫子

平均寿命を全うできたとしても、確実に残りの時間の方が少ないという事に気付いて以来、これまでにしたいと思ってきた色々を少しずつやってきました。

その中のひとつに「三浦綾子さんの作品を少しでも多く読む」があり、まずは「Twitter」にて三浦綾子さんファンの諸先輩方におすすみを問いかけてみました。

私が三浦綾子さんの作品を読みたいと思った理由は大きく2つあり、1つは同じ宗教を信仰しているという事、そしてもう一つは「漢字で書けば名前は1文字違い」だからです（畏れ多くも……）。

家で過ごす時間がこれまでより格段に増えた事もあって、Twitterでおすすめいただいた本を順番に買い揃えて少しずつ読み始めました。最初はちよつとした空き時間に読んでいたはずが「集中して、他の事を気にしないで読みたい!」と思うようになって、ある時は夜、またある時はカフェに本を読むために行つて……というこれまでにない読書スタイルへと変化した事は自分でも驚きました。

やがて Twitter で作文コンクールの記事を目にし、公式

さんから引用RT やリプライをいただいたりした事もあって「絶対に書こう」と意気込んでおりました。

三浦綾子さんの作品を読んでから、念願だった旭川六条教会の礼拝へと出席する機会が与えられ、更には三浦綾子記念文学館へも訪れる機会に恵まれて、私の心も脳内もすっかり三浦綾子さんの作品にどっぷりと浸かっているこの数か月。「泥流地帯」と「続泥流地帯」を読み始めたのは、8月半ばの頃だったかと思います。

これからやってくる秋に思いを馳せながら「霜がおりたぶどうは甘くておいしい」という事を、私もいつ誰に聞かされた事なのかもう思い出す事はできないけれど、作品中にこの表現をみつけた時に「そうだったなあ」とちよつと懐かしい気持ちになりました。

菊川先生が「なだれに気を付けて帰るように」と子供たちに声をかけるシーンでは、その地の自然の厳しさがその一言に凝縮されているように感じました。私は札幌出身で札幌とその近郊の街で育ちましたので「なだれ」の心配はした事がなかったからです。「泥流地帯」の舞台となっている日進の部落は、それほどまでの環境なのだと……その中で子供たちは山道を歩いて通学し農作業を手伝いながら暮らしているのだと……私の経験したことのない大自然の山の中での出来事なのだと。様々な想像の世界に引き込まれま

した。

学校の勉強には興味がなかった私のような者も含めて、高等学校までは多くの人が進学する時代に生まれ、読みたい本があれば書店で買い夜遅くまで読むこともできて、何かわからない事があれば手元のスマホやパソコンで何でも調べられる今を過ごしている私には、ひとつ一つが新鮮な事でした。こうして改めて考えてみると、今の暮らしはとも贅沢なものですね。

勉強する時間が足りないと感じていた耕作から見ると、それはそれは「その暮らしかわれや」っていう気持ち以上になるのではないかと感じていますし、拓一に言わせたら「そんなに恵まれていると思うのなら、もっと大事に時間を使わないとな」という事になるのでしょうか。

時間は限りある資源だとわかっていながらも、私自身はいつもそのやりくりがうまくできていないように思いますし、また、自分が拓一や耕作の年齢だった頃にはどんな事を考え生きていたのかも、すでに記憶が曖昧です。それでも、苦難や報いなんていう事はきつと考えもしていなかった事と思うのです。目の前にある部活やアルバイト、友達との趣味活動に動しむ毎日……それでいてどこか満たされない日々だった事をうつすらと覚えています。今思い返せば、暮らしやお金の心配や家族の誰かの病気の心配を一切する

事もなく、ただ学校とアルバイトとに通いさえすればあとは何もなくて良いというのは、幸せな事だったのでしょうね。

高校1年生の時に、学年全員が参加する宿泊研修が現在の大雪青少年交流の家で行われ、例年であれば十勝岳の登山をする予定となっていたのですが、私たちが訪れた年は入山禁止になっていて別のプログラムに置き換わりました。その当時は「登山がなくなってラッキー」としか思っておりませんでしたけれど、今となってはもう体力的にも行くチャンスはなさそうなので、登ってみたかったようにも思います。

この作品を読んで感じた事は、私の持つどんな言葉をもつてしても、文章に書ききる事ができません。コンクールの事を知って1か月以上前からずっと書くつもりでいたのに、とうとう締切の日がきてしまいました。

「作文……1文字も書けていない」という状況の3日ほど前の夜、「Writer」では公式のアカウントさんから「チラシの裏に殴り書きでも！何なら電話で口述応募でも！」と励ましていただき、あらためて立派なものを書くこうとしているから書くハードルが上がっているだけの事で、私が「泥流地帯」を読んで感じたありのままを書けばいいのかもしれない……：とようやく重すぎる腰を上げてパソコンに向かってい

る締切数時間前なのでした。

「綴り方は難しいからきらい」と言って書こうとしない、かつての耕作の受け持ちの生徒とまるで同じです。

立松 宏一

私は趣味でピアノを弾いているのですが、昨夜も「作文：…」と思いながらベートーヴェンのピアノソナタ第8番「悲愴」を練習していました。ちょうど「泥流地帯」の小説を購入した頃に練習を始めたこの曲は、きつとこれから先も弾くたびにこの小説を読んで感じたいろいろな事を思い出す事になると思っています。

最後に、この作文コンクールを企画してくださった上富良野町役場のみなさま、「Twitter」公式アカウントの中の方々、このような機会を与えてくださり本当にありがとうございます。大変に楽しく充実した時間を過ごせた事を、心より感謝いたします。



曾祖父の続泥流地帯を追いかけて

続泥流地帯に「三重団体でさえ、復興は無理だといち早く逃げ出す者もいる」という記述がある（村葬の章四）。恐らく曾祖父はその中の一人で、泥流地帯を読んでから私は負い目を感じてきた。

いまから69年前に死んだ曾祖父のことを私はあまり知らない。しかし、被災当時の曾祖父の年齢（満34歳）に自分が近づくにつれ、なぜ土地を手放して移住する決断をしたのか、そのときの思いを確かめたくなり、この10年あまり、わずかに残る記憶や記録を追いかけた。

想像の域を出ない部分もあるが、移住の背景として3つのことが浮かび上がってきた。1つは、泥流地帯にも書かれているとおり、当時村内には復興の是非について様々な疑惑が渦巻いており、そこに嫌気がさしてしまったらしいこと。被災時尋常小学校1年だった大叔母（101歳で健在）は、協力してほしいと訪ねてくる人がいたことを覚えているという。

次に、人的被害はなかったものの田畑を泥流で失った中で、老親2人に子供4人を夫婦で養っていなければなら

なかったこと。

そして馬が好きで新天地で牧場をやってみたいという夢があったこと。夢があつての移住だったことに、私としては少し救われた気がした。

四十九日に行われた村葬では、受付係に曾祖父の名が見えるので、そのころまでは上富良野にいたようだが、夏のうちに上土幌の奥地に牧場の土地を借りて移住した。

しかし、牧場経営は馬が熊の被害に遭うなどして失敗に終わった。

米も食べることでできた上富良野の暮らしからは一転、困窮した生活の中、長男だった祖父は成人すると満州の陸軍病院に衛生兵として入営、次兄は航空士官を志した。終戦後2年あまり祖父はシベリアに抑留され消息不明となり、次兄はフィリピンで戦死。このときの曾祖父の悲しみは察するに余りある。

失意の曾祖父が最後に頼つたのは、泥流からの復興がかなったふるさと上富良野であつた。終戦後、上富良野に戻ったあとまもなく癌を患い、満59歳で没した。その25年後、私は上富良野で生まれ、耕作が進学を断念した旭川の学校にも通わせてもらうことができた。

災害の意味を問いかける「泥流地帯」は、ことあるごとに

読み返し、そのたびにいろいろなことを教えてくれる大事な小説である。それとともに、当事者として「泥流地帯」がなければこうして父祖の辿ってきた道に思いを巡らすこともなかっただろうし、これほど私が上富良野に愛着を感じることなかったと思う。そして何より、復興に力を尽くした人々には、感謝しかない。

泥流散歩④

「吉田貞次郎村長邸（開拓記念館）」



吉田貞次郎村長の自宅は泥流に浸かりながらも流失を免れ「上富良野開拓記念館」として上富良野開基百年記念として移設復元されました。

泥流災害からの復興だけでなく、後に衆議院議員として人々のために奔走した吉田村長の生涯が保存・展示されています。

【(続)「村葬」の章】ほか



「泥流地帯を読んで」

(ペンネーム) なお

大好きな富良野のラベンダー畑、美瑛の風景。何回か訪れるうちに、十勝岳噴火の話と三浦綾子先生の「泥流地帯」という小説を知った。

高校生の頃から三浦綾子先生の本は何冊か読んでいて、特に「氷点」は、読書をしている時に初めて涙を流した特別な小説。

でも「泥流地帯」はまだ読んでいなかった。やはり読み応えのある小説だった。人はどのように生きて行くか、深く考えさせられた。

一番印象的だった、泥流が襲って来て大切な家族を失った耕作と拓一の台詞。

「なあ、兄ちゃん。まじめに生きている者が、どうしてひどい目にあって死ぬんだべな」

「こんなむごたらしい死に方をするなんて…まじめに生きていても、馬鹿臭いようなもんだな」

「おれはな耕作、あのまま泥流の中でおれが死んだとして

も、馬鹿臭かったとは思わんぞ。もう一度生れ変わったとしても、おれはやっぱりまじめに生きるつもりだぞ」

耕作は、姉の嫁入りの為に進学を諦めた。その姉が嫁いだ家で幸せそうではなく、泥流にのまれて亡くなってしまった。理不尽だったに違いない。

大切な祖父や祖母、なかなか会えない母ともうすぐ会えるのを楽しんでいた妹まで泥流にのまれてしまった。言葉に出来ないくらいの悲しさと悔しさがあつただろう。それでも、残された者達は生きていかなければならない。自然の猛威で酷い目にあつたけど、自然の恩恵を受けて食べていかなければならない。働いて食べていかなければならない。人によく見られようと真面目に生きて行くのではない。自分に自信を持って自分らしく生きる。耕作もよくわかっていたと思うが、拓一のこの台詞は兄として逞しい言葉だ。

「泥流地帯」は、耕作から見る兄の姿や、理不尽な運命でも健気に生きる登場人物の姿を通して、人の生き方、強さが描かれた物語だと思う。

映画では、拓一と耕作と福子と節子の恋愛、福子の運命、噴火の災害、そして人として大切なことは…というテーマを投げかけて欲しい、と思う。



泥流地帯を読んで

(ペンネーム) 原 みづき

「こんなに真摯に生きた人達がいたのか。読み終って先ず感じた事だった。「正直者はばかをみる」と思う耕作の気持ちは、私にはわかる。何故一生懸命生きている者が、報われないのか。小器用に立ち回る者が得をするのか。その様な事が現代でも見聞きするからだ。」

でも回りの人々の優しき、強さが耕作を支え、大きく遅しく成長させていく過程(様子)に引き込まれた。特に拓一。彼の人間性と弟への愛を感じたのは、馬の青が死んだ時。そして泥流に敢然と向かって行った時の姿。何故あの様に一途に、ひたむきに人を思えるのか。それは市三郎とキワの生き方、嫁、孫達に寄せる思いが無言の教えになっていると感じた。終りの方で拓一の生還シーンを読み少し救われた。

以前何度か訪れた上富良野の町。静かな中に色とりどりの花が咲き乱れる。その町にこの様な悲惨な歴史があったとは。十勝岳麓の田園風景を車窓から眺める。「日進」という地名を案内板で探す。柔らかない風が吹き渡っていた。

人はどう生きたら良いのか、という普遍的なテーマ。それを改めて考えさせてくれた物語だった。

泥流散歩⑤ 『泥流地帯』文学碑」



昭和五十九年、十勝岳爆発災害復興六十周年を記念し、草分神社の境内に「泥流地帯文学碑」が建立されました。噴火記念日である五月二十四日の除幕式には訪欧中の綾子さんから音声メッセージが寄せられています。記念碑には綾子さん揮毫の題字と小説の一節が刻まれ、苦難に満ちた開拓と奇跡の復興を成し遂げた先人たちの不撓不屈の精神を語り継いでいます。

児童生徒の部

無報酬の努力



上村 愛理

「ボランティア」。社会事業のために無報酬で働く人のこと。

「泥流地帯」は、数年前に私が暮らす町・上富良野で、一気にその名を馳せた作品だ。「泥流地帯」の映画化プロジェクトが町民の間で広く認知されるようになったことが大きな理由だと思われる。しかし、私はこの時よりも前に、「泥流地帯」に出会っていた。

私がこの本と出合ったきっかけは、叔母の本棚であった。数多くの本が鎮座するその棚の中で、当時小学5年生だった私の目を引いた「泥流地帯」の四文字。棚から引き抜き何気なく頁を繰っていると視界に飛び込んできた「上富良野町」と「十勝岳」という二つの単語。どちらも耳に馴染んだ単語であったため、更に興味を掻き立てられた。そうして気づけば、上下巻を読破していたのだった。

「報われない」

本の帯に書かれていた言葉である。「泥流地帯」の主人公・耕作の家族は裕福ではないが、汗水垂らして労働に励み、懸命に生きていた。しかし、いつも「報われない」が重なっていくのだ。

「泥流地帯」を読み始めて間もない頃の私は、何かを成せば何か見返りを求めてしまうのが人間の性であり、頑張るイコール見返りがある、という考えを当たり前としていた。そんな私がこの本を読んで抱いたものは、「どうしてこんなにも報われないのだろうか。耕作たちは、こんなにも懸命に生きているというのに。」という苛立ちにも似た疑問であった。

しかし、耕作の兄・拓一は、私がこういった疑問を抱いているのもつかの間に、

「一年や二年で実らんのはわかっている。」と言ったのだ。たとえ頑張った末に結果がついてこなくとも諦めないのだ、と。

私は、良い結果が必ず出るわけではないと知った上で努力をすることができののだろうか。テストは、勉強をすればしただけの結果が出るため、努力する。部活の大会で優勝するためには更なる技術が必要だから努力をする。どれも、努力をすればよい結果に繋がることがわかっている上での努力だ。見返りを求めない努力とは、とても難しいことなのではないだろうか。

しかし、いままでの己の行いを振り返ってみると、つい先日学校の水のみ場の蛇口から出たままになっていた水を、人知れず止めたことを思い出した。そして、あの行為こそが見返りを求めない努力なのではないだろうか、と考えただとすると、誰も見ていなくても、開け放たれたままになっていた扉を閉めることも、床にぼつんと落ちていたごみを拾うことも、その考えに当てはまるのではないか。私が今まで何気なく行っていたことは、見返りを求めない努力だったのではないか。

「ボランティア」。社会事業のために無償で働く人のこと。見返りを求めない努力とは、ボランティアに繋がるところがあるのではないだろうか。私は年に一度、家族と介護施設の清掃ボランティアに参加している。いまとなつてはあの行いも、見返りを求めない努力であつた。

「頑張るイコール見返りがある」という私の考え方を、「見返りを求めない努力は素晴らしい」という考え方に変えてしまった「泥流地帯」という作品に出会えてよかったと、私は思っている。映画化するにあたって、ぜひ、より多くの人にこの作品を知ってほしい。



(合作) 関口 結花

立崎 希明

節子三十歳 耕作二十九歳

福子を助けてから八年が経つた。あれから拓一と福子はめでたく結婚して、耕作と節子も六年前籍を入れた。

「ただいま。」

「おかえりなさい、耕作さん。」

「今日も疲れたよー。」

「お疲れ様。今日のお米は拓一さんの田んぼでとれたお米よ。」

「米が届いたのか。」

「そうなのよ。それにね、お手紙も届いたのよ。読んでもいいかしら。」

「読んでくれ。」

節子は嬉しそうに手紙を開封した。手紙には、

『耕ちゃん、節子さん、お久しぶりです。お元気ですか。年末年始、うちに遊びに来ませんか。お義母さんと拓一さんとお待ちしています。 福子。』と書いてあった。

「福ちゃんからだわ。二人とも元気になっているかしらね。」

「元気にしているさ。だつてこんな立派な米が届いたんだ。」

「そうよね。」

節子は納得したような顔で頷いた。

「それじゃあ、冷めないうちに、拓一さんからもらったお米、食べましょう。」

そうだな、と耕作は頷いた。

夕飯を食べている途中、ふと、節子が口を開いた。

「ねえ、耕作さん？」

「あの日のこと、覚えている？」

耕作は首を傾げた。

「初めて会った日のことよ。耕作さんに石を投げられた日のこと。」

「うん、覚えてるよ。」

「わたし、あの日石をぶつけられて、今は良かったって思っているわ。」

「え？」

耕作は節子の顔をまじまじと見た。まだうつすらあの時の傷が残っている。それでも良かったというのか。

「あの後、耕作さんのおじいさんの所へ傷の手当てをしてもらいに行っただしょう？その時に、私の父が「嫁のもらい手がなかったら、どうしてくれるんだ。」って怒ったの。そして耕作さん、「おれがもらってやる！」って言うてくれたのよ。父は馬鹿にして笑っていたけれど、わたしはともうれ

しかったわ。」

節子は顔を赤らめてほほ笑んだ。

（節子はそんな風に思っていたのか。）

耕作は黙って節子を見つめた。

「でも俺は傷を負わせてしまつて申し訳ないと思っているよ。」

「いいえ。これは耕作さんに出会えたきっかけになった傷だから。わたしは気にしてないわ。」

（節子は優しいな。）

「なんだか、昔の話をしていたら、拓一さんと福ちゃんに会いたくなつたわ。」

節子は思いついたように言った。

「ねえ、耕作さん。年末に、ふたりに会いに行きましようよ。」

「そうだな。久しぶりに会いに行くか。」

「まあ、楽しみだわ。」

ふたりは嬉しそうに笑った。



感想と演じてみての手応え

(ペンネーム) ヘキサゴン・ペンタゴン

わたしは、上富良野に住んでいて高校二年生で初めて泥流地帯という本を読みました。それまで、その本の存在は知っていましたが、読まずにいました。初めて読んでこんなことがあったのか」と思いました。

耕作や拓一、福子や節子など色々な登場人物が、どんな人柄でどんな経験をしたのかがこの本を通してわかりました。耕作は兄思いのいい人で、拓一は自分より他人を思っていて、福子は自分を下に下げがちで、節子ほどの言葉も説得力がある。こんなに個人差があるとは思いませんでした。

ただ、誰が良くて誰がだめはありません。例えば、「拓一は他人思いでいいけど、福子は下げがちなところが無理」というのは福子だつて自分のことを何か意図的に下げているわけではないと思うのでそこは仕方がないと思います。気になることはあると思いますが、それも個性ということだとどめておいてください。展開が最後の方になると、誰が誰のことを好きかわかる場面があります。ちなみに、わたしの学校ではそれぞれの役を演じることになって面白おかしく演じました。わたしが演じた役は、耕作と福子(声は私ではない人がしました)で、別の班で国男も演じました。最

初は、正直「面倒だな」と思いましたが、演じているうちに楽しくなりました。耕作は真面目で兄思いな人なのですが、わたしが演じた耕作は、その本の中の真面目な感じではなく面白く、場合によってはしっかりするという感じです。変にまじめすぎたら、演じるのも嫌になってしまいそうだったので、このような独特な耕作にしました。演じてみて、この耕作は「頼りなさそうで実はしっかりしているな」と感じました。

とても面白い経験もできたり、泥流地帯という本の内容も全部ではないのですが知ることができたので良かったです。



心が強い拓一

(ペンネーム) ホロロ・キンチョ

私は、高校二年生の授業で初めて、「泥流地帯」を読みました。授業では二班に分かれて演じるという事に取り組みました。私は拓一の役を担当しました。演じる人によってその役の印象が変わっていてもおかしいです。最初はなんでこんなことをしないとイケないのかと思っていましたが、演じていくことで、キャラクターに感情移入していき、最後は楽しんでやっていました。

私は、泥流地帯に出てくる人物の中で拓一が一番好きです。拓一は自分の危険を顧みず家族を助けるために泥流に飛び込んだり、悲しいことがあったばかりなのに復興をしようとしたりと普通の人だったらできないようなことを当たり前のようにやっていたかっと思いしました。わたしはあきらめるのが早いので、少しでも拓一のように継続して何事にも取り組めるようにしていきたいです。

「泥流地帯」という作品は、明るい作品ではないですが、様々な人たちの心情・背景描写などがしっかりと描かれていて、読んでみなければわからない良さがありませんでした。わたしは泥流地帯という作品を聞いたことがありませんでした。授業でこの作品をやるときにタイトルを聞いて、

あまり興味を持ちませんでした。しかし、いざ読んでみると、自分が持っていたイメージをいい意味で裏切ってくれました。泥流地帯に出てくるキャラクターはみんな人を思いやる気持ちがあつて、とても心に残りました。この作品に出会えてよかったです。

泥流散歩⑥ 「上富良野小学校」



分教場を卒業した日進の沢の子供たちが通った尋常高等小学校（現在は「上富良野小学校」）。

ここでは耕作が学び舎として、また職場として長い時間を過ごしました。

現在も五百人以上が在籍する上富良野最大の学校は平成二十六年に十勝岳を正面に仰ぐ開放的かつ近代的な造りに生まれ変わりました。

【(正)「矢車」の章ほか】



感想地帯

白田 貴志

わたしは高校の授業で初めてこの『泥流地帯』を読みました。上富良野高校に通っているということで、より、イメージができる作品で、楽しみながら読むことができました。

この文では主要人物について、自分なりに気付いたことを書いていこうと思います。

まず、物語の主人公である石村拓一のイメージは、聖人だなどと思いました。理由としては、自分のことより、家族や他人を思い、行動するシーンが多いと思ったからです。手先が器用で、大工仕事も難なくこなす、良いお兄ちゃんだなと思いました。ただ、恋愛面においては、思いを馳せている福子に対して、深雪楼から助けたいと思い、お金を貯めていくのは、ただの自己満足なのではないかと思うところも多々ありました。主要人物の中では聖人かもしれませんが、ただの自己満足野郎なのかもしれませんね。

次に、弟、石村耕作について。一度読んだ時には、頭がよくて、兄思い。大人になって小学校の先生になったときにも、生徒を思い、良い先生だなど思いました。しかし、この人はとても優柔不断だということに気が付きました。何かを決める時も、どうしていいかわからないという心情があったり、

福子が好きなのか、節子が好きなのか、最後まで迷ったりしていたイメージでした。

次に曾山福子です。この娘は性格がよくて、

優しさが前面に出ているイメージでした。半面、優しさが弱気となり、ヒステリックになる人だとも受け取れました。小さなころから、耕作に白い石を渡すなど、耕作に気がある様子でしたが、結局は拓一と結ばれて、驚きました。

最後に深城節子です。節子は、作中屈指の聖人です。父の深城がよい人間ではないので、娘として苦労があったにも関わらず、真つすぐで、終始かっこいい姉さんというイメージでした。恋愛面でも、耕作を小さいころから思い、耕作が優柔不断でしたが、結果的に結ばれることになり、思いの強さを感じました。

全体を通して、登場人物の細かな心情や動作を描いているので、ある程度想像しながら読める作品だなど思いました。私はこの時代のことを想像することも難しい年齢ですが、それでも、日々を生き抜く強さや、人々の営みが想像できる素晴らしい作品でした。



夢追人と太陽の花

(ペンネーム) 鈴ノ花 水蓮

北海道上富良野高校生徒玄関。

「おいーちよっと待ってくれ！」

生徒たちが帰宅し先生方しかない夕暮れ時の校内に一人の生徒の声が響き渡りました。

「あん？んだよ？」

「本当に辞めちゃうのー！明！」

「興味ねーんだよー！話しかけんな。」

生徒玄関には、言い争う二人の高校生の姿がありました。少し髪が長めで中性的な顔立ちをした少女ともう一人は、どこか冷たい目をしている青年でした。

「いーまで頑張ってきたのにどうして！」

「……あきた。」

「あきた?!」

その言葉を聞いたロン毛の少女は、青年につかみかかりました。

「ふざけないで！……ここまでやってきてそりやないでしょ！」

「……。」

少女は、青年の制服をつかみ、涙を浮かべながら声を荒げました。

「べっつこっつ。」

少女の綺麗な青色の瞳から涙があふれています。しかし青年は、少女の腕を振りほどき走り去っていききました。青年の後ろ姿が学校の曲がり角を曲がっていくのを、少女は涙を流しながらただ見つめていました。

翌日、少女は泣きそうな顔を浮かべながら登校してきました。

「え？」

いつも太陽のような笑顔を浮かべながら登校してくるはずの少女の元氣のない顔にクラス全員が目进行驚いています。

「どうしたの？向日葵？」(ひまわり)

彼女の名前は、石村向日「いしむら ひま」

愛称は、向日葵。そんな向日葵を心配し友達が声をかけました。

「ひつう……う。」

さきほどまでクラスメイトに心配させまいとこらえていた涙が向日葵の目からあふれ出しました。その光景をみてクラスメイトたちは、あたふた、あたふたし、

「えーえーどうしたの！」

声をかけた友達も、突然のことで、テンパリ出すと……、

「もー突然泣くんじやないよ……。」

泣いている向日葵に一人の女子生徒がハンカチを差し出しました。

「ふえ。」

向日葵と友達は、女子生徒の方を見ました。

彼女は、深城花、髪が長くとてもきれいな見た目をした女性でした。

「ほらー立ちなさい！肩貸すから。」

そう言うのと花は、友達と肩を貸して向日葵のイスまで連れていきました。

イスまで連れていくと花は、泣きじやくって、うつむいている向日葵の顔を見つめました。

「で？何があったのよ？」

「ひつく。」

花が聞くと向日葵は涙を拭いて一生懸命口を開きました。

「実は……。」

それから、数分、泣きながらも向日葵は昨日の事を話しました。

どうやら向日葵と言いつづけていたのは、向日葵の所属している演劇部のメンバーの一人で、向日葵の幼馴染である、明と言う青年でした。

「なるほどね。」

話が終わると花は、納得したような声をあげました。

「つまり……せっかく最後の舞台として地元が舞台である『泥流地帯』を学校祭でするのが決まったのに、明が突然やめるっていいでしたと。」

「ひつく……うん。」

「突然やめるって言われて私、止めようとしたんだけど……。」

「とりあつてくれなかったと。」

「なによ！それ！」

先ほど向日葵の話を聞いていた友達である花野夢（はなの ゆめ）が教室全体に響き渡るほどの声をはりあげました。

「あきた！？なにそれ！そんなただのチームのこと考えない自己満足じゃん！」

そう言う夢は、ズカズカと教室から出ていこうとしました。

「どこにいくのよ！」

花は、夢の腕をつかみました。すると夢は振り返りました。

「明のところに行つてくる！」

「なんで？」

「一言言つてわからせてやるわ！」

夢は、花の手を振りほどき教室を走つていきました。

「あーちよつと待ちなさい！」

「向日葵！行くわよ！」

「う……うん。」

「たしか明は、隣のクラスだったよね！」

そうして二人は、夢の後を追い明のいるクラスに乗り込んできました、しかし、

「え？休み？」

明は、この日偶然休んでいました、普通ならここであきらめるところですが……。

その日の夕方三人は、一緒に明の家に向かっていました。

「にしても……」

「？」

「どうしたの？向日葵？」

「なんで突然あきたなんて言い出したのかしら。」

「たしかに変だよ、だって明って将来声優になりたいとかで演技するのめっちゃ好きだったのに変だよ。」

「花は、なにか知ってる？」

「うーんそういわれても、弟君からも何も聞いてないしな
ー。」

「そっか。」

「たしか弟君って頭良くて……。」

「そう！しかも落ち着きがあつて優しくてさ。」

「あゝそう。」

「ちよつと何で話切るのよ！」

「だって花さー！弟君好きだからデレられても困る！」

「そんな。」

「それだったら去年の向日葵だって！」

「え？」

「明の事好きなくせして、いつもいつも！私には似合わないからって寂しそうな顔してたでしょ。」

「そ！それは！」

突然の発言に向日葵は、顔を赤らめました。

「まったくーあんな自己中男のどこがいいのよ。」

夢は、朝抱いていた怒りをさらに面に出し始めていました。

「それは……。」

「着いたよ。」

「ー」

気が付けば三人は明のアパートの前に来ていました。

「いい？」

「うん。」

ピンポン

家のチャイムを鳴らすと明の母親である、真美が出てきました。

「あーあのー？明君いますか？」

花が真美に明について尋ねると

「は？知らないわーあんなダメ息子！」

と怒鳴り散られました。

「え？」

予想もしていない返答に三人は、驚き硬直してしまいました。

数秒間場が硬直したのち真美は「はっ」として、

「で？あんたらだれよ。」

機嫌の悪い真美は三人をせかしました。威圧的な態度をとる真美に対し、

「え？いや？あの。」

向日葵は、言葉に詰まります。そんな向日葵をみて真美は、詰め寄りました。

「あ？聞こえないーもっとはつきり言いなさいよ。」

詰め寄られた向日葵を庇うようにして花が間に入り、

「わたし達、明君の同級生なんですが、明君が学校に来なかったので様子を見に来たんです。」

と、花は真美に用件を伝えました、すると

「はー？あいつ行つてないの？」

「ちつ。」と真美は舌打ちをする

「ほんと！駄目ねあいつは。何で兄弟なのにここまで出来が悪いのかしら。」

「あの……、明君がどこに……。」

向日葵がたずねようとしたとき、

「うるっさいわねー居ないもんは居ないのよ。早く帰って頂戴！」

と真美は三人を追い返しました。

三人は、この状態だと話を聞いてもらえないと思ひ帰宅することにしましたが、

「あー！」

帰り道、向日葵は忘れ物をしたのに気が付いて、二人と別れたのち学校に戻っていききました。先生に頼み、演劇部の部室のカギを借りて部室に入ると……。

「えー！」

向日葵は、言葉を詰まらせました。そこには今回の台本

である『泥流地帯』の台本を持った明がいました。

「明？どうして？」

向日葵が尋ねようとすると明は大声で、

「仕方なかったんだよ！」

と叫びました。

「え？」

驚いた向日葵に対し明は、続けて

「俺は……俺は」

そういうながら明は、涙ながらに膝から崩れ落ちました。突然のことで向日葵はあたふたしますが、

「とーとりあえず！ゆっくり話そう？ね？」

と言って明を椅子に座らせました。

最初は、涙を流し、まともに喋ることが出来なかった明も落ち着きを取り戻し、何があつたのかの説明を始めました。どうしてこうなつたのかという……。

幼少期から父、母、弟と四人で暮らしていた明は、家族とともに毎日を幸せに暮らしていました。しかし、

「俺がまだ小学生の時。」

その言葉を聞いた瞬間、幼馴染の向日葵は思い当たりました。

「そうだ……、たしかその時あつた土砂災害で……。」

「ああ……、俺の親父は死んだんだ。」

そう、明は、二人が小学生の時に起きた日本最大級の土砂災害で父親を失いました。

「そのあとからだった……。母さんが狂ったのは。親父の死体が土砂の中からみつかったあの日から……。」

その日から真美は、おかしくなってしまった……。まだ小学生の明、まだ小学生にすらなっていないが弟を家に残し毎晩、飲みに出かけては酔っぱらって帰ってきた。

「酔った勢いで俺や弟を殴りつけようとしたことだってあった……。しかも母さんは、仕事をろくにしていなかったからな。」

一家はその後借金に追われ、命がけの生活を余儀なくされていった。

「だから俺は、中三の時から年齢を偽ってバイトをしながら家族を養っていたんだ。」

「……。」

あまりにも残酷な時間を聞かされた向日葵は黙るしかありませんでした。

「そんな、不幸続きの俺ら家族にも希望が出来た……。」

「もしかして……。弟君の存在？」

「ああ。」

「あいつは、俺以上に優れた才能をもっているからな。あいつなら金さえあれば自分の道でも成功できつから。」

「自分の道？」

向日葵の問いに明は、涙ながらの笑顔で応えました。

「おれ……。夢はあきらめなきゃいけないから。」

「あ……。」

「俺は死ぬ気で金をためるんだ……。そして弟のあいつには、夢を諦めさせるわけにはいかない。」

「もしかして？部活もそのために？」

「ああ……。ほんとにしたいんだけど……。でも俺には、そんな時間はないから。」

その発言を聞いた向日葵は少し考えて、

「……やろう？」

「え？」

向日葵のふいに出了た一言に明は思考が停止していました。「やろう？『泥流地帯』！本番は再来週の日曜日なんだから。」

「でも。」

向日葵からの提案に明は、ためらいを見せましたが向日

葵は、それを気にせず、

「部長命令！やりなさい！」

「……明のことを見つめました。」

「でも！おれは、吹っ切らなさい！」

出来る限りの抵抗をした明でしたが、

「うるさい！そんなに落ち込んで未練たらたらじゃないの！」

「……。」

「う……。それは。」

「いい？明は、私たち演劇部のエースなの！」

「あなたも『泥流地帯』読んだでしょ。本当は、拓一君やり

たいんですよ！」

「！」

「じゃあしよう！どうせこれが私たち三年の最後なんだから！最高の舞台にしよう！」

先ほどまで俯いていた向日葵の瞳は真つすぐな目にかわつて明を見つめました。

その真つすぐな瞳に明もさすがに折れたようでした。

「はー……わかったよ。」

「よし！じゃあ明日から練習再開！」

向日葵の太陽のような笑顔がまた咲いたのを見て、明もクスリと笑ひ。

「向日葵……」

と何か小声でつぶやきました。

その数日後明は、演劇部に戻り拓一として学校祭の最後の舞台上がることになりました。

体育館舞台裏のそで幕で明と裏方として参加した花が待機しています。

「いよいよね。」

花の緊張した若千震えた声がひびきました。

「……。」

その日の学校祭は、なぜか自分たちが経験してきた舞台と比べ物にならないほどの人が入っていました。

その多さに明はただ自分がこれから立つ舞台を無言で見つめています。

「すごいね……これだけの人数が集まったんだね。」

二人のもとにヒロインである福子の衣装に着替えた向日葵が走ってきました。

「二人とも気合入ってる？」

「ああ。」

「もちろん。」

と二人は答えました。

「じゃあ！私！これから他の皆にも挨拶に行かなくちや！それじゃあまた後で！花、行こう！」

と言って向日葵は、花を連れ、走り去っていきました。

そんな後姿を見つめていると明はなぜか不思議な気持ちになりました。

「この感じ……どつかで味わったかな……へへ、気のせいかな。」

と笑みを浮かべると、遠くの方から

「明……力貸して。」という向日葵の声が響いてきました。それを聞き明も大声で、

「待つてろ。今助けに行つてやるー！」

と返し明は、遠くにいる向日葵のもとへと走っていきました。

こうして二人が主役をはった『泥流地帯』は、演劇部過去最高の演技で幕を下ろしました。

後日。

「明？伝えたい事って何？」

向日葵はこの日、明に呼び出され部室に来ていました。

「ん？」

「なに？」

「いや……その。」

?

「ありがとう……な、向日葵。」

「……………どういたしまして！」

その時、向日葵はまた大きな大輪の花を咲かせたのでした……。

二人がこの先どういう人に出会い、どういう苦しみを乗り越えて生きたのか……それは誰にも分かりません。

しかし……きつとこの二人ならたとえどんな困難が襲い掛かろうとも乗り越えて……お金や環境にも負けない本當の幸せをつかめるでしょう。



(ペンネーム) アルフォンソ

僕は泥流地帯映画化を進める応援隊に高校一年生から入っていて、最初台本を渡されてこの部分を見てとき、「心だけは腐らせたくないの。」という言葉聞いて、とても悲しい気持ちになって、一番印象に残りました。

本では、三五三ページに書かれていて、耕作と福子が外で話している場面です。

「ほんとうよ、耕ちゃん。でもね、わたし、体が腐っても、どこが腐っても、心だけは腐らせたくないの。心だけは」。

福子は、親の借金のために夜の仕事をしています。大変な目にあつていて、仕事はやめることはできないし、助けてくれる人もいない状況で「心だけは、腐らせたくないの。」と耕作に向かつて言つた言葉に、とても深い苦しみの気持ちを感じたからです。

最後は節子たちに説得されて、夜の仕事から逃げる為に汽車に乗りました。

福子は、夜の仕事をもうしないでいいし、拓一と一緒に真実の幸せを見つけて、これから頑張ってほしいと思いました。



土富良野の古き歴史

(ペンネーム) 泥ちゃん

私は、泥流地帯の本を読んで十勝岳が噴火する前の苦労や噴火してからのみんなの心の変化を知ることができました。

噴火する前の苦労では、母親が髪結いになるために札幌に行ってしまう、周りから「男が恋しいから子供を置いていった」とか「後家」などと言われてきた拓一や耕作の辛い気持ちや悲しい気持ちを知ることができました。また、深城に挑発されて投げた石が節子の額に当たってしまったけど、節子は泣かずに我慢している強い部分を知って「十一歳なのにな」と思いました。

お年玉をもらって落としてしまった耕作のために、みんながお金を分けてあげる優しいところや、福子がお守り代わりに耕作に白い石をあげるところがとてもほっこりしました。

十勝岳が噴火してから復興するまでの苦労では、泥流で流されてしまった祖母と祖父、妹を助けるために拓一が泥流に飛び込んだり、耕作が勇気を出して福子を助けたたりしていた。その部分を読んだときは「自分ならできないな」と思ったし、深城に売られてしまった福子が、拓一に寄せる一途

な思いがあるのにも関わらず「汚れた女だから」と言って遠慮する所は気弱だなと思いました。

噴火する前と、噴火した後のみんなが強くなっていく部分を見て、強くならなければいけない程の苦労や悲しみがあつたんだなと思いました。

この本を読んで、辛くても踏ん張って生きていかなければいけないことを改めて学びました。

泥流散歩⑦「深山(みやま)峠」



旭川・美瑛方面から上富良野市街へ入る国道237線沿いの緩やかな峠。

耕作が教え子たちとともに訪れ「ふるさと」を語る名シーンの舞台は、現在も十勝岳の抜群な眺望と、隠れた桜の名所として親しまれています。

【(正)「深山峠」の章】ほか



【特別編】

「十勝岳爆発災害志」第十一章 第三節

罹災地児童の感想文より

五月二十四日

上富良野尋常小学校 尋二 吉田 てい

五月二十四日ハ、山ガクヅレテキテ、大スイガイニアツタ
ノデス。

私ノオバアサンモ、トウトウスイガイノタメニ、ナクナツテ
カナイヂユウガ、カナシガツテヰマス。私タシモモウチョツト
デ、シストコロデゴザイマシタ。ハダシデーシヤウケンメイニ、
ニゲマシタ。ソウシテ米村サンノトコロデフトンヲシイテスワ
ツテヰマシタ。

ソノアシタハハコニノツテ、ドロ水ノ上ヲヒイテモラツテヤ
ツトセンロニ出マシタ。ソレカラ山バカリツタツテ、シガイマ
デニゲマシタ。シガイノヲジサンノトコロカラシガイノガクカ
ウニ、カヨツテヰマシタガ、ミエダシタイノ方ガ、ヨクナツタノ
デ、ミエダシタイノガクカウヘニイサントカヨツテヰマス。

イキカヘリニハイヘモナクナツタノデサミシクテナリマセン。
トモダチモ大ゼイシンデカハイソウデス。ウチノオバアサン
ガナクナツテカラナントナクウチガサミシクナリマシタ。

ウチノマハヤヨコニハ、センロヤ大キナ木ヤデンシンパシラ
ガヨツテ、一メンノドロ水デス。イツ、モトノヤウニナルデセ

ウト、ニイサントハナシテヰマス。エハガキニ私ノウチガ出テ
ヰマス。

生残つて

上富良野尋常小学校 尋五 船引 武

萬雷の一時に落ちて來た様な物凄い音を立てて、谷間か
ら眞黒になつて寄せて來たものがありました。見る見る身
にせまつて一のみにされた様でした。もうだめだ、死んだ氣
で高い岡へ走りついたと思ふとバツと泥水がかぶさつたが、
夢中ではい上つた。皆死んで生き残つたのは僕一人だけだ
と思ふと、悲しいやら嬉しいやら、何とも云ふことの出來
ない感じがしました。それでも萬一、家の人が助かりはし
ないかと思つて探し廻りましたが、一人も見つかりません。
水田も家も父母も兄弟も流れてしまつた。自分一人残つて
もなんともし方がないから死んで皆の所へ行かうかと思ひ
ました。餘りの事に氣も遠くなつてしまひました。本當にこ
んな悲しい恐ろしい事はありません。お天道様もひどい、
情ないとうらみました。

後になつて幸にお父さんだけ生残つてゐました。お父さん
は武と呼びました。私もお父さんと呼び互いにだき合つて
思ふ存ぶん泣きました。

Twitter の部

【Twitter(ツイッター)】

多くのユーザーに利用される SNS(ソーシャルネットワークサービス)のひとつで、140文字以内の短文(つぶやき=ツイート)投稿による高い拡散性が特徴です。『泥流地帯』作文コンクールではこの機能(アプリ)を利用した投稿も審査対象として募集しています。



nimo
@nttintti

節子が耕作の俺がもらってやる発言をピカッと胸に焼きつけて、時には抛り所にしながら、あの父親のもとで強く生き続けてきたことを思うと耕作が節子に対するひとつひとつの選択に誠意を尽くしてくれたことに感謝しかないし、ふたりで並んで歩いてからかわれる青春シーンは泣くほど尊い。



ミツバチ
@kaorinbee

最初は拓一の姿が印象に残った。40過ぎて再読し、節子が耕作たちを思う一途さからとった行動がもう一つの物語なのだと気づいた。三浦綾子作品を一通り読んでからの再読だったので、その後の耕作たちが北海道綴方教育連盟事件(『銃口』参照)に巻き込まれていないかがとても気がかりだ。



おはなばたけ
@OTK_fujiko

物語の視点としては神の視点であったものの、重要な出来事があった日の日記を切り抜いたかのような非常にリアル感溢れる文章で惹き込まれました。読者と共に進行する、一生に降りかかる困難の意味を巡った思慮は人生の糧になることを感じ、本当に読んで良かったと強く思います。



tanizakiyomitai
@tanizakiyomitai

21年前と同じテーマで作文を書いた。当時から変わらないもの、当時より見えてきたものがあつた。どんなに理不尽でも、不条理でも、人生は続けなければならない。周囲がどうかじゃなく、私が何を信じるか。そう考えて動く力を培ってくれた大切な本。これからも、私は石村一家と生きていく。

壮大な自然の元では、何と人間は、ちっぽけな生き物だろうかと思い知らされた。拓一、耕作の恋模様と健気に生きる女性の強さも感動した。上富良野の自然豊かなステージで映画が制作されたら、どんなに嬉しいだろう。泥流地帯には、忘れかけていた人間愛が描かれた作品だと感じた。

@みきぼん

福子は、人気者だが汚い仕事をしている自分は拓一に似合わない、と控えめにしているところが、くどい。私は自分が福子と正反対だなと感じた。節子が背中を押してくれて、少しずつ自分の気持ちを拓一に伝えていく、福子の成長がわかって、私も節子のような人と出会いたいと思った。



Keisuke Yokoo
@KeisukeWyoming

幼少期北海道に住んでいた。上富良野に訪れた時の記憶は薄れてきているが、一面のラベンダーの香りは鮮明に覚えている。東京に引っ越した後、ふと『泥流地帯』を読んだ。何度も読んだ。僕は留学し日本を離れた。帰国前訪れた親友の故郷で、なぜかこの香りに再会した。出会えて、良かった。



はっちゃん
@sVOwGUDEWhASmhj

知識としての十勝岳噴火に実感を与える作品 各々の生きざまが胸に迫る
是非続も読みたい 映画化期待します



大田
@kenojorgensen

「僕は命をかけて復興する……。」
「芽がでたぞうっ」
強い勇気と諦めない気持ち。その
先人の思いを紡ぎ、この町とともに。
この町で生きていく。



shiooo
@Shiooo77nn

小学校6年生の時に会って
もう数え切れないほど読み返
している、小説の中で一番好き
な作品。読むタイミングで感
じることは変わってきているけ
れど、どんな苦難が待ち受けて
いようと、真摯に向き合い、真
面目に生きていれば道は拓け
るということを、いつでも教え
てくれる。



橋宮香也子 @KayakoHashimiya

『泥流地帯』は映画化されるのに、香也子たちは忘れられている
……ほぼ同時期に書かれて同じ「三浦綾子全集」8巻に収録されているの
にこの差は一体なぜなの……



★資料編 史実としての『泥流地帯』

小説『泥流地帯』が誕生したのは作者三浦綾子さんの夫であり口述筆記のパートナーである光世さんがきつかけでした。近郊での出来事でもあり旭川営林署勤務時代から関心の高かった十勝岳噴火災害について、聖書に記されるヨブ記になぞらえ、人間の苦難をどう受け止めるべきかをテーマとした作品の執筆を綾子さんに勧めたそうです。

執筆にあたり三浦夫妻は「悲劇と奇跡の地」上富良野町（被災当時は村）を幾度も訪れ、災禍の痕跡を巡り当事者から熱心に話を聞きました。執念ともいえる取材の果てに作品に織り込まれた現実（リアル）の「上富良野／十勝岳噴火災害」について紹介します。

■上富良野町（上富良野村）

北海道中央部、十勝岳をはじめ三方を山々に囲まれた盆地に位置する人口約一万五千人の町です。

入植開始は明治三十年。三重県の団体が草分地区（物語中、吉田村長や移転後の石村家があった地域）



上富良野町

に足を踏み入れたことが始まりです。

『泥流地帯』に描かれた、世界に類を見ない融雪型泥流災害からの奇跡の復興を成し遂げた現在の姿は、初夏のまちなみを彩る町花ラベンダー、メロン、ビール原料のホップ、ブランドポークや和牛など豊かな農畜産物、雲上の温泉郷や色鮮やかなパッチワーク丘陵など大自然がもたらす魅力に満ちあふれた、拓一らが思い描いた百年後の故郷そのものです。

しかしその一方で、豊かな大自然は時として大きな災いを呼び起こします。

■十勝岳噴火災害

十勝岳（上富良野町ほか／二〇七七m）は大雪山国立公園南部、十勝連峰の主峰です。日本百名山に名を連ねる秀峰であり、富良野岳、上富良野岳、美瑛岳などを巡る登山コースは多くの登山客で賑わいます。

連峰ではもともと若い（新しい）山ですが、現在も数十年おきに火山活動がみられる活火山です。



■大正噴火(大正十五／1926年)

物語の題材となったのは大正十五年五月二十四日夕方に起きた大規模な爆発です。この爆発により火山湖が崩壊、

さらにその噴出物は積雪を融かし、土砂や流木を呑み込みながら泥流となつて村を襲いました。

泥流の猛威は凄まじく、六十八トンの巨岩が旧石村家よりやや下流まで流されました【写真①】。現在は記念碑の土台として爆発記念駐車公園に設置されています(p.96)。

さらに泥流の威力を象徴するのが捻じ曲げられた線路です【写真②】。作中にもあるとおり線路の土盛

りはひとときわ高く、泥流の勢いを大きく弱めたとされています。

鉄路の損壊は著しいものでしたが復旧の勢いも凄まじく、被災翌日から数百人の工夫が動員され、四日後には貨客を満載した列車が運行されました。

これにより各地から支援物資や救援隊が押し寄せ、応急処置のみならず復興の動きが大きく加速します。



【写真①】 流下した巨岩(草分地区)



【写真②】 捻じ曲げられた線路(草分地区)

■石にかじりついても 上富良野村長 吉田貞次郎

物語に登場する吉田貞次郎村長は実在の人物であり、拓一や耕作らとの会話などを除き、作中では実際の言動や自身を巡る出来事などがリアルに記されています。



吉田貞次郎村長

吉田村長は三重県一身田村(現津市)に生まれ、十六歳で家族とともに北海道に渡りました。二十五歳から村議会議員などを歴任し、大正八年、三十四歳で初代村長(一級

町村制)に就任し、四期十六年に渡り近隣に名を轟かせる名村長として村政をけん引しました。

奇跡と称される泥流災害からの復興を果たした後、昭和十七年の衆議院議員総選挙で初当選。衆議院議員を一期務め、昭和二十三年、六十三年の生涯を閉じました。

〈参考文献〉

『十勝岳噴火泥流災害90年回顧誌』『郷土をさぐる(第三号、二十号)』(上富良野町郷土をさぐる会)

あとがき

『泥流地帯』作文コンクールは新型コロナウイルス禍にあつて自宅で過ごす機会が多くなったことを機に、三浦文学、特に現在上富良野町が実写映画化に取り組んでいる『泥流地帯』『続泥流地帯』を多くの人に読んでいただくとうと企画がスタートしました。

小中高生の皆さんはもちろん、「大人の作文」も楽しんでいただくため、対象年齢や文字数、内容に関する制約を一切取り払い「何でもアリ」の募集を行った結果、予想を大きく上回る数のご応募をいただきました。

どの応募作品も三浦文学愛、作品愛にあふれ、さまざまな視点から深くていねいに読み解かれたものばかり。読者同士で互いの理解を深めること、また『泥流地帯』を未読の方にも本を手にとる大きなきっかけになるのではないかと、この期待から、応募者各位のご理解とご協力の元、作品集発刊のはこびとなりました。

実写映画化を間近に控えた今、本作品集が原作小説『泥流地帯』『続泥流地帯』をお読みいただく、または再読いただける機会となることを心から願っています。（担当A）

第一回『泥流地帯』作文コンクール作品集

2021年3月発行

発行：『泥流地帯』映画化を進める会

事務局 北海道空知郡上富良野町大町 2-2-11

上富良野町企画商工観光課内

0167-45-6994